翻　訳

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈 (5)

中　沢　敦　夫

富山大学人文科学研究第 80 号抜刷
２０２４年２月

翻　訳

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈 (5)

中　沢　敦　夫

6583(1075) 年 [1)]

6584(1076) 年

6585(1077) 年

ノヴゴロドの大主教フェオドール (Федоръ) が逝去した [2)]。

6586(1078) 年

オレーグ [C4] がトムタラカン [3)] (Тмуторокань) へ逃げた。そして〔オレーグは〕ポロヴェツ人 (половци) を連れてやってきた。そして,〔オレーグは〕フセヴォロド [D] をソジツィ川 [4)] (на

1）*H1-M* の 6583(1075) 年以降の記事から，年代記記者，編集者，編集過程が大きく変わっている。そのため，本「翻訳と注釈 (5)」から，次の二点について新しい方針をとることにした。

1．これ以降,「書き継ぎ型」(постоянно ведущее летописание）の短い記事（これについては［中沢 2018：241 頁］参照）が基本的に続くことから，これまでのように記事に小見出しを付すことはやめた。編集史研究の便宜のために記事に振っていた番号（[№]）も取りやめた。

2．これ以降，並行記事の対比は *H1-M* と *H1-C* になる。そのため，フォントの使い分けによる異読の表記については，*H1-M* と *H1-C* の一方にだけある読みや，解釈にかかわる顕著な異読がある場合に，訳文のフォントを使い分けることとした。その場合, *H1-M* だけの読みには「MS **ゴシック体**」を用い，*H1-C* だけの読みには「**メイリオ体**」を用いた。フォントによって区別された異読については，注釈で必ず解説を行った。なお，*H1-M* と *H1-C* の読みが一致する部分は（テキストのほとんどを占める）「MS 明朝体」で表記されている。

2）ノヴゴロド主教（大主教）フェオドール (Феодоръ, Федоръ) については，本年代記では，［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 614；(4)：注 130, 208］に言及がある。その在任期間は 1069 年 10 月 24 日～1077 年。本記事に対応する記事は *ПВЛ* にないことから, ノヴゴロドの独自資料にもとづく記事である。

3）トムタラカンでは，1069 年頃からオレーグ [C4] の兄弟であるロマン [C2] が公支配をしていた。

4）*Ак* на Съжицах; *Бр* на Сжицахъ; *Сн* на Съжицяхъ, および, 対応の *ПВЛ* 記事では на Съжицѣ. この Сожицы/Сожица の地名は前置詞 на から河川が想定され，語形から Сожъ (Съжъ)（ソジ川）もしくはその支流が考えられるが，ソジ川はスモレンスク公領を北から南に流れドニエプル川の注ぐ川であることから，チェルニゴフからフセヴォロドが南下して迎え撃とうとした合戦場所としては不合理である。

諸注（[Погодин 1848: С. 3][Комментарий к ПВЛ 1950: С. 412]）では，これをスーラ川 (Сула) の支流オルジツァ川 (Оржица; Оржиця) に同定しており，これが定説になっている。実際，オルジツァ川は，ペレヤスラヴリ公領を縦断するように北から南へ流れており，ポロヴェツ人のルーシの地への遠征路と，チェルニゴフからの遠征路がちょうど出遭う地点にあたっていて地理的な合理性がある [Моргунов 2017: С. 207]。その場合，Сожица — Оржица の混同は，実際に存在する川の名 (Сожъ) との連想による，年代記記者（写字生）の誤解（誤記）によるものだろう。

Съжицахъ) で打ち負かした[5)]。

その年, チェルニゴフ〔の郊外〕で斬り合いがあった。そして, 二人の公が殺された。イジャスラフ [B] とボリス [E1] である[6)]。

5) この諸公の内争については，*ПВЛ*1078 年記事に詳しい経緯が書かれているので，これに拠ってまとめると次のようになる。1074 年の記事 [№ 216] でキエフ公だったスヴャトスラフ [C] は，1076 年 12 月に病没し，1077 年に，ポーランドから帰国したイジャスラフ [B] が再々度キエフ公となり，フセヴォロド [D] はチェルニゴフに移った。このときチェルニゴフ公だったボリス・ヴャチェスラヴィチ [E1] は，トムタラカンに行き，この地の公ロマン [C2] のもとに身を寄せた。他方，スヴャトスラフの息子オレーグ [C4] は，おそらく伯父たちの意向（潜在的なキエフ公位継承者を監視するため）によって，チェルニゴフのフセヴォロド [D] のもとに身を寄せたが，オレーグがなかば人質の身を嫌って，やはりトムタラカンへ逃れる。かれは同じ境遇のボリス [E1] と語らい，二人はポロヴェツ人と協定して，チェルニゴフを奪還するための遠征を行った（1077 年春～夏）。そして，これを迎え撃つためにチェルニゴフから出陣してきたフセヴォロド [D] の討伐軍は，8 月 25 日のソジツァ（オルジツァ）川の戦いで敗北を喫し，フセヴォロド側の主だった軍司令官たちも戦死した。

6) この行の記事も非常に短いが，*ПВЛ* には内争の進展について詳しい記述がある。それによれば，前注のソジツァ（オルジツァ）川の戦いで敗北したフセヴォロド [D] は, 戦場からキエフの兄イジャスラフ [B] のもとへと逃げのびた。そして，イジャスラフ [B] とその息子ヤロポルク [B2]，フセヴォロド [D] とその息子ウラジーミル・モノマフ [D1] の 4 人は，急ぎキエフで軍兵を徴集すると，チェルニゴフへ向かった。チェルニゴフ人は，おそらくイジャスラフの軍の掠奪を嫌って，立てこもって 4 人を城内に入れようとしなかったが，ウラジーミルが強引に城門を破って突入した。そしてまもなく，オレーグ [C4] とボリス [E1]，ポロヴェツ人の遠征軍がチェルニゴフに近づいているとの報を受けて，イジャスラフ [B] はチェルニゴフ城市から出撃して，かれらを迎え撃つために進軍し，ネジャチナ・ニヴァ (Нежатина Нива) の原（チェルニゴフ南東 65km の現在のネージン市 (Нежин) に同定するなど諸説あるが，場所についての定説はない）で両軍は交戦し，まず，ボリス [E1] が戦死し，次にイジャスラフ [B] が敵方の槍で突き殺された（1078 年 10 月 3 日）。オレーグ [C4] は少数の従士を伴って，トムタラカンへ逃げ帰った。

6587(1079) 年

グレーブ公 [C1] がヴォロク [7] (Волокъ) の向こうで殺された。5 月 30 日 [8] のことだった。

7）この「ヴォルクの向こうで」(за Волокомъ) のヴォロク (волокъ) は普通名詞としては，「連水陸路」すなわち，異なる水系を最短でつなぐことができる地点を意味している。多くの注釈は，これを，オネガ湖，白湖（ベロオゼロ），シェクスナ川流域を結ぶ一帯でその東側（「向こう側」）としている（Комментарии *ПВЛ* 2012: С. 359–360] など）。

しかしながら，ボグダノフの年代記および公文書史料におけるそれぞれの時代の волок（主要な川の連水地帯）の語の用例を検討した考察によれば，この Волок は，*ПВЛ* の冒頭で，「それはギリシアからドニエプル川を通る。ドニエプル川の上流にはロヴァチ川 (Ловоти) までの連水陸路 (волок) があり，ロヴァチ川 (Ловоти) を通って大きな湖イルメニ (Ылмерь озеро великое) に入る」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 7] と記されている　волок（連水陸路）そのものであり，ヴェリーカヤ川 (Великая)，ロヴァチ川 (Ловать)，オボリ川 (Оболь) の最上流域（[Насонов 1951: С. 80-81］の間の地図 Новгородская земля. Оновная часть を参照）の Волок と解釈することがもっとも相応しいとしている [Богданов 2005: С. 236-237, 241-243]。つまり，ノヴゴロドを追われたグレーブ [C1] は，ノヴゴロドとドニエプル川を結ぶ「ヴォロク」を経て故郷であるチェルニゴフを目指したが（次注のように，かれの遺体は現実にチェルニゴフに運ばれて埋葬されている），その途上でこの地のチューヂ人に殺されたというもので，この説をとるべきだろう。

8）この記事が置かれている 6587(1079) 年は，*ПВЛ* の対応記事では 6586(1078) 年に置かれており，そこでは死亡の日付は書かれていないが，「かれの遺体はチュルゴフの救世主教会のうしろに，7 月 23 日に安置された」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 199] と，埋葬の場所と埋葬の日付が記されている。その場合，グレーブが死んだ年については，*H1* では 1079 年，*ПВЛ* では 1078 年と異同が生じる。

これについては，*ПВЛ*1078 年記事は，オレーグのトムタラカンへの逃亡（4 月 10 日）⇒グレーブ [C1] の死とチェルニゴフでの埋葬（7 月 23 日）⇒スヴャトポルク [B3] がグレーブの代わりとしてノヴゴロドに派遣され公座に就く⇒フセヴォロド [B] はソジツァ（オルジツァ）川の戦いでオレーグ [C4] とポロヴェツ連合軍に敗北（8 月 25 日）⇒ネジャチナ・ニヴァの戦いでイジャスラフ [B] が戦死（10 月 3 日）と時系列が明確でありかつ整合しており，グレーブの死の記事も前後の記事と関連付けられて置かれていることから見て，こちらの「1078 年」と解釈するほうが確実性が高いと見るべきだろう [Бережков 1963: С. 217]。現在の事典等に記される定説でもグレーブの死亡年は 1078 年となっている。*H1* の死亡記事が 6587(1079) 年に置かれていることについては（*H1* を典拠としている *C1*, *H4* も同様），独自史料を年代記記事に組み込む際の錯誤によるものか。

なお，*H1* 記事の死亡の日付「5 月 30 日」については，独自史料に拠るものだろうが，*ПВЛ* 記事の埋葬の日付 7 月 23 日と時系列が整合しており，信頼できるだろう。つまり，グレーブ公 [C1] の死亡日は 1078 年 5 月 30 日と考えられる。

なお，本年代記の「ノヴゴロド公表」[№ 107] には，「かれ〔グレーブ〕は城市から追放された。かれはヴォロクの向こうへ逃げた。そしてチューヂ人が〔かれを〕殺した」(и выгнаша из города, и бѣжа за Волокъ, и убиша Чюдь)［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 491］との独自の記録がある（さらに *Км* 写本冒頭のノヴゴロド公表にも同様のテキストがある [НПЛ: С. 470]）。また，対応する *ПВЛ*1078 年記事では，「ザヴォロチエで」(в Заволочии) で没したとなっている。グレーブの父親でキエフ公のスヴャトスラフ [C] は，1076 年 12 月 27 日に病没しており，この「追放」は，ノヴゴロドの反グレーブ勢力が（ノヴゴロドでのグレーブの支配が安定していなかったことについては [№ 210] 参照），キエフ公の後ろ盾を失ったグレーブを追放して，新しいキエフ公イジャスラフ [B] の息子（スヴャトスラフ [B3]）の招聘を図ったと理解するのが妥当だろう。

同じ年，ポロヴェツ人がロマン [C2] を殺した[9)]。

6588(1080) 年

6589(1081) 年

6590(1082) 年

6591(1083) 年

6592(1084) 年

6593(1085) 年

6594(1086) 年

6595(1087) 年

6596(1088) 年

聖ミハイル教会が献堂された[10)]。

9）トムタラカン公ロマン [C2] の死に関する本記事は非常に短いが，*ПВЛ*6587(1079) 年記事には次のような詳しい説明がある。「ロマンが，ポロヴェツ人 とともにヴォイニ (Воинь) に到来した。フセヴォロド [D] が，ペレヤスラヴリのそばにとどまってポロヴェツ人と和を結んだので，ロマン [C2] はポロヴェツ人とともに〔トムタラカンへ〕引き返した。そしてポロヴェツ人は 8 月 2 日にかれ〔ロマン [C2]〕を殺した。ヤロスラフ [13] の孫であり，スヴャトスラフ [C] の息子であるかれ〔ロマン〕の遺骨は今そこに〔トムタラカンに〕ある。他方，ハザール人 (козаре) がオレーグ [C4] を捕らえて，海のかなたのコンスタンティノポリスに流した。〔そのため〕，フセヴォロド [D] はトムタラカンに代官としてラチボル (Ратибор) を据えた」[ПСРЛ T. 1: Стб. 204]。以上の記事の文脈から見ると，ロマン殺害は，キエフ公となったフセヴォロド [D] が，潜在的な反対勢力を排除するために，ポロヴェツ人を使って（「和を結んだ」）謀殺したと考えられる。フセヴォロドは，あわせて，ロマンの兄弟オレーグもトムタラカンから排除して，この地を自らの支配化に置くために配下の軍司令官を代官として派遣したということだろう。

10）これに対応する記事は，*ПВЛ* ではやはり 6596(1088) 年の項に，「フセヴォロド [D1] の修道院の聖ミハイルの教会が，府主教イオアン〔二世〕および主教ルカ，イサヤ，イオアンによって献堂された。その時，ラザリがその修道院の典院に就いた」[ПСРЛ T. 1: Стб. 207] とある。本記事は，この記事の最初の文（5 語）をそっくり写し取ったもの。これは，キエフのヴィドビチのミハイル修道院 (Киев-Выдубицкий Михаиловский манстырь) の主教会のことで，*ПВЛ*1070 年の項に定礎についての記事があることから，18 年かかって完成したことになる。

6597(1089) 年。

洞窟の教会が府主教イオアンによって献堂された[11)]。

同じ年に，フセヴォロドの娘が逝去した[12)]。

11）この記事も，*ПВЛ*1089 年記事の，「フェオドーシイの洞窟修道院の聖なる聖母教会 の献堂式が府主教イオアン〔二世〕によってなされた……」(Священа бысть церкви печерская святыя Богородица манастыря Феодосьева Иоанномь митрополитомъ...)[ПСРЛ Т. 1: Стб. 207-208] の下線部分を写し取っただけである。

この，聖母就寝祭 (Успение) に献堂された「洞窟修道院の教会」(церквь Печерьская) は，1073 年に典院フェオドーシイが定礎したが [№. 214]，長らく建設が続いていたもので，16 年後にようやく完成したことになる［ノヴゴロド第一年代記 (4)：注 246］。『キエフ洞窟修道院聖者伝』の第 6 章によると，献堂式は 1089 年 8 月 14 日（聖母就寝祭）に行われている [БЛДР Т. 4: С. 314]。

12）この記事の原文 (*Км*) は Того же лѣта преставися Всеволожа дщи だが，*Н1-С* (*Сн*) は Томь же лѣтѣ прѣставися. となっている。*Н1-С* では一見主語がないように見えるが，これは前の記事とひとまとまりと考えれば，やや苦しいが「府主教イオアン」を主語として，その死亡についての記事という解釈が可能である。実際，*ПВЛ*1089 年の対応記事を見ると，前注の洞窟修道院教会献堂の記事の次に，В се же лѣто преставися Иоанъ митрополитъ（この年に府主教イオアンが逝去した）という文言があり，内容的に符合している。つまり，*Н1-С* 記事の分かり難さは，*ПВЛ* 記事から，語句を極度に短く抽出して作ったことによっている。これに対して，*Н1-М* では，「フセヴォロドの娘」(Всеволожа дщи) の主語があるが，この語句は，*Н1-С* の分かり難さを解消するために，後代の編集段階で付されたことは明白である。この語句は，同じ *ПВЛ*1089 年記事の数行あとにある，В се же лѣто иде Янъка въ греки, дщѣ Всеволожа. の下線部が採られたと考えられ，これは編集作業の際の錯誤による可能性が高い。

6598(1090) 年。

ヤンカ[13](Анка)が府主教として去勢者を連れて来た[14]。かれはイオアン[15](Иоанъ)と呼ばれていた[16]。

同じ年，ペレヤスラヴリにおいて (въ Переяславлѣ)，聖ミハイル教会が献堂された[17]。

6599(1091) 年。

洞窟修道院典院のフェオドーシイ[18]の〔遺骸〕が洞窟から修道院へと移された[19]。

13）*Км* Анка; *Сн, Ак* Янъка; *Бр* Янька. かの女については，*Ип* 1086 年記事に「フセヴォロドは聖アンデレ教会を定礎した（…）教会に修道院を創った。ヤンカという名の彼の娘が乙女のままそこで剃髪した」(Всеволодъ заложи церковь святаго Андрѣя <...>，створи у церкви тоя манастырь，в нем же пострижся дщи его дѣвою，именемь Янька) とあり，1089 年記事では，「この年ヤンカ (Янъка)，フセヴォロドの娘がギリシア人のもとに行った」とある，さらに 1112 年には逝去の記事もある。ヤンカ (Янка) の名はおそらく通称で，修道名はおそらくイオアンナ (Иоанна) だったろう [Литвина, Успенский 2006: С. 124]。フセヴォロドの家庭内での呼称が年代記でも使われたものか。

14）*Ип* の 1089-1090 年記事の時系列から推定すると，1089 年 8 月 14 日に洞窟修道院教会献堂式，秋（8 月～ 9 月）に府主教イオアン二世の死であり，死後すぐに，ヤンカは父のキエフ公フセヴォロド [D] の名代として，新たな府主教の招請するための使節として，コンスタンティノポリスに派遣されたと思われる。そして，1090 年の春には，府主教イオアン三世（去勢者）を連れてキエフに戻って来たことになる。

15）このイオアン三世は，*ПВЛ* 記事（*Ип* 1090 年，*Лвр* 1089 年）によれば，「ちょうど一年滞在して死んだ」(от года до года пребыв умре) とあることから，1090-91 年の在位だったことがわかる。さらに，「この人物は字が読めず，知性やその言葉は単純なものだった」(Бѣ же сеи муж некниженъ и умомъ прость и просторѣкъ) とあり，ルーシでの評判は良くなかった。[Карпов 2017: С. 169-170]。教会規定によれば，自発的な去勢者は聖職者になれなかったが，政治的な処罰などによって去勢された者には，そのような制限はなかった [Назаренко 2019: С. 88] ことから判断すると，ビザンツの政界で去勢の刑罰を受けた身分のある者が，あまり修行を経ないままに（文字が読めず），高位聖職者（府主教）としてルーシに派遣されたものか。

16）この記事も，*ПВЛ*1089 年記事（*Ип* では 1090 年）の，「ヤンカが府主教イオアンを連れて来た，去勢者であり，かれを見た人々は…」Приведе Янка митрополита Иоана Скопьчину, егоже видѣвше людье... の下線部を抜き出して，зваху（呼ばれていた）を補って作ったもの。

17）この記事も，*ПВЛ*1089 年記事の冒頭部分を引き写したもの。*ПВЛ* では，これに続いて，首座ミハイル教会の献堂式がペレヤスラヴリ独立府主教エフレム (Ефрем митрополит) の手でなされ，聖堂は広大で荘厳であること，さらにペレヤスラヴリでの教会建設について触れられている。なお，当時のペレヤスラヴリの支配公はフセヴォロド [D] の息子ロスチスラフ [D2] だった。

18）フェオドーシイの表記に異同がある。*Км* Федосии; *Сн* Федос; *Ак, Бр* Феодосии.

19）フェオドーシイの遺骸の改葬については，*ПВЛ*6599(1091) 年の項に詳細な記事がある。本記事はその事実関係だけを摘要したものである。なお，*ПВЛ* 記事では，1091 年 8 月 14 日木曜日の午後の第一刻に改葬が行われたと記されている。

同じ年，府主教の去勢者イオアンが逝去した[20]。

6600(1092) 年。

ポロツク人に天罰 (рана) が襲った。なにかが通りを歩いているようであり，多くの軍兵がいるように思われ，また馬の蹄が見えるようだった。もし誰かが，屋外へ抜け出そうとすると，目に見えないものによって突然に殺されたのだった[21]。

6601(1093) 年。

フセヴォロド [D] が逝去した[22]。

そしてスヴャトポルク [B3] がキエフにおいて公座についた[23]。

同じ年に，ポロヴェツ人が，スヴャトポルク [B3] とムスチスラフをトレポリにて[24] 打ち負

20）これに対応する記事は *ПВЛ* にはない。おそらく，上注 15 の *ПВЛ* のイオアン三世死去の記事の内容を受けて, *H1* の編者が書き加えたものだろう。ただ, *ПВЛ* 記事では「死んだ」(умре) という卑小表現（府主教に対する低い評価の反映：上注 15）なっているのに対して，*H1* では「逝去した」(прѣставися) と高位聖職者に対する通常の敬意表現に書き換えている。

なお，15 世紀の *C1* では対応記事を Того же лѣта успе Иоан скопець, митрополит と「就寝した」(успе) という最高級の敬意表現に書き直している。『キエフ洞窟修道院聖僧伝』などによれば，当時のルーシの教会では去勢者 (εὐνοῦχος の音写 евнух，もしくはスラヴ語で скопец，世俗の人物の場合は каженик) は聖職者のなかでも特別な存在として敬意を払われていたようであり，洞窟修道院に修道院規則をもたらし，後にペレヤスラヴリ府主教になったエフレム (Ефрем) も去勢者だった。успе の書き換えには，そのような去勢者観が反映しているのではないか。

21）この記事には，*ПВЛ*1092 年に対応の記事があるが，ポロツクにおける怪奇現象という内容は共通しているものの, *H1* のテキストは表現を換えて, *ПВЛ* 記事の内容を要約している。とくに, *ПВЛ* では, 人々が「悪鬼によって傷つけられる」(уязвенъ от бѣсовь) というキリスト教的な解釈になっているが，*H1* では，軍兵 (вои) のようなものに殺される (убиен) という直接的な天罰 (рана) が強調されている。このような書き換えには，おそらく，11 世紀後半に何度もポロツクの軍勢に襲撃を受けたノヴゴロド人の，ポロツクへの強い反感が反映しているだろう。

22）フセヴォロド [D] の死は 1093 年 4 月 13 日のことで，*ПВЛ* には詳細な記事があるが，ここでは事実だけが記されている。

23）スヴャトポルク [B3] のキエフ公座就位については，キエフにおける暴動，ウラジーミル･モノマフ [D] の譲歩などについて，*ПВЛ* には詳細な記事があるが，ここでは事実だけが記されている。就位は 1093 年 4 月 24 日のことである。

24）この *H1-C* だけの読みの原文は，и Мьстислава на Трьполи 。「トレポリ」の地名から見て 1093 年 5 月 26 日のストゥグナ川の合戦の敗北 [ПСРЛ Т. 1: Стб. 219, 222] を明らかに指しており，そこで戦死したのは，ロスチスラフ・フセヴォロドヴィチ公 [D2] であることから，Мьстислава は Ростислава の明らかな誤記である。この *H1-M* と *H1-C* の読みの異同については，*H1-C* の読みが本来的であり，*H1-M* の編者は，「ムスチスラフ」が誤記であることに気が付いて，これを地名（トレポリ）とともに削除したと考えるのが妥当ではないか。

かした[25)]。

6602(1094) 年。

6603(1095) 年。

スヴャトポルク [B3] とウラジーミル [D1](Володимирь) はダヴィド [C3](Давыд) を攻めるべくスモレンスク (Смоленьск) へ軍を進めた。そしてダヴィド [C3] にノヴゴロドを与えた[26)]。

同じ年，ルーシにイナゴ (прузи) が到来した。8 月 28 日だった[27)]。

6604(1096) 年。

25）この記事は，*ПВЛ* にはフセヴォロドの死に関連した 1093 年ポロヴェツ人の襲来，ストグナ川とジェラニ川での合戦とルーシ諸公軍の敗北について詳しい記事があり，これを踏まえてキエフ公スヴャトポルク [B3] の敗北の事実だけを記したものだろう。

26）これは本年代記の前後関係がなく，これに対応するもしくは典拠となる記事は *ПВЛ* 記事に見出すことができないことから，ノヴゴロドの独自資料にもとづく独自の記事である。つまり，1093 年 4 月のフセヴォロド [D] の死以降，おそらくスモレンスクに公座をもっていたダヴィド・スヴャトスラヴィチ [C3] に対して，1094 年にキエフ公スヴャトポルク [B3] とチェルニゴフ公ウラジーミル・モノマフ [D1] が連合してかれの武力を背景にスモレンスクから排除しようとしたもの。そして，協定を結んで，モノマフの子ムスチスラフ [D11] と交代に，ダヴィドをノヴゴロド公に就かせ，それについてノヴゴロド人も納得した（「与えた」(*Км* даша, *Сн* вдаша) が三人称複数アオリスト形であることから，ノヴゴロド人が主語として想定されている）ということだろう。

Лвр 写本所収の「ウラジーミル・モノマフの教訓」の中にも,「そして, わたしはスモレンスクに向かい, ダヴィド [C3] と和解した」(И Смолиньску идохом, с Давыдомь смирившеся)[ПСРЛ Т. 1: Стб. 249] という記事があり，1094 年（おそらく初頭）の，スヴャトポルク＝ウラジーミル連合のスモレンスクへの遠征に対応している可能性は高い。

1094 年初頭の遠征についてのこの記事が，本年代記の 6603(1095) 年の年紀に置かれているのは，*H1* 編者の錯誤によるものかもしれないが，理由はよく分からない。

なお, 本年代記の「ノヴゴロド公表」[№ 107] によれば,「ムスチスラフ [D11] が 5 年間〔ノヴゴロドの〕公支配をしたあとロストフへ行き，ダヴィド [C3] が公支配のためにノヴゴロドにやって来たが，2 年後に追放された」[НПЛ: С. 470] とあり，時系列では，ムスチスラフの公支配は 1088/89 年～ 1094 年初頭で，ダヴィドの公支配は 1094 年初頭～ 1096 年初頭と想定することができる。

27）この記事は，*ПВЛ*1095 年に対応する記事があり，その最初の部分だけを採っている。ただし,「ルーシへ」(в Русь) の語句は *ПВЛ* にはなく，これは，ノヴゴロドの地ではなく，ルーシの地（つまりキエフ，チェルニゴフ，ペレヤスラヴリ地方）に蝗害が起きたことを強調するために，*H1* 編者が付加したものだろう。

6605(1097) 年。

ヴァシリコ・ロスチスラヴィチ [A13](Василко Ростиславиць) が盲目にされた[28]。

同じ年の冬に，ムスチスラフ [D11] とノヴゴロド人[29] は，クーラチツァ川[30] で (на Кулатьскѣ)，大斎のときに，オレーグ [C4] を打ち負かした[31]。

そして同じ年の春に，対岸が焼けた。また，3 日目には内城が焼けた[32]。**イリカの**配下の者たち (Илькину чадь)[33] が打ち殺された[34]。

28）ヴラジミル・ヴォルィンスキイ公ダヴィド・イーゴレヴィチ [F1] が，策謀によってテレボヴリ公ヴァシリコ・ロスチスラヴィチ [A13] を捕縛し，ついにはその眼を潰すにいたる事件（1097 年 4 月）については，*ПВЛ* では，非常に浩瀚な物語 [ПСРЛ Т. 1: Стб. 257-273] が収録されている。ここでは，その事実だけを書き記したもの。

29）下注 31 の *ПВЛ* 記事では，「ノヴゴロド人，ロストフ人，ベロゼロ人たち」が軍兵としてムスチスラフのもとに集まったとされているが，その中で「ノヴゴロド人」(съ новгородци) だけを書いたのは，ノヴゴロドの年代記編集者の判断によるだろう。

30）「クーラチツァ川」(Кулатьска) は，他の史料では Кулачьца, Колачьца, Колагша などと表記され，現在のコロクシャ川 (Колокша) のことで，クリャジマ川 (Клязьма) 左岸の支流。その河口は現在のヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕から 20km ほど離れている。

31）この記事は，オレーグ [C4] が 1096 年 9 月にムーロムを占領し，さらにロストフとスーズダリを確保したが，ノヴゴロド公ムスチスラフ [D11] とヴャチェスラフ [D16] の部隊が，スーズダリ近郊のコロクシャ川の戦いでオレーグ [C4] とヤロスラフ [C5] の連合軍を破った出来事についての記事で，*ПВЛ*6604(1096) の項の末尾の記事に詳しい経緯が記されている。本記事はその事実関係だけを抜き出したものである。なお，戦いの日付については，*H1* では「大斎の時」（1097 年の大斎は 2 月 16 日～4 月 4 日）となっているが，*ПВЛ* 記事では，「大斎のテオドロスの週のあとの金曜日」，すなわち 1097 年 2 月 27 日とより具体的に記されている。

32）1097 年春の大火についての記事。対岸 (онъ полъ) は内城 (Детинец-город) があるソフィア区 (Софийская сторона) から見たヴォルホフ川の対岸のことで，いわゆる商業区 (Торговая сторона) を指している。「3 日目」(3-и день)，すなわちその火事の翌々日には，ソフィア区に延焼したということだろう。これは，*ПВЛ* に対応する記事がないことから，ノヴゴロドの独自資料にもとづく記事であると考えられる。

33）*Км, Ак* Илькину; *Бр* Илькинъ; *Сн* Икнину の異読がある。*H1-M* 諸写本の読みに従えば，「イリカ」（Илька，おそらく人名 Илья の指小形）という人物の配下の者たちという解釈が可能であり（ドイツ語訳，邦訳），*H1-C* の読みからは，カラムジンが提案しているように [ИГР-2: прим. 178]，И княгинину と訂正読みをして，「公妃」の配下の者（家来）たちという解釈が可能である（英訳・ポーランド語訳）。後者の場合，当時のノヴゴロド公ムスチスラフ [D11] の妃は，スウェーデン王女（インゲ一世ステンキルソン〔スウェーデン王在位 1080-1112 年〕の娘）のクリスチナ (Kristina Ingesdotter) であり，1090/91 ～ 1096 年初めに結婚したと推定されている [Домбровский 2015: С. 73]。大火の混乱の中で，スウェーデンからやって来たばかりの王女の従者，召使いたちが何らかの排斥を受けた（избиша）という可能性はあるだろう。

34）この記事は，*ПВЛ* に対応する記事がないことから，ノヴゴロドの独自資料にもとづく記事である。

6606(1098) 年

6607(1099) 年。

6608(1100) 年

6609(1101) 年。

ポロツク公フセスラフ [081:L] が逝去した[35)]。

6610(1102) 年

6611(1103) 年

ルーシの地のすべての兄弟諸公がポロヴェツ人を攻めるためにスーテニ川[36)]へ(на Сутень) 進軍した。そしてかれら〔ポロヴェツ人〕を打ち負かした。そしてかれら〔ポロヴェツ人〕の諸侯と財産を獲得[37)] した[38)]。

同じ年，モルドヴァ人 (моръдва) はヤロスラフ [C5] をムーロムで (Мюромѣ) 打ち負かした[39)]。

35）この記事は，*ПВЛ*6609(1101) 年記事の冒頭を抜き出したもの。*ПВЛ* 記事では，逝去した日付を「4 月 14 日の昼の第 9 刻，水曜日のこと」(мѣсяца априля въ 14 день, въ 9 часъ дне, въ среду) と具体的に記されている。

36）「スーテニ川」(Сутень) は，アゾフ海に注ぐ現在のモロチナヤ川 (Молочная) に同定されている [Кудряшов 1948: С. 91-95]，その上流はトクマチ川 (Токмач) と呼ばれている。

37）この「戦利品」については，次注の *ПВЛ* 記事の締めくくりの次の文言を要約したもの。すなわち「〔ルーシ勢は〕家畜や羊や馬や駱駝を奪い，財物や奴隷ともに幕舎を奪い，ペチュネグ人とトルク人を幕舎もろとも獲った 。そしてかれらは，多くの捕虜と栄誉と大きな勝利をもつてルーシに帰り着いた」。

38）*ПВЛ*6611(1103) 年の項には，1103 年 3 月～ 4 月に，キエフ公スヴャトポルク [B3] とペレヤスラヴリ公ウラジーミル・モノマフ [D1] の主導のもとに，ポロヴェツの地の奥深くまで掠奪遠征を行った事件についての詳細な記事がある。「ルーシ人の地の兄弟諸公」とは，スヴャトポルク，ウラジーミル・モノマフの他に，ダヴィド・スヴャトスラヴィチ [C3]，ダヴィド・フセスラフヴィチ [L4]，ムスチスラフ・イーゴレヴィチ [F21]，ヴャチェスラフ・ヤロポルコヴィチ [B22]，ヤロポルク・ウラジーミロヴィチ [D15] が参加したが，オレーグ [C4]（ノヴゴロド・セヴェルスキイを拠点としていた）は健康を口実に参加しなかった。

39）*ПВЛ*6611(1103) 年の項に，「同じ年の 3 月 4 日にヤロスラフ [C5] がモルドヴァ人と戦い，ヤロスラフ [C5] が打ち負かされた」(Того ж лѣта бися Ярославъ с Мордвою месяца марта въ 4 день, и побѣжденъ бысть Ярославъ) と対応記事があり，これが典拠と考えられる。ただし，本記事の原文が，Того же лѣта побѣдиша Ярослава моръдва Мюромѣ であることから，これまでのような抽出の引用ではなく，*H1* 編者が独自に文を組み立ており，かつ「ムーロムで」という新しい情報を加えている。これは，ヤロスラフがムーロム公であったことによるのだろう。

同じ年，ムスチスラフ (Мьстиславъ) 公 [D11] は城塞区[40] (Городище) に聖なる[41] 受胎告知教会[42] を定礎した[43]。

6612(1104) 年

ルーシの府主教 (митрополит рускыи) ニキーフォル[44] (Никифоръ) がやって来た[45]。

6613(1105) 年

主教たちが叙任された[46]。ラザリ[47] (Лазарь), ミナ[48] (Мина), アンフィロヒイ[49] (Анфилохии) である。

40）ノヴゴロドにおける「城塞区」(Городище) とは，リュリコヴォ・ゴロディシチェ (Рюриково городище) とも呼ばれ，ノヴゴロドの公座に就いた諸公のノヴゴロド支配の拠点地を指している。内城から 4km ほどヴォルホフ川を遡った対岸に位置している。

41）「聖なる」(святое) の語は *Км* の固有読みで，後代の挿入によるもの。

42）ヤーニンは，この年に生まれた自分の息子フセヴォロド [D111] の洗礼名がガヴリエル (Гавриил) で，聖母への受胎告知の天使の名前であることから，この教会を受胎告知 (Благовѣщение) に献堂したと推定している [Янин 2008: С. 45]（これについては文献も含め [Домбровский 2015: С. 104] を参照）。なお，この教会は，公やその従士たちにとってその後重要な役割を果たしたようであり，1343 年には石造りの聖堂に建て替えられている [НПЛ: С. 357]。

43）これは，*ПВЛ* に対応する記事がないことから，ノヴゴロドの独自資料にもとづく記事であると考えられる。

44）ギリシア人府主教ニキーフォルの在位は 1104-1121 年で，長年キエフの府主教座にあって，ルーシの政治，教会活動に深くかかわった [Карпов 2017: С. 319-321]。「やって来た」とは，コンスタンティノポリス総主教によってルーシ府主教に叙任され，帝都からキエフへ派遣されたということ。*Лвр*, *Рдз*, *С1*, *НК*1 では，6629(1121) 年の項にかれの逝去の記事があるが。*Н1* にはない。

45）*ПВЛ* (*Лвр*, *Ип*)（*Н4*, *НК*1 も）では，「ルーシの」(рускыи) の語はなく，代わりに「ルーシへ，12 月 6 日に」(в Русь мѣсяца декабря въ 6 день) の文言が追加されている。おそらく *ПВЛ* が本来の読みで，*Н1-М* の「ルーシの」(рускыи) は *Н1* の編者による書き換えだろう。митрополит руськыи は府主教表 [№ 108] でも使われている慣用表現。また，典拠 (*ПВЛ*) の日付を削除するのは，*Н1* 編者の常套的手法である。

46）それまで一時的に府主教座が空白であったのが，ニキーフォルが府主教として到来した（前注）おかげで，ルーシの各地の主教の叙任が可能となり，次々と叙任が行われたということだろう。典拠と考えられる *ПВЛ*1105 年記事 では，各主教について，在任の場所（都市）と叙任の日付が記されている（下注 47, 48, 49）。本記事はそれを一つに取りまとめて，場所と日付を削除して作成されたもの。

47）ラザリは，*ПВЛ* によれば，ペレヤスラヴリの主教で 11 月 12 日に叙任されている。

48）ミナは，*ПВЛ* によれば，ポロツクの主教で 12 月 13 日に叙任されている。

49）アンフィロヒイは，*ПВЛ* によれば，ヴラジミル＝ヴォルィンスキイの主教で，8 月 27 日に叙任されている。

同じ年，〔ノヴゴロド人は〕ラドガ (Ладогу) へ戦争のために進軍した[50]。

そして，小川 (ручье) から，スラヴノ (Славно)〔街〕を経て聖エリヤ (святыи Илья までの家屋が燃えた[51]。

6614(1106) 年。

ポロヴェツ人をドナウ川で (на Дунаи) 打ち殺した[52]。

同じ年に，フセヴォロド [D111] の岳父[53] (тѣсть Всеволожь) であり，チェルニゴフの[54] (в

50）本年代記 *H1*6624(1116) 年の項（*ПВЛ* では 1114 年）に「ムスチスラフ公 [D11] の時代，代官パーヴェル (Павел посадник) によってラドガ の盛り土の上に石造りの壁が定礎された 」とあるように（下注 109），12 世紀の 10 年代は，ノヴゴロドがラドガの制度的な支配を積極的に進めていた時期だった。この 1105 年の遠征は，その前段階として，ラドガにいた「旧勢力」を，ノヴゴロド公（当時はムスチスラフ [D11]）とノヴゴロド人が武力によって制圧するためのものではなかったか。

この「旧勢力」についてチェルノフは, サガ史料によると, ラドガは 11 世紀前半にヤロスラフ賢公 [13] の妃インギゲルダに与えられており，それ以降も，スウェーデンのかの女の出身一族の所領となっていたのではないかと推定している。[Комментарии к ПВЛ 2021: С. 341]。他方, フロヤノフによれば, 当時, ノヴゴロドの地のラドガやプスコフの都市には独立を志向する勢力が台頭して，中心城市ノヴゴロドに対抗していたという事態を挙げている [Фроянов 1992: С. 87-88]。

51）これは，ノヴゴロドの商業地区 (Торговая сторона) における大火の記録。「小川 (ручье)」は，商業地区のプロトニツキイ区 (Плотоницкий конец) とスラヴェンスキイ区 (Славенский конец) の境に相当する，歴史的にはフョードル小川 (Федоровский ручей)（フョードロヴァ街〔現在のシトナヤ通り (Щитная улица)〕と並行して流れている）のことを指している。「スラヴノ〔街〕(Славно)」は, スラヴェンスキイ区をほぼ南北に走るスラヴナヤ街 (улица Славная или Большая-Пробойная) のこと。「〔預言者〕聖エリヤ」(святыи Илия) はスラヴナヤ街の南端に位置する預言者聖エリヤ教会 (церковь Ильи пророка на Славне) のことである。以上の地理から推測すると，商業地区の北で発生した火災は，南へ向かっておよそ 1.8km の範囲で延焼し，商業地区の三分の二を占めるスラヴェンスキイ区の全域に被害を及ぼしたと思われる [Тихомиров 1946: С. 381-382]。［ヤーニン 2001：8-9 頁］の地図を参照。

なお，対応する記事は *Твр*1105 年の項に見出すことができるが，これはおそらく本 *H1* 記事を典拠として作成されたもので, そこでは, погореша въ Киеве と, あたかもキエフの火事のように書かれている。ノヴゴロドとキエフの地誌になじみのない *Твр* 編者の錯誤によるものだろう。

52）*ПВЛ-Ип* 系列の写本の *ПВЛ*1106 年記事には，Повоева <u>половци</u> около Зарѣчьска, и посла по нихъ Святополкъ Яня Вышатича и брата его Путяту и Иванка Захарьича и Козарина, и угонивъш ея до <u>Дуная</u>, полонъ отъята, а <u>половьцъ искѣкоша</u>]（*ПВЛ-Лвр* 系列写本に Дунаи はない）とあり，これを典拠として下線部を採って縮約したものではないか。

なお，この遠征は，*ПВЛ* 記事の時系列から判断すると，1106 年春（3 月～ 5 月）に行われている。

53）フセヴォロド・ムスチスラヴィチ [D111] がノヴゴロドで結婚したとことについては，*H1* の 6631（1123）年記事（[№ 287]）に記述があり（下注 137），本記事によって, この相手がスヴャトスラフ・ダヴィドヴィチ（スヴャトーシャ）[C31] の娘であることがわかる（[Домбровский 2015: С. 110] 参照）。

54）この「チェルニゴフの」(в Черниговѣ) はチェルニゴフ出身のという意味。スヴャトーシャはキエフ洞窟修道院の修道士になったことから，キエフで剃髪を受けたのであって，チェルニゴフで受けたわけではない。

Черниговѣ)，ダヴィド[55] [C3] の息子 (сынъ Давыдовъ) である，スヴャトーシャ[56] 公 (Святоша князь)[C31]) が剃髪した[57]。

6615(1107) 年。

2 月 5 日に大地が揺れた[58]。

6616(1108) 年

ノヴゴロドの大主教ニキータ (Никита) が逝去した。1 月 30 日のことだった[59]。

55）ダヴィド・スヴャトスラヴィチ [C3] のチェルニゴフ公在位は 1097-1123 年で，この時点（1106 年）ではチェルニゴフ公だった。

56）スヴャトーシャ (Святоша) は，スヴャトスラフ (Святослав) の家庭内での通称で，かれについては，剃髪前から，さらに剃髪後の記事でもこの呼び名が使われている。*H1*1090 年記事（上注 13）のヤンカ (Янка) もまた修道女だったが，通称で呼ばれており，公族で剃髪を受けたものは，通称で呼ぶ慣習が年代記記者の間であったようである。

かれはキエフ洞窟修道院で剃髪を受けており修道名はニコライ (Николай)。剃髪は *ПВЛ* によれば 1107 年 2 月 17 日のことである（創世暦 6614 年の三月暦換算）。「キエフ洞窟修道院聖僧伝」にはかれの修道院での生活と死についての物語があり [БЛДР Т. 4: С. 376-384]，それによれば，厳格な修道生活を送り，癒しの奇跡をなしたとされている。また，ルーシで公族の出身者が修道士になったのはかれが初めてであり，その志の強さと功業が強調され讃えられており，これから見る限り，スヴャトーシャの剃髪に政治的な動機づけを見出すことはできない。

57）この記事全体は，基本的には，*ПВЛ*1106 年の対応記事をもとに書かれている。ただし名の表記は，*ПВЛ* では Святославь, сынъ Давыдовъ, внук Святославль であるのに対して，本記事では，Святоша князь, сынъ Давыдовъ в Черниговѣ であり，さらに тѣсть Всеволожь（フセヴォロドの岳父）と下線の語句が独自に付加されている。*H1* 編者が「チェルニゴフの」(в Черниговѣ) を付け加えたのは，ノヴゴロドから見てスヴャトーシャがあまり馴染みのない人物だったことによるか。また，「フセヴォロドの岳父」の付加は，本記事が書かれた（編集された）とき（1123 ～ 1136 年と推定される）のノヴゴロド公がフセヴォロド [D111] であり，分かりやすさのために当時の公に関連付けた *H1* 編者のコメントと考えられるだろう（[Лихачев 1986 (1948): С. 173] も参照）。

58）この記事の典拠は，*ПВЛ*-Рдз(*Акд*)6615 記事の а февраля 5 трясеся земля пред зорями в нощ（2 月 5 日の大地が揺れた。夜の明方の前だった）であり，その前半部分を抽出したものだろう。そのことから，地震があったのは 1108 年 2 月 5 日の現在の時刻で午前 8 時過ぎのキエフ周辺の出来事だろう。なお，*Ак* 写本の日付だけが в 15-и день февраля となっているが，これは，*ПВЛ-Ип* の読み месяца въ 15 день трясет пред лазорями в нощ によって補訂したものか。

59）ニキータについては，本年代記の「ノヴゴロド主教表」[№ 109] にゲルマン (Герман) の後に記されている［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 616］。没年は三月暦換算で，1109 年 1 月 30 日になる。この記事に対応するものは *ПВЛ* になく，ノヴゴロドの独自資料によって *H1* 記者が書いた記事である。なお，15 世紀の年代記 *H4, C1, HK1* の対応記事には，и положенъ бысть у святеи Софии въ Акима и Анны（そしてソフィア聖堂のヨアヒムとアンナの〔副祭壇〕に安置された）との文言が続いているが，これは，*НСГ* 諸年代記が成立したときに付加されたものだろう。

春に，聖なる大主教[60] (владыка) の浄財によって，聖ソフィア〔聖堂〕に〔壁画が〕描き始められた[61]。

6617(1109) 年。

ドニエプル川 (Днѣпр) で大水があった。そして，デスナ川[62] (Десна) でも，プリピャチ川[63] (Прѣмят) でも〔大水があった〕[64]。

洞窟修道院の食堂 (трепезница) が完成した[65]。

同じ年，スヴャトポルク公 [B3] によってキエフに教会が定礎された[66]。

60）この大主教 (владыка) は，直前の記事で 1109 年 1 月に逝去したニキータを指している。「浄財により」(стяжениемъ) とは, ニキータが死後に遺した（遺言した？）財産を使ってと理解することができる。1109 年 3 月～ 5 月頃のことである。なお，*НК1* には святаго владыка Иоана と，ニキータの後任の大主教イオアン・ポピアン (Иван Попиан)（[ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 617]）が金を出したように書かれているが, これは *НК1* 編者の誤解による付加で, イオアンは, 以下の 1110 年記事にあるように, 1110 年 12 月 29 日にようやくノヴゴロドに到来したことになっている。

61）この記事も *ПВЛ* に対応はなく，前の記事（上注 59）と同じく，ノヴゴロドの独自資料によって *H1* 記者が書いたものである。

62）現在のドニエプル川の支流デスナ川 (река Десна) に相当する。

63）*Км* въ Прѣпятѣ; *Сн* в Припетѣ; *Ак*, *Бр* в Припятѣ. ドニエプル川の支流現在のプリピャチ川 (река укр. Прип’ять; рус. Припять; беларус. Прыпяць) に相当する。

64）この記事は，*ПВЛ*6616(1018) 年の項に，ほぼ一致する対応記事があり，これを典拠としていることは明らかである。内容は，ドニエプル川と二つの支流の河口付近の大洪水の被害（おそらく秋の増水による）であり，キエフ地方の出来事だが，なぜこの記事を採用したのかについては不明。本年代記の 6617(1109) 年の記事は，すべて *ПВЛ*6616(1108) 年の項の記事から採られており，年紀のズレは，おそらく *H1* 編者の編集作業上の過誤によるものだろう。

65）*ПВЛ*6616(1108) 年対応記事では，и кончаша тряпезницю Печерьскаго манастыря при Феоклистѣ игуменѣ, иже ю и заложи повелѣньемь Глебовым , иже ю и стяжа.（洞窟修道院の食堂が完成した。典院フェオクチストの時だった。かれは，グレーブ〔・フセスラヴィチ〕[L5] の命令によって〔食堂〕を定礎し，グレーブはそのための資金を提供したのだった）とあり，下線部だけが抽出されていることが分かる。なお，修道院の食堂 (трапезница, трапезная) は洞窟修道院のような共住修道院では修道士が集まって協議する重要な場であった。

66）*ПВЛ*6616(1108) 年対応記事では，Заложена бысть церкы святаго Михаила Золотоверхая Святополком князем въ 11 иулия мѣсяца.（スヴャトポルク公によって黄金の屋根の聖ミハイル教会が定礎された。7 月 11 日だった）となっており，下線部のテキストが抽出され，さらにノヴゴロドの編者の立場から「キエフで」(в Кыевѣ) の句を最後に付加して記事を作ったことがわかる。この聖ミハイル教会は，スヴャトポルク公 [B3] が自分の守護聖人（大天使ミハイル）に献堂して建てたもので，1113 年にはかれ自身が埋葬されている。それ以降，この教会は，スヴャトポルク一族にとっての菩提寺の役割を果たしていた。

6618(1110) 年。

大主教イオアン (Иоанн) がノヴゴロドに来た。12 月 20 日だった [67]。

6619(1111) 年。

スヴャトポルク [B3]，ウラジーミル [D1]，ダヴィド [C3]，そしてすべての地，まったくのルーシの〔地〕は [68]，ポロヴェツ人を攻める遠征をした。そしてかれらを打ち負かし，かれらの子供たちを捕獲し [69]，ドン川沿いの (по Дънови) 城市スーグロフ [70] (Сугров) とシャルーカ

67）ノヴゴロド独自資料にもとづく記事で，*ПВЛ* に対応記事はない。*Км* の原文では，Прииде в Новъгород архиепископъ Иоанн と「ノヴゴロドへ」と「大主教イオアン」の語順が他写本と比べて逆転しているが，これは *Км* の固有読みだろう。

イオアンは，1109 年 1 月 30 日に没した主教ニキータ（上注 19）の後任のイオアン・ポピアン (Иван Попиан)（[ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 617]）で，1110 年 12 月 20 日に，キエフ府主教（おそらくニキーフォロフ一世）による叙任式（上注 46 を参照）を経て，キエフからようやく後任として戻ってきたということだろう。通称の Попиан は，поп（司祭）の出身者であることを指しており（поп Янъ が詰まったものという説もある），かれの選任に長く複雑な手続きが必要だったのかもしれない。

68）「そしてすべての地，まったくのルーシの〔地〕」(и вся земля просто руская) は訳だけでは分かり難い表現だが，典拠の *Ип* 記事によれば，キエフ公スヴャトポルク [B3]，ペレヤスラヴリ公ウラジーミル [D1]，チェルニゴフ公ダヴィド [C3] の他に，かれらの息子たちも遠征に参加しており，狭い意味での「ルーシの地」(русская земля) の諸公を網羅していることがわかる。なお，ここの「地」(земля) は，[№ 197] の「リャヒの地を導入する」（[ノヴゴロド第一年代記 (4)：注 112］参照）と同様に，「勢力」の意味を持っている。ここで，この遠征主体を「ルーシの地」(земля... руская) の語でまとめ，これを「まったくの」(просто) の語で強調している背景には，自分たちノヴゴロド人はこれに参加していないという含みがあるのではないか。

69）「かれらの子供たちを捕獲し」(взяша дѣти их) は，典拠の *ПВЛ*619(1111) 年記事（下注 72）にはない表現。*ПВЛ* 記事では戦利品については，взяша полона много, и скоты, и вони, и овцѣ, и колодниковъ много изоимаша руками（多くの捕虜，家畜，馬，羊を略取した。多くの捕虜を生け捕って拘束した）と書かれている。奴隷として使役するために子供（そして女）を捕虜として捕獲することは，この遠征のもっとも優先的な目的だったのだろう。なお，この 1111 年の遠征は，ルーシ諸公が組織的にポロヴェツの地に踏み込んだ最初の大規模な掠奪遠征であり，その後 12 世紀のあいだ何度か繰り返されている。

70）「スーグロフ」(Сугров) の城砦は，*ПВЛ*1107 年記事ルービンの戦い（下注 71）で諸公が捕虜にとったポロヴェツ人の首長スグル (Сугр) の本拠地と考えられる。所在地については諸説あり，定まっていない [Комментарии к ПВЛ 1950: С. 475]。

ニ[71] (Шарукань) を〔奪った〕[72]。

その頃，キエフの下町 (Подолье) が燃えた。そしてチェルニゴフも，そしてスモレンスクも，そしてノヴゴロドも〔燃えた〕[73]。

同じ年，チェルニゴフの主教イオアン (Иоанн) が逝去した[74]。

同じ年，ムスチスラフがオチェラ (Очела)[75] を攻める遠征をした[76]。

6620(1112) 年。

71）「シャルーカニ」(Шарукань) はポロヴェツ人の首長の名「シャルーカン」(Шарукан) の所有形容詞形で，その名がついた城砦のこと。*ПВЛ*1107 年の項には「ボニャク，老シャルーカン (Шаруканъ старый) およびその他の多くの侯たちが来て，ルービンのそばに陣を布いた」がルーシ諸公に討たれて敗走したことが記されている。この城砦は，セヴェルスキイ・ドネツ川流域にあったようだが，具体的な所在地については諸説あり，現在のハリコフ市郊外に同定する説もあるが，定説はない [Комментарии к ПВЛ 1950: С. 475]。

72）これは, *Ип*6619(1111) 年記事に詳しく述べられているルーシ諸公によるドン川まで到達した遠征（サルニツァ川の戦い）についての記事で，1111 年 2 月 26 日～ 3 月 27 日に行われた。*Ип* 記事では遠征準備からはじまり, 行路と日付, サリニツァ川での戦闘, 天使の助けなど非常に詳しく描写されているが, 本記事はこれを使って事実だけを要約したもの。主要な公の名と地名はすべて *Ип* 記事にあり，これを典拠として記事が作成されたことは明らかである。

73）これに対応する記事は *ПВЛ* になく，ノヴゴロドの独自資料によって *H1* 記者が書いたものと思われる。ただ，冒頭の погорѣ Подолье（下町が燃えた）の表現は，*H1-C*6577(1069) 年の記事にもあり［ノヴゴロド第一年代記 (4)：注 122］，本記事でも Кыевѣ（キエフで）が付されているだけで，同様に前後関係が分からない不思議な内容である。さらに и Черниговъ, и Смолнескъ, и Новъгород（そしてチェルニゴフも，そしてスモレンスクも，そしてノヴゴロドも）と都市名が並べられているのは，文脈から判断して，これらの都市も「焼けた」とするのがもっとも妥当だが，本当に主要な都市で同時に（同じ年に）大きな火災があったものなのか, なぜそのような内容の記事を採用したのか, 不明なところは多い。

74）この記事は，*Ип*6619(1111) 年記事に Того же лѣта приставися Иоанъ, епископъ черниговьский, мѣсяца ноябьря въ 23. とあり，*H1* 編者が，冒頭の下線部を抽出して作成した記事であることは明らかである。なお，*Лвр*6620(1112) 年記事にもチェルニゴフ主教イオアンの死亡記事があるが，対応の *Ип* 記事とは語順が異なっている。イオアンの逝去は 1111 年 11 月 23 日のこと。

75）「オチェラ」(Очела), もしくは「アゼル」（ラテン語 Agzele, ドイツ語 Adzelle, Atzel, Adsel, ラトヴィア語 Atzele）は，現在のラトヴィア，エストニア，ロシア三者の国境の周辺に存在したラトガリ族の歴史的な地域（部族）名。現在のラトヴィアのガウイエナ村（Gaujiena）に中心地があったとされる。本記事が，この部族についてのもっとも早い言及であり，さらに本年代記の 6688(1180) の項に，「ムスチスラフ [D11] とノヴゴロド人がオチェラのチューヂ人を攻め」大規模な遠征を行い「その全土を焼いた」との記事がある。

76）この記事は，ノヴゴロドの独自資料にもとづいており，*ПВЛ* に対応の記事はない。

6621(1113) 年。

スヴャトポルク [B3] 息子ヤロスラフ [77] [B32], がヤトヴャグ人 [78] を攻める遠征をした。そしてかれのは戦争から戻ってきた。そして，ムスチスラフ [D11] の娘を嫁に [79] とった [80]。

同じ年，スヴャトポルク [B3] は逝去した。そして，ウラジーミル [D1] がキエフで公座に就いた [81]。

77）ヤロスラフ [B32] は，1100 年にキエフ公だった父スヴャトポルク [B3] によってヴラジミルの代官を任命され，1102 年にはスヴャトポルク公の年長の子の権利としてノヴゴロドの公座を要求したが，ノヴゴロド人の拒絶にあい，結局モノマフの長男ムスチスラフ [D11] が公座を得ていう。それ以来，この時までヤロスラフ [B32] はヴラジミル＝ヴォルィンスキイ公であった。この城市は，ヤトヴャグ人（次注）への掠奪遠征のためにはもっとも近い立地にある。

78）ヤトヴャグ人 (ятвяги) は言語的にはリトアニア人 (литва) と同じバルト語族に属し，西ブーグ川とネマン川上流の間の一帯に居住していた。ヴォルィニ公領の北，ポロツク公領の西に隣接しており，ルーシの諸公にとっては，帰服していない部族のひとつだった。*ПВЛ*983 年記事によればウラジーミル聖公 [06] が，さらに 1038 年にはヤロスラフ賢公 [13] がこの地に遠征をおこなっている。［ノヴゴロド第一年代記 (1)：注 481］も参照。

79）モノマフ [D1] がキエフの公座に就く直前，まだスヴャトポルク [B3] が存命中に進められたこの結婚は，ヤロスラフ [B32] の側からは，ノヴゴロド公ムスチスラフ [D11] の姻戚になることで，一度逃したノヴゴロドの公座（上注 77）の獲得を期待したのだろう。他方，モノマフ一族にとっては，スヴャトポルク [B3] の後にキエフ公座がモノマフにまわる期待があったと思われる。

80）この記事全体の原文は，Ходи Ярославъ на Ятвягы, сынъ Святополчь; и пришед с воины, и поя дщерь у Мьстислава。*Ин*6620(1112) 年の項に対応記事があり，Индикта. <u>Ярославъ ходи на ятвязѣ, сынъ Святополчь</u>, и побѣди я, <u>и, пришедъ с войны</u>, посла Новугороду <u>и поя Мьстиславлю дщерь</u> собѣ женѣ, Володимерю внуку, мѣсяца маия въ 12, а приведена бысть июня въ 29（インディクト 。スヴャトポルク [B3] の子ヤロスラフ [B32] がヤトヴャグ人 を攻める遠征を行い，撃ち破った。ヤロスラフ [B32] は戦争から帰還すると，ノヴゴロドに使者を遣って，ムスチスラフ・ウラジーミロヴチ [D11] の娘を嫁にとった。5 月 12 日のことである。連れて来たのは 6 月 29 日だった）となっている。比較すると，下線部分を抽出して *H1* 編者が記事を作ったことが分かる。なお，典拠の *Ин* 記事で，結婚の取り決めからヴラジミルへの輿入れまで時間がかかっているのは，公女がいたノヴゴロドとヴラジミル＝ヴォルィンスキイとの距離が遠いことによっている。

二つの記事の年のズレ（本記事は 6621(1113) 年）については，*H1* 編者の錯誤による可能性が高いことから，この結婚は，*Ин* 記事に拠って，1112 年 5 月～ 6 月に行われたと見るべきではないか。

81）*Ин*6621(1113) 年には，不吉な天のしるし，スヴャトポルク [B3] の死，キエフにおける暴動，ペレヤスラヴリ公ウラジーミル [D1] への使節の派遣，ウラジーミルのキエフ公座就位にかかわる詳細で日付を付した記事があるが，本記事はその事実だけを最短の表現でまとめたものである。なお，スヴャトポルク [B3] の没年は，*Ин* 記事に拠れば 1113 年 4 月 16 日である。

同じ年，ダヴィド・イーゴレヴィチ [F1] が逝去した[82)]。

この年，ムスチスラフ [D11] がボール[83)] (Бор) でチューヂ人 (чудь) を打ち負かした[84)]。

この年，聖ニコーラ教会 (церкви святыи Никола) の定礎がノヴゴロドにおいてなされた[85)]。

この年, 対岸が燃えた[86)]。こちら側では城市の外側[87)]が, ルカ〔通り〕[88)]から焼け跡だった[89)]。

82）ダヴィド・イーゴレヴィチ [F1] の死については，*ПВЛ*6608(1100) 記事に「一方，ダヴィドはブージスク (Божьский) に座した。その後スヴャトポルク [B3] はダヴィドにドロゴブージ (Дорогобужь) を与えた。かれ〔ダヴィド [F1] は〕そこで死んだ」とあり，*ПВЛ*6620(1112) 年の記事では，<...> Того же лѣта преставися Давыдъ Игоревичь, мѣсяца маия въ 25, и положено бысть тѣло его въ 29 въ церькви святыя Богородица Влахѣрнѣ на Кловѣ（この年, ダヴィド・イーゴレヴィチ [F1] が逝去した。5 月 25 日だった 。29 日にかれの遺骸は〔キエフの〕クロフのヴラケルナ聖母教会 に埋葬された）とある。*ПВЛ*6620(1112) 年記事が本記事の典拠で，*H1* 編者が典拠の下線部分を抽出して作成したものである。

以上をまとめれば，ダヴィドは 1112 年 5 月 25 日にドロゴブージで没し，遺体がキエフに運ばれて 5 月 29 日に埋葬式 (отпевание, погребение) が行われたことになる。なお，本記事は 6621(1113) 年の項に置かれていることから，出典と 1 年のズレがあるが，これは上注 64, 80 と同じく，*H1* 編者の編集上の錯誤によって生じたものか。

83）このボール（Бор）は普通名詞としては「松林」を指すが，用法から判断して「オチェラ」（上注 75）と同様に，チューヂ人の部族名（国名）の固有名詞だろう。所在については，語形の類似性からイズボルスク (Изборск), あるいはペトセポレ（Metsepolesse）などが比定されているが, ペイプス湖（チューヂ湖）の東側（現在のエストニア）と漠然と推定できるだけで定説はない。

84）この記事は，ノヴゴロドの独自資料にもとづいており，*ПВЛ* に対応の記事はない。

85）本記事は，ノヴゴロド情報ではあるが，*Ип*6621(1113) 年記事に，В се же лѣто Мьстиславъ заложи церковь камяну святаго Николы на княжѣ дворѣ, у торговища Новѣгородѣ（この年，ムスチスラフ [D11] は，ノヴゴロドの市場区（トルゴヴィシチェ）にある公の館に石造りの聖ニコライ（ニコーラ）教会を定礎した）とあり，これに対応している。細部を切り取る手法（ムスチスラフ公による定礎であることは前記事からの続きでわかる）から見て，この *Ип* 記事が典拠だろう。これは，現在では「ヤロスラフ館のニコライ首座教会」(Николо-Дворищенский собор; Никольский собор на Ярославовом Дворище) として現存している聖堂に相当しており，その献堂式は 23 年後の 1136 年に行われている（下注 281）。

86）「対岸」(онъ полъ) とは, 1097 年記事（上注 32）と同様の表現であり, これと同じくノヴゴロドのヴォルホフ川東岸（右岸）の商業地区 (Торговая сторона) を指している。

87）「城市の外側」(город кромныи) とは, 城市（ここでは内城 Детинец のこと）の外側を意味しており，具体的には内城の城壁外の南側一帯を指している（次注）。

88）「ルカ通り」は原語では от Лукинъ (улиць) で，ソフィア地区リュージン街区 (Людин конец) の南の端にある聖ルカ教会 (церковь Луки на Лукинской улице) のあたりを指している。内城 (Детинец) の南壁から 450m ほど南南西方向に離れたところにある。［ヤーニン 2001：8-9 頁］の地図も参照。

89）これは，ノヴゴロド資料に拠った独自記事であり，ノヴゴロドの火災についてという内容の共通性から見て，上注 51 の記事と同じ出典の資料を使っているだろう。

6622(1114) 年。

ペレヤスラヴリで (въ Переяславлѣ) スヴャトスラフ [90] (Святославъ)[D13] が逝去した [91]。

同じ年，チェルニゴフで主教フェオクチスト (Феоктист) が叙任された [92]。

6623(1115) 年。

ヴィシェゴロド (Вышегород) にすべての兄弟たちが集まった。ウラジーミル [D1]，オレーグ [C4]，ダヴィド [C3]，そしてすべてのルーシの地 (вся руская земля) である。そして〔かれらは〕石造りの教会を献堂した。5 月 1 日だった。また 2 日にボリス [14] とグレーブ [15] を移した。インディクト [93] 8 年 [94]。

90）*Ип* 1113 年の記事によれば，スヴャトスラフ [D13] はスモレンスクからペレヤスラヴリに公座を移したばかりだった。なお，かれの死没の日付は，1114 年 3 月 16 日になる（次注）。

91）*Ип* 6622(1114) 年の項に，Преставися Святославъ, сынъ Володимеръ, мѣсяца марта 16 день, и положенъ бысть во Переяславлѣ у церкви святаго Михаила.（ウラジーミル [D1] の息子スヴャトスラフ [D13] が 3 月 16 日に逝去し，ペレヤスラヴリの聖ミハイル教会に埋葬された）の記事があり，これを典拠に下線の部分を抽出して作成されたもの。

92）*Ип*6620(1112) の記事の末尾に，Исходящю же сему лѣту, и поставиша Феоктиста епископомъ Чернѣгову, игумена Печерьскаго, мѣсяца генваря въ 12 день, а посаженъ на столѣ въ 19.（この年の末に，洞窟修道院の典院のフェオクチスト [92] (Феоктист) が，チェルニゴフの主教に叙任された。1 月 12 日 [92] だった。主教座に就いたのは 19 日だった）とあり，三月暦であることから叙任が 1113 年 1 月 12 日に行われたことが分かる。本記事は，この記事を典拠に，下線部分を抽出したもの。*Ип* 記事との年紀のズレは，上注 80, 82 と同様に *H1* 編者の編集上の錯誤によると思われるが，なぜ 2 年（*H1* 6622, *Ип* 6620）ものズレが生じたのかについては不明。

93）「インディクト」(индикт;Ἰνδικτιών) とは，ビザンツの年代記で用いられていた 15 年周期の年記単位（徴税査定周期）のこと。1114 年 9 月 1 日～ 1115 年 8 月 31 年の期間は，確かにインディクト 8 年に相当する。

94）1115 年 5 月のヴィシェゴロドにおける聖ボリスとグレーブ公の改葬式の記事。1072 年にヤロスラフ [13] の息子たちが行った改葬式（［ノヴゴロド第一年代記 (4)：注 215 以下］参照）にならってその次の世代の諸公が行ったもの。*Ип*6623(1115) 年記事の冒頭に，次の対応記事がある。индикта 8. Съвъкупишася братья, русции князи, Володимеръ, зовемый Монамахъ, сынъ Всеволожь, и Давыдъ Святославлиць, и Олегъ, братъ его, и сдумаша перенести мощи Бориса и Глѣба: бяху бо создали церковь има камяну на похвалу и честь телесема ею и на положение. Первое же освятиша церковь камяную мая въ 1 день, в суботу, наутрия же въ 2 день перенесоша святая.（インディクト 8 年。ルーシの諸公が会合した。フセヴォロドの子ウラジーミル [D1], 通称モノマフとダヴィド･スヴャトスラヴィチ [C3] とその兄弟オレーグ [C4] である。かれらは評議して，ボリス [14] とグレーブ [15] の聖骸を改葬することを決めた 。なぜならば，かれらに奉献した石造りの教会が落成したため，かれらの遺体を称賛，崇敬し，埋葬するためであった。初めに諸公は石造りの教会の献堂式を行った。5 月 1 日であった。翌日の〔5 月〕2 日に 二人の聖人が移された)。本 *H1* 記事は，この *Ип* 記事を典拠として，下線部分を抽出し，さらに вся руская земля（全てのルーシの地）（上注 68 参照）の文言を付け加えて作成されている。やはりこの付加にも，自分たちノヴゴロド人はこれに参加していないという含みがあるだろう。

同じ年，太陽にしるしがあった。〔太陽が〕滅びた[95]。

また，秋にはスヴャトスラフ [C] の息子オレーグ [C4] が逝去した。8 月 1 日だった[96]。

また[97]，ノヴゴロドではムスチスラフ [D11] のもとですべての馬が死んだ[98]。かれの従士たちのもとでも〔すべての馬が死んだ〕[99]。

95）*Ип*6623(1115) 年記事の末尾近くに，В се же лѣто бысть знамение: погибе солнце и бысть яко мѣсяць, егоже глаголють невѣгласи *Сн*ѣдаемо солнце（この年，しるしがあった。太陽が滅び〔欠け〕，月のようになった。これについては，無智な者たちは，太陽が食われてしまったと語っていた）の記事があり，これを典拠に下線部を抽出したもの。これは，ユリウス暦 1115 年 7 月 23 日にキエフで観察された日食を指している [Святский 2007: С. 43]。

96）*Ип*6623(1115) の日食記事に続いて，В се же лѣто преставися Олегъ Святославличь, мѣсяца августа въ 1 день, а во вторый погребенъ бысть у святаго Спаса, у гроба отца своего Святослава（この年，オレーグ・スヴャトスラヴィチ [C4] が逝去した。8 月 1 日だった。2 日にはその父スヴャトスラフ [C] の棺の傍らに埋葬された）の記事があり，これが典拠で，冒頭の下線部のテキストが抽出されている。本記事では，「また」(a) という接続詞を加えることで，前の記事の内容的な関連性が示されており，1115 年 7 月に不吉な天の予兆があり，それが当たって 8 月 1 日にオレーグ公が死んだ，と読めるようになっている。

97）*H1-M* では，ここでも「また」(a) という接続詞（前注）が使われているが，*H1-C* にはない。*H1-M* のテキストの構文がやや不自然であることから，*H1-C* が本来の読みで，*H1-M* はその二次的な加工だろう。

98）「死んだ」(изомроша) の измрѣти の動詞は災害や戦争による死をもっぱらあらわす語であり，ここでは疫病による馬の大量死のことを言っているのだろう。

99）本記事は *ПВЛ*(*Ип*) に対応する記事がなく，内容的にみて，ノヴゴロドの独自資料に拠った記事である。

これと同じ年，ヴォィゴスチ[100] (Воигость) が，軍人の聖フェオドール[101] 教会 (церковь святого Федора Тирона) を定礎した。4 月 28 日[102] のことだった[103]。

6624(1116）年。

ムスチスラフ [D11] はノヴゴロド人とともにチューヂ人 (чюдь) を攻める遠征をした。そして，

100）「ヴォィゴスチ」(*Км*, *Сн* Воигость; *Ак*, *Бр* Воигость) という人物について他の史料に手掛かりはないが，*H1* 編者が配置した直前の記事とのつながり，すなわち，ムスチスラフの軍馬が疫病で倒れたために，疫病封じのために，軍人の守護者であり，さらにムスチスラフの守護聖人である（前注）聖テオドロス（フェオドール）に奉献する教会の建築を始めた [Литвина, Успенский 2006: С. 405] と読み込むことも可能である。その場合，「ヴォィゴスチ」はムスチスラフ配下の貴族 (боярин) で従士たちを指揮する軍司令官だったと考えることができ，その可能性は高いだろう。

101）「軍人の聖フェオドール」(святыи Федор Тирон) はギリシアの聖人で Θεόδωρος ὁ Τήρων（テオドロス・ティーローン）で，「招集された兵」を意味するラテン語 Tiro からきている。かれは，ムスチスラフ [D11]（洗礼名フョードル）の守護聖人であり，[Литвина, Успенский 2006: С. 581]，ムスチスラフ自身も，キエフ公になった 1128 年に，この聖人に奉献した教会を，キエフの中心のウラジーミル市区に建てている（*Ип*6637(1129) 年記事）。

この「軍人の聖フェオドール教会」を定礎した場所については，15 世紀の *H4*, *НК*1 には среди дву улиць, Щерковѣ и Розважи という当時の知識にもとづく追加の文言があり，「シチェルコヴァ通り」と「ロズヴァジャ通り」の間，すなわちソフィア地区の北側，ネレフスキイ区 (Неревский конец) で定礎されたことがわかる（[ヤーニン 2001：8-9 頁］の地図を参照）。『ノヴゴロド歴史百科』によれば，現在，シャリコフ通りの軍司令官フェオドール教会 (Феодора Стратилата на Щиркове улице) と呼ばれる聖堂に建て替えられてその場所にあり，現在の Стратилатовская と Новолучанская 通りの交差点に相当するという。これは，ネレフスキイ区における現在まで残されている唯一の聖堂とのことである [Великий Новгород. Энциклопедический словарь: С. 515; церковь Феодора Стратилата на Щиркове улице]。

102）定礎の年代については，「同じ年」(*Км*, *Сн* Том же лѣтѣ; *Ак* Того же лѣта) となっていて，1115 年のことにみえるが，6623(1115) 年記事における時系列から判断すると，この定礎は 1116 年 4 月 28 日のことと見るべきだろう。あるいは，1115 年の出来事だったが（ポーランド語訳注はこれを採用），*H1* 編者の編集上の錯誤により記事を挿入する場所を間違えたか。

103）全体として本記事は，*ПВЛ*(*Ип*) に対応する記事はなく，ノヴゴロド史料に拠る独自編集記事である。

熊の頭[104] (Медвижю Голову) を占領した。四十聖人〔の日〕[105] だった[106]。

同じ年，ムスチスラフ [D11] は，最初のよりも大きなノヴゴロド[107] (Новъгородъ) を定礎した[108]。

同じ年，ラドガの代官パーヴェル (Павелъ посадникъ Ладоскыи) が，ラドガ (Ладога) の城壁を石造りにする定礎をした[109]。

104）「熊の頭」(Медвежа Глава) はフィン系の地名「オデンペ」(Odenpäh) をルーシ語に翻訳借用したもの。ott-, od- は「熊」を指す婉曲語で，päh は「頭」の意味。現在のエストニアのタルトゥーの南南西約 40km にあるオテパー (Otepää) に相当する。ノヴゴロドからだと直線距離で 286km 離れている。

105）この「四十聖人の日」とは，「セヴァステの四十殉教者」(Сорок мучеников севастийских) の祝祭日のことで，3 月 9 日のことだった [Полный месяцеслов Востока I: C. 482]。これは，道が凍ることで長途の遠征や掠奪品（捕虜も含む）の輸送に適した冬季に相当している。

106）*Ин*6624(1116) 年記事に，В се же лѣто Мьстиславъ Володимеричь ходи на чюдь с новгородчи и со пьсковичи, и взя городъ ихъ именемъ Медвѣжа Глава, и погостъ бе-щисла взяша, и възвратишася въсвояси съ многомъ полономъ（この年, ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D11] は，ノヴゴロド人とプスコフ人を引き連れてチューヂ人人を攻める遠征を行い，熊の頭 と称する城砦を占領した。また，多数の郷村を掠奪し，多数の捕虜を獲て帰郷した）とあり，これを典拠として下線部分を抽出し，最後に *H1* 編者が持っていた独自の情報として，на 40 святых（40 聖人の日に）の日付を付け加えたものである。エゴーロフによれば，「熊の頭」はチューヂ人が多数居住する豊かな土地であり掠奪の対象としては好適だった。そのような地への掠奪遠征が成功したことから，成功の感謝と将来への祈願を込めて，帰還の記念日である「セヴァステの四十聖人」の木造教会（のちに石造りに改修）が建てられたのだろうと推定している [Егоров 1927]。*H1* 編者はこの教会建設にまつわる情報を使って日付の付加を行ったのではないだろうか。

107）*H1*-*M*6552(1044) 年の項 [№150] に「ウラジーミル [A] はノヴゴロド〔内城〕を定礎し，これを完成させた」［ノヴゴロド第一年代記 (3)：注 324］とあり，заложи Новгород の表現が共通していることから，「最初の」(первое) の定礎とは，この 1044 年のウラジーミル・ヤロスラヴィチ [A] による建築を指していることは明らかである。後代の『ノヴゴロド第三年代記』の 6624 年記事にも「最初の建設ののち第二の建設まで 74 年が過ぎた」(послѣ перваго построения прошло лѣт 74 до втораго стороения)[ПСРЛ T. 3, 1841: C. 214] として，やはり 1044 年の建築を指している。この時ウラジーミルは，石造りの城壁で囲った内城 (детинец) を築いたが，本記事のムスチスラフ [D11] は，すでにあった内城の城壁を拡張したということだろう。

108）これはノヴゴロド関係記事だが，*Ин*6622(1114) 年の項に次の対応記事がある。В се же лѣто Мьстиславъ заложи Новъгородъ болий перваго. これは，本記事とまったく同じであり，*H1* 編者が *Ин* 記事をそのまま採用したことに拠っている。ただし，*H1* 編者が，6624(1116) の項に記事を配置したのは，この年にノヴゴロド（地方）の建設に関する記事がまとまっていたことによっているか。

109）この記事はノヴゴロド地方における建設についての記事だが，年代のズレも含めて，上注 108 と同様に，*Ин*6622(1114) 年の項に，В се же лѣто заложена бысть Ладога камениемъ на приспѣ Павломъ посадникомъ при князѣ Мьстиславѣ（この年，ムスチスラフ公 [D11] の時の代官パーヴェルによってラドガ の盛り土の上に石造りの城壁定礎された ）とあり，これを典拠とした下線部分の抽出であることがわかる。*Ин* ではこの後に，代官パーヴェルの証言による，ラドガにおける怪奇についての物語とビザンツ年代記を典拠とした天変地異についての長い解釈記事が置かれている。

6625(1117) 年。

ムスチスラフ [D11] は，公座〔に就く〕ために，ノヴゴロドからキエフへ行った。3 月 17 日だった[110]。また，〔ムスチスラフは〕息子をノヴゴロドで，フセヴォロド [D111] を公座に据えた[111]。

同じ年，ノヴゴロドで，聖ソフィア (въ святѣи Софѣи)〔聖堂〕においてしるしがあった。落雷によっていた。また，聖歌隊員全員が人々とともに倒れてひれ伏したが，みなが生きていた。ただ教衆[112]のひとりが〔雷に〕撃たれた。5 月 14 日の第 10 刻の晩課[113]〔の奉事〕の聖歌を歌っ

110）このムスチスラフ [D11] のキエフ行きについての原文（*H1-M* 諸写本，*H1-C* 共通）は Иде Мьстиславъ въ Киевъ на столъ из Новагорода марта въ 17。*Ип*, *Лвр* の 6625(1117) 年の項に対応記事があるが，*Ип* では Приведе Володимеръ Мьстислава из Новагорода, и дасть ему отець Бѣлъгородъ（ウラジーミルはムスチスラフをノヴゴロドから呼び寄せ，ベルゴロドを与えた）と，ウラジーミル・モノマフ [D1] が主語（この公座移動の主導的役割）であり，かつ，キエフではなくベルゴロドの公座に就かせたことが書かれている（*Лвр* にはベルゴロドの言及はない）。これ対して，本 *H1* 記事は，ムスチスラフが，自らキエフに行き，不自然な語順ながら，あたかもキエフの公座に就いたような書き方がなされている。さらに，「3 月 17 日」（おそらくノヴゴロドを去った日）と日付が明記されている。この違いから，本 *H1* 記事は，*Ип* 記事を典拠としたものではなく，*H1* 編者が日付についてのノヴゴロド史料を使って，独自に書かれたことは明らかである。なお，*H1* では本記事から，*Ип*, *Лвр* の記事を典拠とするものはほとんどなく，ほぼすべてのノヴゴロドの資料を使った独自編集の記事になる。

Ип 記事に拠れば，ムスチスラフの公座移転はモノマフ公 [D1] の指示（主導）によるものだったと理解できるが，*H1* 編者としては，ノヴゴロド公（ムスチスラフ [D11]）の行動の主体性を強調し，ノヴゴロド人にとって不本意なこの移転について，あたかも〈キエフ公座に就くために〉という理由をつけようとしたのだろう。なお，「月名 +в+ 日付」は，*H1* 編者が独自に日付を付す場合に使う慣用的な表現である。

111）フセヴォロド [D111] のノヴゴロド公座就位についてのこの原文（*H1-M* 諸写本，*H1-C* 共通）は а сына посади в Новѣгородѣ Всеволода на столѣ. で，不自然な語順の文である。これは，Всеволода на столѣ の句があとから挿入された結果と考えられ，本来は「公座」(стол) の語はなかったのだろう。以下の 1125 年の記事に見るように（下注 148），この時点では，ノヴゴロド人との合意という意味では，フセヴォロドは「公座」(стол) に就いていなかった可能性が高い。なお，*Ип*, *Лвр* 6625(1117) 年の対応記事は，а Новѣгородѣ сѣде Мьстиславичь... と表現が異なっている。

112）「教衆」と訳した原語は диак で，聖歌隊員，鐘つき，堂守など，聖職者を除く教会勤務者のことで，現代語 причетник に相当する。スレズネフスキイ辞典では，この箇所の用例にこの解釈を与えていることからこの訳語を採用したが [Срезневский Материалы I: Стб. 668]，ここでは，「聖歌を歌っていた」と関連付けることもできることから，聖職者で奉事の主な担い手である「輔祭」(диакон) だった可能性もある。

113）「5 月 14 日の第 10 刻」の「第 10 刻」(в час 10) は，昼 (день)（日出から日没まで）の時間を 12 等分した「10 番目の刻」(10-и час дня) にあたっており，緯度の高いノヴゴロドでは季節によって時刻が異なっている（いわゆる“косые”часы の時刻システム）。5 月 14 日のノヴゴロドでは，現在の時刻〔GMT（グリニッジ標準時）+3 時間〕の計算で，日出が 4:30，日没が 20:30 くらいだったとして，「第 10 刻」はおよそ 17:30 ～ 19:00 の時間帯にあたる。これは，日没の 2 時間ほど前にあたり，ちょうど晩課 (вечерня) の奉神礼が始まる頃の時間になる。

ているときのことだった[114]。また，夕方に月にしるしがあった[115]。

同じ年，典院アントーニイ[116] (Антонѣи) が，修道院の石造りの聖なる聖母教会[117] を定礎した[118]。

同じ年，ノヴゴロド市長官ドブルィニャ[119] (Добрыня) が逝去した。12 月 6 日だった。

114）本記事の「また，聖歌隊員全員が」以下の *H1-M* のテキストは，*H1-C* の対応記事と語順が大きく異なっている（内容は全く同じ）。文章の自然さから見て，*H1-C* のテキストが本来の記事であり，これを *H1-M* 編者が，日付を最後にもっていく改変を施したと見るのが妥当だろう。

115）本記事の原文は A на вечеръ бысть знамение в лунѣ.（*H1-M*, *H1-C* 共通）だが解釈が難しい。接続詞 a があることから前記事の続きで, 5 月 14 日の出来事の可能性が高い。знамение（しるし）を「月食」を指していると理解できるが，1117 年 5 月 14 日に月食はない。ただ，1117 年の 6 月 16 日にノヴゴロドでは皆既月食があり，これを指しており，日付は誤って記されたとする説もあるが [Морозов 2007: C. 63]，この皆既月食は，現在の午前 4 時頃が最大の食にあたっていることから［日月食等データベース］,「夕方に」(на вечеръ) という時刻の記述と合致しない。これは，ステパーノフの考察のとおり，天文現象ではなく，5 月 14 日の落雷と同時に起こったなんらかの気象現象だったと考えるべきだろう [Степанов 1909: C. 10]。

116）*Км* Антонѣи; *Сн, Ак* Антонъ. ノヴゴロドのアントーニエフ修道院 (Антоньев монастырь) の創建者「ローマ人アントーニイ」(Антоний Римлянин) のこと。その聖人伝によれば，ローマの出身で，正教の修道士だったが，カトリックからの迫害を逃れて沿岸で祈りの生活を送っていた。ある嵐の日に，かれがその上で祈っていた岩が動き出して海に浮かび，かれは，地中海，黒海，ドニエプル川を経て三日あまりでヴォルホフ川の岸に運ばれた。1106 年 9 月 5 日のこととされている。主教ニキータはこの奇跡の到着を知ると，岩が着いた場所に修道院を建てることをゆるしたという [БЛДР Т. 13: С. 8-35] [Житие Антония Римлянин]。

117）この「聖母教会」(церковь .. святыя Богородица) については，アントーニイの聖人伝の表題に Храмъ во имя честнаго и славнаго ее Рождества пречистыя Владычицы нашея и При*Сн*одевы Марии. とあり，聖母生誕祭（9 月 8 日）に奉献された聖堂であることがわかる。

118）本年代記には，この記事から，アントーニエフ修道院に関する記述がところどころに表れている。このことは，この修道院の「長老修道士で，聖なる聖母教会の輔祭にして聖歌隊長」だったノヴゴロド人キリク (Кирик Новгородец) の年代記への関与を示唆するものである（下注 277 参照）。

119）ドブルィニャは,「ノヴゴロド市長官表」(№ 111-1) の 12 番目にその名が記されており［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 658］，ノヴゴロドにおける，公の権力から一定独立した,「新しい」タイプの最初の市長官 (посадник) だった [Янин 2003: С. 78]。本記事は，*H1-M* の市長官に関する最初の記事でもある。

6626(1118) 年。

ノヴゴロド市長官ドミトル・ザヴィドヴィチ [120](Дмитръ Завидович) が逝去した。6 月 9 日 [121] だった。7 ケ月，ひとりで [122] 市長官を務めていた。

この年，ウラジーミル [D1] が，ムスチスラフ [D11] とともに [123]，すべてのノヴゴロド貴族をキエフへ連れて行った。そして，尊い十字架に導いた [124]。そして，かれらを帰郷させたが，別の者たちを自分のもとに留め置いた。それは，〔ウラジーミルとムスチスラフが〕その者たちに怒りを発したからである。それは，その者たちがダニスラフ [125] (Даньслав) とノズドリチャ

120）「ドミトル・サヴィドヴィチ」(Дмитръ Завидович) には，*H1-C (Сн)* Завидичь, *H1-M* (*Км, Ак, Тл, Бр*) Завидовичь の異読がある。かれはドブルィニャ（上注 119）の後任の市長官［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 686］。父親と思われるザヴィド (Завид) は，「ノヴゴロド市長官表」(№ 111-1) のオストロミールの後の 4 番目にその名が記されており，ムスチスラフ [D11] の初期ノヴゴロド公時代に市長官を務め，ノヴゴロドの統治を実質的に主導した有力な人物だった [Янин 2008: С. 87]。ドミトルもノヴゴロドの有力貴族一門の出身者として権勢を持っていたらしく，後に，かれの娘がムスチスラフ [D11] の後妻として，キエフへ嫁いでいる（下注 135）。

121）ドミトルの死没の日付は, *H1-M* 全写本で 6 月 9 日 (июня въ 9) だが, *H1-C* は 7 月 9 日 (иоуля въ 9) になっている。ドブルィニャ死没の日付が 12 月 6 日（1117 年）だから，翌 12 月 7 日に市長官職に就いたとして，もし 6 月 9 日（1118 年）に没したとすれば在任期間は 6 ヶ月と 2 日，もし 7 月 9 日なら在任期間は 7 ヶ月と 2 日なる。後者は，次注の「7 ヶ月」(7 мѣсяць) に合致することから，*H1-C* の読みが本来であり，*H1-M* の読みは書写段階での誤記が伝えられたと考えられる。

122）異読がある *Км, Сн* 7 мѣсяць одину; *Ак* в 7 мѣсяць. 後者の в 7 мѣсяць の前置詞 в が文法的に不自然であること，前注の異読で *H1-C (Сн)* の読みが本来的であったことなどを考慮すると，ここでは前者の C, *Км* の読みが本来のものだろう。

さて，前者の「ひとりで……市長官を務めていた」(посадницавъ... одину) の語句の解釈については，ヤーニンが検討を行っており，それによると，次の記事との関連でみると，ドミトルが市長官に就いた 1117 年 12 月～ 1118 年 7 月の時期は，ムスチスラフ公 [D11] がノヴゴロドを去った（1117 年 3 月：上注 110）あとで，息子フセヴォロド [D111] はまだ幼少であったために（11 ～ 14 歳ほどか [Домбровский 2015: С. 101]），ムスチスラフ公の時代と異なり，市長官が「ひとりで」ノヴゴロドの行政を担わざるを得なかったことを指しているという [Янин 2003: С. 90-91]。これは妥当な理解だろう。

123）ウラジーミル・モノマフ [D1] は当時キエフ公。その息子ムスチスラフ [D11] は，1117 年 3 月にノヴゴロドからキエフの付属都市ベルゴロドに移っていた（上注 110 参照）。

124）「かれらを尊い十字架に導く」(заводи я к честному кресту) とは，連れてきた貴族たちに，キエフの聖堂内で十字架に接吻させること。これは，誓約させたこと破棄させないための「十字架接吻」(крестоцелование) の儀式で，公族の間で行われていた誓約儀礼を，貴族たちにも適用したと考えられる。ここで貴族たちに誓約させた内容は，もちろん，まだ年少のノヴゴロド公フセヴォロド [D111] に対する忠誠である。キエフまでわざわざ貴族たちを連れてきて儀式を行ったのは，キエフ公の後ろ盾があるノヴゴロド公の力と権威をノヴゴロド貴族に知らしめるためだろう。

125）なお，Данислав はノヴゴロドの貴族にある名前であり，ソフィア地区にはダニスラフ通り (Даниславль-Дославня улица) もある。

(Ноздрьчя) から強奪し，百人長[126] (сочькии) のスタヴル (Ставр) に敵対したからである[127]。〔ウラジーミルとムスチスラフは〕その者たち全員を追放した。

6627(1119) 年

典院キリアク[128] (Кирьякъ) とフセヴォロド公 [D111] は，ノヴゴロドにおいて，聖ゲオルギイ修道院[129] (манастырь святого Георгиа) の石造りの教会を定礎した[130]。

同じ年，市長官コスチャンチン・モイセエヴィチ[131] (Костянтинъ Моисѣевич) が逝去した。

126）「百人長」(сочькии) は，キエフでは，公の支配下の都市に派遣された軍の司令官の官職名だが［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 821］，ここではノヴゴロド貴族（スタヴル）がその官職を担っている。おそらく，公のもとで市民軍 (вои) を組織するなど軍事を管掌していたのだろう。

127）ムスチスラフ [D11] がキエフに去り，公座に就いた息子フセヴォロド [D11] はまだ幼いなかで，ノヴゴロドの貴族たちの間で，抗争が起こったことがこの記事によって推察される。おそらくは，年少のフセヴォロド公を盛り立てようとする，親ノヴゴロド公派の貴族たちに対して，ノヴゴロド公から距離を置こうとする反ノヴゴロド公派の貴族たち（「別の者たち」(иныя)）が，実力行使に出たものだろう。ここに名があがっている 3 人は，親ノヴゴロド公派の代表的な貴族ではないか。

128）「キリアク」(Кирьяк)（標準標記は Кириак）の名は，ギリシア語 κύριος（主人）から派生した Κυριάκος の音写。主の日（すなわち日曜日）に生まれたという意味だろう。キリアクはゲオルギイ教会の定礎（次注）を機に初代の典院（修道院長）(игумен) になったと思われる。かれは，1128 年に死没している（下注 160）。

129）この記事は，ノヴゴロドの大修道院「ユーリイ修道院」(Юрьев монастырь) に関する最初の年代記の言及である。ユーリイ修道院の開基については，伝承ではヤロスラフ賢公 [13] の時代 (1030 年) にかれ自身が自分の守護聖人（ゲオルギオス＝ユーリイ）に献堂したとされる。だが，この記事によれば，実際には，ムスチスラフ偉大公 [D11]（2 年前の 1117 年にノヴゴロドからキエフ郊外のベルゴロドに移っている）が息子のフセヴォロド [D111] に命じて，このときに，ノヴゴロドにもっとも深い関わりを持っていた先祖ヤロスラフ公の守護聖人に献じた修道院聖堂を建てたのが始まりである可能性が高い。この石造りの主聖堂（ゲオルギイ教会）の建設が修道院の開基と見るべきではないか。

130）ユーリイ修道院のゲオルギイ教会の建設については，カラムジンが『ロシア国史』第 2 巻の注 [ИГР-2: Прим. 225] で建物の壁に記された次のようなグラフィティ（落書き）を紹介している（現在は逸失）。«Лета 6627(1119) заложил церковь каменну Князь Великий Мстислав Св. Георгия в монастыре Юрьеве, а совершил ею Великий Князь Всеволод, сын Мстиславичь Гавриил; а освятил ею в лето 6648(1140) месяца Июня на память Св. Апостол Петра и Павла при Игумене Исаии, а зачата бысть при Игумене Кирьяке; а мастер делал Петр церковь о трех верхахъ»（1119 年に大いなる公ムスチスラフ [D11] が石造りの教会を聖ゲオルギイのユーリイ修道院で定礎した。また，大いなる公フセヴォロド，〔すなわち〕ムスチスラフの息子のガヴリールが完成させた。これを献堂したのは 1140 年 6 月の使徒聖ペトロとパウロの日〔29 日〕であり典院イサイヤのときだった。〔建築を〕始めたのは典院キリアクのときであり，職人ピョートルが三つの屋根の教会を造った）。これは語法から見て，後代（15 世紀以降）のものであり，「ムスチスラフの定礎」など歴史的な誤認があるが，建築家の名などは修道院の伝承を反映したものだろう。

131）コスチャンチン・モイセエヴィチは，「ノヴゴロド市長官表」(№ 111-1) では，ドミトル（上注 121）の次に書かれており［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 660］，ドミトルが没した 1118 年 6 月から 1119 年まで市長官に就いていたことになる。

同じ年，アントーニイの (Антонова) 聖なる聖母教会，修道院がノヴゴロドで完成した[132)]。

6628(1120) 年

ボリス (Борисъ) がノヴゴロドに市長官を務めるために来た[133)]。

6629(1121) 年。

6630(1122) 年。

ムスチスラフ [D11] の〔妃〕クリスチナ (Христина) が逝去した[134)]。

同じ年, ムスチスラフ [D11] は, キエフで結婚した。〔かれは〕ノヴゴロドで, ドミトル・ザヴィドヴィチ[135)] の娘 (Дмитриевна...Завидовица) を娶ったのである[136)]。

132）1117 年に定礎したアントーニイ修道院の主聖堂である石造りの「聖母教会」（聖母生誕教会）が（上注 117），2 年後の 1119 年に「完成」した，すなわち献堂式が行われたということ。

133）15 世紀に編集された *H4*, *HK2* では「市長官を務めるためにキエフから」(ис Киева посадничать) が付加されている。ノヴゴロド貴族たちの勢力を押さえ，フセヴォロド [D111] による統治を助けるために，キエフ公ウラジーミル・モノマフ [D1] とムスチスラフ [D1] の手で，ボリスが代官的な市長官として派遣されたと考えられる。この派遣は，1118 年のノヴゴロド貴族へのフセヴォロドへの忠誠の誓約の強制措置（上注 124）に続く，一連のキエフ公のノヴゴロド統制政策のあらわれである [Янин 2003: С. 99][Фроянов, Дворниченко 1988: С. 164]。

134）クリスチナ (Христина) は, 1090 年代に結婚したスウェーデン王女（インゲ一世ステンキルソン〔スウェーデン王在位 1080-1112 年〕の娘）のクリスチナ (Kristina Ingesdotter) のこと（上注 33）。ムスチスラフ [D11] はこのときベルゴロドの公であったことから，ベルゴロドで没したのだろう。実際，キエフの年代記である *Ип* の 6629 年記事には,「ムスチスラフの公妃が死んだ。（1122 年）1 月 17 日だった」(и княгыни Мьстислаля. умре месяца генваря. въ смыинадесятъ.) とあり，日付を確認することができる。本 *H1* 記事が 6630(1122) 年の項に置かれているのは，次のムスチスラフの再婚の記事と結びつけるためだろう。

135）ドミトル・サヴィドヴィチは，1117 年 12 月～ 1118 年 7 月の期間ノヴゴロドの市長官だった人物。ノヴゴロド公時代のムスチスラフ [D11] とは緊密な関係にあった。上注 120 を参照。

136）*Ип*6630 (1122) の項には，対応する内容で，се же лѣто привезоша из Новагорода Мьстиславу жену другую Дмитровну, Завидову внуку（その年，ノヴゴロドからムスチスラフの二番目の妻，ドミトルの娘，サヴィドの孫が連れて来られた）という記事がある。これがキエフの視点から書かれているのに対して，本 *H1* 記事は,「キエフで結婚した」(оженися... в Киевѣ) と「ノヴゴロドで娶った」(поя... в Новѣгородѣ) を別々に書き（時間的にはノヴゴロドでの婚約式と，その後，花嫁をキエフに移しての結婚式の順番だが），ノヴゴロドの行事であることを強調している。

記事の時系列から見て，この結婚は 1123 年 2 月頃と考えられる。

6631(1123) 年。

ムスチスラフ [D11] の子フセヴォロド [D111] が，ノヴゴロドにおいて結婚した[137)]。

同じ年にペレヤスラヴリの聖ミハイル教会 (церкви святого Михаила) が倒れた[138)]。

春に[139)]，フセヴォロド [D111] は，ノヴゴロド人とともに，エミ人[140)] (ѣмь) を攻めた。そしてかれらを打ち負かした。しかし,〔遠征の〕道中は過酷であり, パン〔一個〕を 1 ノガタ[141)] で買ったほどだった。

137）フセヴォロド [D111]（当時 17 ～ 20 歳）は父親と同じ結婚シーズン（1123 年 3 月頃）に結婚を命じられたのだろう。結婚相手は，スヴャトスラフ・ダヴィドヴィチ [C31]（スヴャトーシャ）の娘である（上注 53 参照)。かの女は，1107 年に父スヴャトーシャがキエフで修道士になって以降は，祖父のダヴィド [C3] が公支配していたチェルニゴフに母親とともに住んでいたと思われる。1123 年 8 月 1 日にダヴィドが病没していることから見て，祖父ダヴィドの病気と死後に想定される不安定な境遇が，かの女と母親にとってはこの結婚の動機付けになったのかもしれない。

138）この「聖ミハイル教会」は，1090 年に献堂された（上注 17）ペレヤスラヴリの首座教会のこと。*Твр* の対応記事には，иже заложи епископъ Ефремъ, а стояла 34 лета. という付加があるが，この献堂の 1090 年から数えれば，1123 年は確かに 34 年目になる。

*Ин*6632 (1124) 記事には，Земля потрясеся мало. и падеся церкви великия святого Михаила у Переяславли, мая въ десятыи. юже бѣ създалъ и украсилъ блаженыи епископъ Ефрѣмъ（大地がわずかに揺れ，ペレヤスラヴリの〔大天使〕聖ミハイル首座教会が崩落した。5 月 10 日 のことだった。この教会は福者たる主教エフレム が建立し，壁画を描かせたものだった）と，1124 年 5 月 10 日の地震による出来事であることが記されている。本 *H1* 記事は，斜線部分のテキストを抽出して作成された可能性が高い。

139）記事の配列の時系列から見て，1123 年 2 月～ 4 月頃ではないか。

140）「エミ人」(*H1-M* ѣмь; *H1*-C емь) は「ヤミ人」(ямь) の表記もあり, 現在のフィンランドの南部一帯に居住していたバルト･フィン系の部族 [ДревняяРусь 2006: C. 274-275]。*ПВЛ* 冒頭の民族誌記事には,「ルーシ人に貢税を納めている」民族の一つとして「ヤミ人」(ямь) が挙げられており,「これらは自分の言葉を持っており，ヤフェトの種族であり，北の国々に住んでいる」とされている，また，本年代記 6550(1042) 年の項では,「ウラジーミル [A] は，ノヴゴロド人とともに，エミ人 (емь) を討つべく遠征した」と短い記事がある。興味深いことに, 対応する *ПВЛ* 記事には, これに加えて。「ウラジーミル [A] の軍勢の馬が死ぬときには，まだ馬が息をしている間に馬から皮をはぎ取った。それほど馬の間に疫病が広まっていたのである」との追加記述があり，以前にもエミ人への遠征が困難であったことわかる。

141）「パンを 1 ノガタで買ったほどだった」(яко купляху по ногатѣ хлѣбъ) の「パン」(хлѣбъ) は, ここでは単位がないことから「一個あたり」を指している。「ノガタ」(ногата) は『ルーシ法典』で使われていた貨幣単位で，グリヴナ (гривна) の 1/20 の価値。銀重量換算すると 2.55g に相当する［ノヴゴロド第一年代記 (3)：注 255］。なお，『ルーシ法典（簡素版)』の 28 条によれば，1 ノガタは子ヤギや雄ヒツジ一頭の罰金額（つまり価値）に相当しており，それがパン一個の値ということは，かなりの高騰ということになる。

6632(1124) 年。

8 月 11 日，晩課の前に太陽が欠け始めた[142]。そして完全に滅びた〔欠けた〕。おお，そのとき大いなる恐怖があった。闇があった。そして星々と月があった。そして〔太陽は〕すぐに満ち始め，再び元に戻った。〔ノヴゴロドの〕城市で皆が喜んだ[143]。

6633(1125) 年。

大いなるウラジーミル [D1] (Володимиръ великыи)，フセヴォロド [D] の息子がキエフで逝去した[144]。また，かれの子のムスチスラフ [D11] を，父の〔公〕座に据えた[145]。

同じ年，大いなる嵐が雷鳴と雹とともにあった。そして〔嵐は〕家屋を崩壊させた。波は小礼拝堂 (божницы) を〔洗い流して〕壊し，家畜の群れをヴォホフ川で (въ Волховѣ) **溺れさせた**。

142）ノヴゴロドでは，1124 年 8 月 11 日に皆既日食が起こっている。食の始めが，現在の時間（GMT+3 時間）にして 14:15 頃，最大の食分が 15:20 頃，食の終わりが 16:30 頃だった。8 月中頃のこの地の日没は 21:00 頃であり，晩課はその 2 時間前ほどから始まるとして，日食の時間帯はたしかに「晩課の前」(перед вечернею) に相当している（上注 113 参照）。

143）本記事の日食については，*Ип*, *Лвр* にも記述されているが，内容は次のように異なっている。*Ип* «томъ же лѣтѣ бысть знамение въ солнци от вечера аки месяць малъ. и мало не смерчеся. августа въ 1 на десять день»; *Лвр* «В то же лѣто бысть знаменье въ солнци въ 9 часе дне: бывшю ему яко мѣсяць малъ и мало не смерчеся по полуденьи, месяца августа въ 11 день.» 本 *H1* 記事は，このどれにも依拠していないノヴゴロド独自のものである。

144）ウラジーミル・モノマフ [D1] の死については，本 *H1* 記事は，他の諸年代記に比べてもっとも記述が短い。*Ип, Лвр* 記事では記述がそれぞれ異なるが，逝去の日付，場所，葬儀の様子，埋葬地などが記され，モノマフ公への讃詞が付されている。これに対して，*H1* 編者は，キエフ資料（おそらく *Ип* 系統の記事）から事実関係だけを抽出して伝えている。これは，キエフの政治情勢から距離を取ろうとしている編者の立場の反映だろう。なお，モノマフ公に対する「大いなるウラジーミル」(Володимиръ великыи) の呼称は，「キエフ公表」[№ 106] の中でも使われているが，*Ип* の対応記事で使われている呼称（尊称）«христолюбивыи <u>великыи</u> князь всея Руси» (*Лвр*: «блговѣрныи и великыи князь русскыи») の下線部分を採ったものか。モンゴル来襲以前の 12 世紀～ 13 世紀 20 年代のノヴゴロドは，短期間の例外を除いて全てウラジーミル [D1] = ムスチスラフ [D11] 一門の諸公が公座に就いており，*H1* 編者はその始祖としてのウラジーミル・モノマフに一定の敬意を払ったのだろう。なお，公 (князь) に対する「大いなる」(великыи) の呼称は，『キエフ年代記』『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』などの用例を見ると，公の死没，支配の始まりなどについての記事の中で称揚的に使われている（［イパーチイ年代記 (12)：注 345］参照）。

145）キエフの付属都市ベルゴロドにいたムスチスラフ [D11] は，父モノマフの死の翌日（1125 年 5 月 20 日）にはキエフの公座に就いた。ここで興味深いのは，これについて *Ип, Лвр, Твр, НСГ* などの記事では，«Мстислав сѣде на столѣ»（ムスチスラフは公座に座した）の表現が使われているのに対して，本 *H1* 記事だけは，«Мстислав посадиша на столѣ»（ムスチスラフを公座に据えた）（この場合，省略されている主語は「キエフ人」(Кыяне) が想定される）と表現されている。これは，明らかに *H1* 編者の編集段階の書き換えによるもので，そこには，都市民に公を自らの公を選出する（「据える」）主導権があるというノヴゴロド流の考え方が反映しているだろう。

その他の〔家畜たちは〕なんとか生きたまま助けあげた[146)]。

この年，アントンの教会 (церковь Антонова) の〔壁画を〕描き上げた[147)]。

同じ年，ノヴゴロド人はフセヴォロド [D111] を公座に据えた[148)]。

6634(1126) 年。

フセヴォロド [D111] は，キエフの父のもとに行った。そして，公座に〔就くために〕再び

146）1125 年秋のヴォルホフ川増水によるノヴゴロドの災害についての記事である。この記事の *H1-M* の構文は，*H1-C* (*Сн*) と比べると語順の入れ替えなどがあり，かなり乱れている。*Км, Ак* には «скотины нълна в Волхв» の文があるが，文意が不明であり，また，接続小詞としての нольно, нольна は 15 世紀以降に使われるようになった用法であることから，この文は *H1-M* 段階での改変によるもの。*H1-C* (*Сн*) «стада скотины истопи въ Волховѣ» を改変したものである。以上から，*H1-C* (*Сн*) の読みを本来のものとして，これを訳した。

147）1119 年にアントーニイ修道院の石造りの主聖堂が完成し（上注 132），1125 年に聖堂内の壁画（フレスコ画）が完成したということ。

148）1117 年にムスチスラフ [D11] がノヴゴロドを去ったときに，かれによって息子フセヴォロドはすでに「息子はノヴゴロド〔の公座〕に据えられた」(а сына посади в Новѣгородѣ〔Всеволода на столѣ〕)（上注 111）にもかかわらず，なぜ 1125/26 年のこの時点で，改めて「ノヴゴロド人がフセヴォロドを公座に据えた」(посадиша на столѣ Всеволода новгородци) のだろうか。まず，1117 年の時点でフセヴォロドはまだ 9-14 歳であり（生年は 1103-08 年と想定される [Домбровский 2015: С. 101]），政治を担える年齢ではなかったのに対して，1123 年（15-20 歳）に結婚して，遠征を指揮するようになり（上注 137, 140），1125/26 年には 17-22 歳とすでに成年になったという条件の変化があるだろう。その上で，1125 年 5 月にノヴゴロド統制政策をとっていた（上注 133）ウラジーミル・モノマフが没したことによって，ノヴゴロド貴族がその主導性を高め，フセヴォロドが「公座」(стол) に就くにあったって，かれと約定 (ряд) を結んだと思われる。そのことは，本年代記 1132 記事で，父ムスチスラフが没したことでキエフ公になった叔父ヤロポルク [D15] は，フセヴォロドにペレヤスラヴリへの公座移転を命じたが，そのときフセヴォロドが「ノヴゴロド人に対して〈自分はお前たちのところで死ぬつもりだ〉という十字架接吻〔の誓いを〕していた」，つまりペレヤスラヴリ行きはノヴゴロド人への誓いに反していた（下注 192）という記事によって確認できる。そのようなノヴゴロド貴族に主体的な活動を許容する公を長く公座に置く約定を結んだことが，「ノヴゴロド人が（…）据えた」(посадиша ... новгородци) という表現に反映していると考えられる（[Фроянов, Дворниченко 1988: С. 163-165][Янин 2003: С. 97]）。なお，ヤーニンは，この「終身公座」の協定は 1117 年に結ばれたものとしているが [Янин 2003: С. 89-91]，事態の推移から見て，この 1125/26 年のことと解釈するほうがより妥当ではないか。

ノヴゴロドへやって来た。2 月 28 日[149] だった[150]。

同じ年，市長官の職をミロスラフ・ギュリャティニチ[151] (Мирослав Гюрятиниць) に与えた。

6635(1127) 年。

フセヴォロド [D111] は，ノヴゴロドのペトリャタの屋敷に[152]，自分の息子〔イヴァン〕の名において石造りの聖イオアン教会 (церковь камена святого Иоанна) を定礎した[153]。

同じ年に，大吹雪 (метылъ густъ) が大地と水面と家屋をおおった[154]。そして 2 夜のあいだ，4 日のあいだ〔続いた〕。

同じ年に，典院アントーニイ (игумен Антонии) がノヴゴロドにおいて石造りの食堂の定礎

149）この 6634 年の 2 月 28 日は，3 月式暦に拠れば 1127 年になるが，事件の時系列から見て，これは 1126 年 2 月 28 日と見るべきである [Бережков 1963: С. 231-232]。

150）フセヴォロド [D111] は，ノヴゴロド貴族たちと公座に終身座す内容の約定を結ぶと（もしくは結ぶために）（上注 148），その承認を得るために，キエフの父ムスチスラフ [D11] のもとに赴いたと考えられる。さらに，次の記事（下注 151）で，キエフから派遣された代官的な市長官ボリス（上注 133）から交代して，ノヴゴロド貴族出身のミロスラフが市長官職に就いていることから。キエフ公にとっては一定の譲歩となるこの市長官交代についての承認を得ようとしたのではないか。1130 年にも同様の事態が繰り返されており，代官的な市長官ダニールが交代（解任）させられる直前に，フセヴォロドはキエフへと赴いている（下注 173 参照）。

なお，この後しばらくは，フセヴォロドはノヴゴロド人と確執なく活動していることから見ると，父親の承認を問題なく得たと考えられる

151）「ミロスラフ・ギュリャティニチ」(Мирослав Гюрятиниць) はノヴゴロドの有力貴族で，年代記によれば，1126 年から 1128 年まで市長官を務め，1132 年にプスコフの市長官に転じている。さらに，1135-1136 年に再度ノヴゴロドの市長官になったが，1136 年 1 月 28 日に没している [Великий Новгород. Энциклопедический словарь: 295: Мирослав-Яков(?) Гюрятинич]。ただし，「ノヴゴロド市長官表 (A)」[№. 111-1] および「市長官表 (Б)」では，ボリスのあとに「ミロスラフ」の名はなく，すぐにザヴィド（下注 162）が続いていることから，1126 年の就任については疑問視する研究者もいる [Янин 2003: С. 93]。

152）「ペトリャタの屋敷に」(на Петрятинѣ дворѣ) の「ペトリャタ」(Петрята) は，ピョートル（Петр）の通称形で，「ノヴゴロド市長官表」[№. 111-1] の 5 番目（市長官表 (Б) では 6 番目）にある人物，すなわちムスチスラフ公 [D11] 時代に市長官を務めたノヴゴロド貴族である可能性が高い。異説としては，この場所にヴァリャーグ人の（すなわちカトリックのハンザ商人）ための聖使徒ペトロ教会があったことによるというものもあが [Макарий 1860 Ч. 1: С. 286, Прим. 126], 可能性は低い。なお, この教会は, 現在商業地区にある「オポキの聖ヨハネ教会」(храм св. Иоанна на Опоках) に相当しており，洗礼者ヨハネの生誕〔祝祭日 6 月 24 日〕に献堂されている。

153）フセヴォロド [D111] の息子のイヴァン [D1111] は，おそらくこの年（1127 年）に誕生したかきわめて幼少だったと推定される。この記事は，息子（おそらく長子）の健康を祈って，守護聖人（洗礼者ヨハネ）に献じた聖堂が父親のフセヴォロドによって定礎されたということだろう。なお，イヴァンは 1128 年 4 月 16 日に没している（下注 161）ことから，このとき健康に問題を抱えており，それがこのヨハネ教会定礎のきっかけになったのではないか。

154）6635 年記事の時系列から見ると，1126/27 年冬の出来事である。

式を行った[155]。

同じ年に，ヴォルホフ川に大水があった。また，雪が聖ヤコブの日[156]まで(до Яковля дни)残っていた。また，秋には，酷寒が**すべての実り**［すべての春蒔きと秋蒔き作物］[157]をだめにした。そして，冬が過ぎてもずっと飢餓があった。ライ麦は1オスミンカが半グリヴナ[158]〔の価格〕だった[159]。

6636(1128) 年

聖ゲオルギイ〔修道院の〕典院キリアク (Кюрьякъ) が逝去した[160]。

同じ年の 4 月 16 日にフセヴォロド [D111] の息子，ムスチスラフ [D11] の孫にあたるイヴァン (Иоанн)[D1111] が逝去した[161]。

同じ年，ノヴゴロドで，ザヴィド・ドミトロヴィチ (Завид Дмитровичю) に市長官職が与え

155）一連のアントーニエフ修道院 (Антониев монастырь) 関係記事のひとつ。これは，聖母生誕教会（上注 117）に隣接して建てられた，食堂付きの聖堂「主の迎接教会」(Сретенская церковь)）の定礎を指しており，修道院を拡張したものだったのだろう。なお，本記事の「定礎式を行う」の原語は обложи で，通常の「定礎する」(заложити，すなわち「礎石を置く」とほぼ同義だが，建築する場所の境界を定める儀式を行うというニュアンスがある。

156）聖ヤコブの日 (Яковль день) は正教会暦には幾つかあるが，遅い雪という文脈から判断して，使徒でゼベダイの子聖ヤコフ (святой апостол Иаков Зеведеев) の祝祭日を指しており，4 月 30 日に相当する。

157）「すべての実り」は底本 (*Км*) では все обилье だが，*Ак* всю рожь озимици（すべての秋蒔きライ麦）; *Сн* вьрьшь всю и озимицѣ（すべての春蒔きと秋蒔き作物）の異読がある。内容の合理性から見て，*Сн* の読みが本来である可能性が高い。

158）「オスミンカ」(осминка) は осьмина の指小形で，文字通りは 1/8 を意味する穀物の秤量単位。ここで，穀物の基礎単位である кадь（カジ）を，かりに後代のライ麦 230kg と同じとすると，1 オスミンカは 29kg ほどになる。また，「半グリヴナ」(полгривна) は，キエフのグリヴナ（銀換算で 51g）の場合，銀換算で 25.5g（［ノヴゴロド第一年代記 (3)：注 251］参照）になる。かりに，ノヴゴロドで発掘される銀グリヴナ（銀重量 204g）相当とすると，半グリヴナは 102g の銀相当になるが，これは高すぎるだろう。

159）ここでは，1126 年の秋から 1126/27 年冬にかけてのヴォルホフ川の増水，1127 年 4 月末まで雪が解けない長い冬，1127 年秋の早すぎる酷寒の到来と穀物の被害（不作），それによる 1127/28 年冬中続いた飢餓と，およそ 1 年半の間にノヴゴロドがこうむった天災を一つの記事にまとめている。

160）典院キリアクについては，上注 128 を参照。かれを継いでイサイヤ (Исаия) がユーリイ修道院の典院となっている（上注 130 のグラフィティ，および下注 226 を参照）。

161）イヴァン [D1111] については上注 153 を参照。死亡時には当年か 1 ～ 2 歳だったと思われる。ヤーニンとガイドゥコフは，「イヴォール」(Ивор, Ивер) の銘の入った印章を「イヴァン」と同定しており [Янин, Гайдуков 2000: С. 208]，その場合はイヴァンが洗礼名で，イヴォールが世俗名（公族としての名前）ということになる。また，死亡の日付について *Твр* に априлия 10 の異読があるが，これは写字生の誤記によるものだろう。イヴァンは 1128 年 4 月 16 日に没したとするのが妥当である。

られた[162]。

この年，なんという災いだったことか。ライ麦 1 オスミンカが 1 グリヴナだった[163]。菩提樹の葉，白棒の樹皮を食べた者たちがいた。別の者たちは，樹木の髄を粉にひき，籾ガラと藁を混ぜて〔食べた〕。ある者たちは，アザミ，苔，馬肉〔を食べた〕。こうして飢えのため〔ある者は〕倒れた。死体が街路に，市場〔の広場〕に，街道など至るところにあった。死んだ者たちを城市から運び出すために人が傭われた[164]。悪臭があり，家から出ることができなかったのである。悲しみと悲惨がすべての者の上にあった。父と母は，自分たちの子供を大商人[165]の船に乗せて[166]，ただ同然で与えた。〔かれらの〕ある者は途中で死に，別の者たちは異国の地へと散って行った。こうして，罪のために，われらの地は滅んだのである。

この年，ヴォルホフ川で大水があった。そして多くの家屋を押し流した[167]。

そして，ポロツク公でフセスラフ [0811:L] の息子ボリス [L1] が死んだ[168]。

そしてノヴゴロドの市長官ザヴィド・ドミトリエヴィチが死んだ[169]。

162）ザヴィド (Завид) は，市長官ドミトル（上注 120）の息子と想定されノヴゴロドの有力貴族。「ノヴゴロド市長官表 (A)」[№. 111-1] ではボリスの後に置かれている。［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 662］。*H1* 記事によれば，前任の市長官はミロスラフ・ギュリャティニチ（上注 151）だが，かれは死没したわけではないので，この市長官の交代は，ノヴゴロド貴族内部での人事調整の結果と考えられ，そのことは本記事の「市長官職を与えられた」(даша посадничество) の表現に反映している。

163）前年の飢餓のときのライ麦の価格が 1 オスミンカ半グリヴナだったから（上注 158），この年（1128 年）はさらに二倍の物価上昇になり，人々はさらに窮乏したことになる。1127/28 年の冬から続いた飢餓（上注 159）は終息することなく，1128 年の夏～秋には情況はさらに悪化したということだろう。

164）死体を скудельница と呼ばれる郊外に掘った集団墓地へと運び出すのである。

165）「大商人」と訳した гость は，ここでは海を渡ってノヴゴロドに渡来して，奴隷，毛皮，蜜蝋などを買い付ける外国商人のこと。外国と取引をするノヴゴロド商人を指す場合もある。

166）「船に〔乗せて〕」(въ лодью) は *Сн* のみの読み。「船に乗せて」(въсажаше въ лодью) が構文的に自然であることから，*Сн* が本来の読みで，*H1-M* では въ лодью が脱落したのだろう。

167）*Ип* 6637(1129) 年と *Лвр* 6636(1128) 年の記事に，大水の場所は示されていないが，記述が非常に似ている箇所がある。どの記事も，次のボリス公逝去の記事と接していることから，典拠は同一で同じ事態を伝えていると考えられる。本来は，本 *H1* 記事の伝える秋の増水のことと考えられ（1127 年にも同様の記述がある），これが本来の典拠だったのではないか。

168）*Ип* 6637(1129) 年と *Лвр* 6636(1128) 年の記事に対応する記事がある（前注も参照）。ただし，*Ип*, *Лвр* が преставися（逝去した）であるのに対して，本 *H1* 記事では умре（死んだ）と言葉遣いが異なる。ボリスの父フセスラフの 6609(1101) 年の *H1* の死亡記事は преставися になっていることから，この умре は，*H1* 編者による独自の改変であることがわかる。次の市長官ザヴィドの死亡記事（やはり умре）に引きずられたか，もしくは内容的に関連があるのではないか。

169）ザヴィドは，1128 年の夏ごろに市長官職を与えられており（上注 162），この 1128 年記事の死去（1128 年秋～ 1129 年 2 月）は在職期間が短すぎて不自然である。記事においても「死んだ」(умре) と卑小表現になっており，次の 6637(1129) 年記事ですぐに代わりの市長官がキエフから派遣されていること（下注 170）から見ても，謀殺など政治的な原因による死亡と考えるべきだろう。

6637(1129) 年。

キエフからダニール (Данила) がノヴゴロドへ市長官となるために到来[170] した[171]。

6638(1130) 年。

フセヴォロド [D111] は，ノヴゴロド人とともに，チューヂ人を攻める〔遠征を〕した。冬の斎戒期だった[172]。そしてかれらを斬り殺し，また家屋を焼き，また女と子供〔捕虜として〕連れ帰った[173]。

同じ年，（かれは）キエフの父のもとへ行った[174]。

同じ年，聖イオアン教会 (церковь святого Иоанна) が完成した[175]。

同じ年，海の向こうから来た者たちで，ゴート人のところから[176] きた者たちは，7 隻が沈没した。かれら自身も溺れ，商品も〔沈んだ〕。他の引き揚げられた〔助けられた〕者たちは，裸に〔身ぐるみ失って〕なってしまった。他方，デンマークから[177] 来た〔大商人〕たちはつ

170）「到来した」にあたる語は，*Сн* вниде; *Ак* вниде; *Км* прииде だが，*Км* は改変による固有読み。

171）ダニールの名は「ノヴゴロド市長官表 (A)」[№. 111-1] にもザヴィドの後に置かれており，「市長官表 (Б)」には Данила из Киева となっている［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 662］。先のボリス（上注 133）と同様に，キエフ公から派遣された代官的な市長官である。なお，かれを最後として，これ以降ノヴゴロドではキエフから派遣された代官的な人物が市長官職に就くことはなかった。

172）「冬の斎戒期」(зимѣ въ говѣние) とは 1129/30 年冬のことで，この年の斎戒期 (говение)，すなわち大斎 (великий пост) の期間は 1130 年 2 月 10 日～ 3 月 22 日にあたっている。

173）これは，父親のムスチスラフ [D11] が，1113 年（上注 84），1116 年（上注 106）に行った遠征と同様の，チューヂ人の捕虜獲得を目的とした冬季の掠奪遠征。「女と子供」は奴隷として使役するだけでなく，海外の商人へ高値で売れる商品だった。

なお *H4, HK1* では，翌 6639(1131) 年のチューヂ人討伐遠征 [№. 317] を，誤ってこの 6638(1130) 年の記事として移し替えている。

174）このフセヴォロドのキエフ行きは，1126 年のキエフ行き（上注 150）と同様に，ノヴゴロドにおける新体制（前年のキエフから派遣された代官的市長官ダニールの赴任にかかわる）をキエフ公の父ムスチスラフに報告し承認を得るためのものではなかったか。

175）1127 年にフセヴォロド [D111] が定礎した，オポキの石造りの聖ヨハネ聖堂のこと（上注 153）。3 年かかって完成したことになる。

176）「ゴート人のところ」は，*H1-C (Сн)* съ готъ; *Км* гость; *Ак* гости の異読がある。*H1-M* 諸写本の読みは改変によるもので，*H1-C* が本来の読み。*H1-M* 編者は съ готъ の意味が分からなかったのだろう，自分の分かる読みに単純化して書き換えている。この готы は「ゴート人」すなわち，現ゴットランド島 (Gotland) の住人のことで，*ПВЛ* 冒頭の民族誌的記述にも готѣ, готе, гте としてその存在が記されている [PVL 2003: p. 14]。

177）「デンマークから」も異読があり，*H1-C (Сн)*, из Дони: *Ак* к себѣ だが，後者は上注 175 と同様の合理単純化の改変。Донь は デンマーク (Дания) のことで，1134 年記事でも記されている [Фасмер Т. 1: Донь]。

つがなく〔ノヴゴロドへ〕やって来た[178]。

同じ年，ノヴゴロド大主教イオアン (Иоанн) は位を剥奪された[179]。**20 年座していた**[180]。

そしてニフォント (Нифонт) が大主教に叙任された[181]。〔かれは〕神聖な人士で，神を大いに恐れていた。かれは，1 月 1 日の聖ヴァシーリイの〔祝祭〕日，聖体礼儀[182] の時にノヴゴロドにやって来た。

また，ペトリロ[183] (Петрило) にノヴゴロドの市長官職を与えた。

178）このノヴゴロドへ向かった外国商人がこうむった災難についてはその原因が書かれていないが，1125 年（上注 146），1127 年（上注 156），1128 年（上注 166）と頻繁に起こっていたヴォルホフ川の氾濫（嵐，大水）によるものではないか。

179）イオアン (Иоанн Ппоьян) の主教座剥奪の原因については，定まった説はない。ヤーニンによれば，1110-20 年代の，キエフとノヴゴロドの教会の間の対立の反映であり，イオアンの反キエフ教会（反ビザンツ教会）の姿勢があまりに高じたため，キエフ派の教会人によって追放されたとしている [Карпов 2017: С. 173]。他方，ムーシンは，この時代の教会経済の脆弱さ，修道院の経済的独立の傾向に注目して，イオアンは，教会の首長と為政者（ノヴゴロド公）との間の従来のビザンツ的関係，すなわち，公による十分の一税による教会支持体制を守ろうとしたが，教会の反対派によって排斥されたとしている [Мусин 2016: С. 59-69]。

180）「20 年座していた」(сѣде лѣт 20) は *H1-M* のみの読みで，*H1-C* にはない。*H1-M* 最初期の編集における付加だろう。長期の在任（とその功績）を強調するためのものか。かれは，1110 年 12 月 20 日にノヴゴロドに到来，1130 年に主教座剥奪だから，確かに 20 年になる。なお，「ノヴゴロド主教表」[№109] も，ほぼ同じ記述が書かれている。

181）ニフォントはキエフ洞窟修道院で修道士となり，後代の史料によれば，ニキーフォルという俗名のキエフ人だったという。他方，かれはギリシア人でビザンツ典礼に通じていたという説もある。イオアンの主教座剥奪（上注 178）によって，府主教ミハイルによって急遽ノヴゴロド主教に叙任され，キエフから赴任した。おそらく，キエフとノヴゴロドの間の教会および行政における紛争を解決する使命を負っていたと思われる [Карпов 2017: С. 337-338]。

182）この「聖体礼儀」(обѣдняя) は，ギリシア教父の大バシレオス（330 − 379) 作とされる「大バシレオスの聖体礼儀」(литургия Василия Великого) のことを言っており，1 月 1 日のこの日の他に，キリスト降誕祭，主の洗礼祭などの祝日と大斎期間など，一年に 10 回しか行われない特別な儀礼だった。通常の主日（日曜日）に行われる「金口イオアンの聖体礼儀」(литургия Иоанна Злаоуста) に比べて，奉事の聖歌が長く，司祭（この場合は主教）が黙唱する祈祷文が長大であることから，そのような特別な奉事を主教ニフォントは赴任当初から執行できる有能な人物だったという讃辞がこの記事には込められている。

183）「ペトリロ」(Петрило) は，ピョートル (Петр) の通用名。ミクーラ (Микула) の息子で，ネレフスキイ地区の貴族。1131-1134 年に市長官を務め。さらに 1135 年に対スーズダリ遠征を指揮したが，ジダノヴァ丘の戦いで戦死している。

6639(1131) 年。

太陽にしるしがあった。3 月 30 日の晩課の時刻だった [184]。

同じ年の冬に，フセヴォロド [D111] はチューヂ人を攻める〔遠征を〕行った。そして大いなる損害があった。〔チューヂ人は〕多くの身分の高い人たちを，ノヴゴロド人を，クリン [185] (Клин) で打ち殺した。1 月 23 日の土曜日 [186] だった [187]。

同じ年，大主教ニフォント (архиепископ Нифонт) が，アントーニイ (Антон) を典院に叙任

184）これは，1131 年 3 月 30 日の皆既日食を指している。最大食分の時は，現在のノヴゴロドの時間 (GMT+3 時間) にして 17:32 頃だった。この日の日没は 19:30 頃だから，日没前の晩課 (вечерня) の時間帯に確かに相当している。

185）クリン (Клин) の地名は東スラヴの各所にあるが，ここでは，ヴェリーキエ・ルーキ (Великие Луки) から東へ 30km ほど離れた，プスコフ州クニヤ地区 (Куньинский район Псковской области) の「クリン村」(деревня Клин) に相当する。ノヴゴロドからだと，南へ 250km ほど下った場所になる。これは，当時のノヴゴロドの地，スモレンスク公領，ポロツク公領が共通の境界の近くに位置している（下注 186 参照）。

186）6639) 年記事だが，3 月暦であることから，これは 1132 年 1 月 23 日の土曜日に相当する。

187）この遠征については，*Лвр*（*Ип* もほぼ同じ）にキエフの視点から見た次のような記事がある。*Лвр*6638(1130): В лѣто 6638. Посла Мстиславъ сыны своя Всеволода и Изяслава и Ростислава с дружиною ихъ на чюдь, и взяша и, и дань на нь възложиша.（ムスチスラフ [D11] は自分の息子たちフセヴォロド [D111]，イジャスラフ [D112:I]，ロスチスラフ [D116:J] とかれらの従士たちをチューヂ人を攻めるために派遣した。かれらは，〔戦利品を〕とり，かれらに貢税を課した）。この *Лвр, Ип* 記事と本 *H1* 記事の内容を総合すると次のようなことが分かる。① この遠征は，1130 年にフセヴォロドとノヴゴロド人がチューヂ人（おそらくエストニア地方の）に対して行った破壊的・掠奪的な遠征とは異なり，キエフへの貢税を拒否して決起した異族（チューヂ人）を鎮圧して，安定した貢税体制を再建するためのものだった。そのため，キエフ公ムスチスラフ [D11] は，この一帯を囲むノヴゴロド公（フセヴォロド），ポロツク公（イジャスラフ），スモレンスク公（ロスチスラフ）の三人の息子に命じて，総力体制で鎮圧を行った。②反乱を起こしたチューヂ人とは，ロヴァチ川 (Ловать) とオボリ川 (Оболь) 最上流域一帯のいわゆる「ザヴォロチエ地方」(Заволочье) に居住していた部族（連合）を指しており，かれらは早くから（おそらく 10 世紀後半のオリガ公妃の時代には），キエフ公の徴税体制に組み込まれていた。③ 遠征は全体として当初の目的を達したと思われるが，ノヴゴロド遠征軍は大きな損害 (пакость) をこうむった。ノヴゴロド人軍兵の指揮官たち（おそらくノヴゴロド貴族たち）の多くが敵の抵抗にあって殺されたのである。*H1* 記事はこの事態を取り上げて記している。

なお，1078 年 5 月に，ノヴゴロドを追放されたグレーブ公 [C1] がやはりこの地のチューヂ人の手で殺されている（上注 8：№ 220 参照）。ザヴォロチエのチューヂ人はとりわけ武力に秀でていたということだろうか。

した[188]。

6640(1132) 年

ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D11] がキエフで逝去した。4 月 14 日だった[189]。

そして，ムスチスラフ [D11] の兄弟であるヤロポルク[190] [D15] が〔キエフの〕公座に就いた[191]。

同じ年，フセヴォロド [D111] は，ルーシへ (в Русь)，ペレヤスラヴリへ (Переяславлю) 行った。〔これは〕ヤロポルク [D15] の命令[192] によるものだったが，〔フセヴォロドは〕ノヴゴロド人に対して十字架に接吻して，「自分はお前たちのところで死ぬつもりだ」〔と誓っていたのであ

188）「アントーニイ修道院」関連記事だが，*Н1*6625(1117) 年（上注 116）および 6635(1127) 年（上注 155）の建設についての記事にはすでに，「典院アントーニイ」(игумен Антон) の言い回しが見え，ここで，あらためて「典院に叙任」したというのは一見すると奇妙である。これについては，1117 年，1127 年の時点では，アントーニイは正式な典院 (игумен) としての叙任を当時のノヴゴロド主教イオアン (Иоанн Попьян) から受けておらず，イオアンが退任（主教座の剥奪）してのちはじめて，正式な叙任が可能となったと考えるべきだろう [Мусин 2016: С. 66]。これについては，キエフから派遣され，ノヴゴロドの教会との和解の任務を負った（上注 180）主教ニフォントの力が大きかったと思われる。

189）*Лвр*6640(1132) 年記事は，同様にムスチスラフ [D11] の死について簡潔に，4 月 14 日の日付も記しており，この記事（もしくは共通資料）が本記事の典拠と思われる。なお，*Ин*6641(1133) 年の対応記事は，死亡の描写が装飾的であり，逝去の日付は 4 月 15 日の金曜日となっている。

190）ヤロポルク・ウラジーミロヴィチ [D15] は，1114 年に没した兄スヴャトスラフ [D13] のあとを継いで，ペレヤスラヴリの公座に就いていた。

191）前注と同様に，*Лвр*6640(1132) 年記事を典拠にまとめたものだろう。*Ин*6641(1133) 年対応記事では，キエフにやってきて 4 月 17 日の公座に就いたことが，*Лвр*6640(1132) 年対応記事では，キエフの人々がヤロポルクを招聘したことが書かれている。

192）この「命令」(повелѣние) はヤロポルク [D15] のキエフ公座就位直後に出されたと思われるが，その理由と背景については，*Лвр*6640(1132) 年の対応記事に次のような記述がある。«и да ему Переяславль по хрестьному цѣлованью, акоже ся бяше урядил с братом своим Мстиславомь по отню повелѣнью, акоже бяше има далъ Переяславль съ Мстиславом»（〔ヤロポルク [D15] はフセヴォロド [D111] に〕ペレヤスラヴリを与えた。それは，十字架接吻〔の誓い〕に拠ったものであった。すなわち，〔ヤロポルクが〕自分の兄弟ムスチスラフ [D11] とかつて約定したもので，父親〔ウラジーミル・モノマフ [D1]〕の命令による〔約定〕だった。それは，〔ウラジーミル・モノマフが〕二人に，〔すなわちヤロポルクと〕ムスチスラフに，ペレヤスラヴリを与えたというものだった）[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 301]。これに拠れば，ウラジーミル・モノマフ存命の時代に，すでに，モノマフの死後，キエフの公座は，ムスチスラフ [D11] ⇒ヤロポルク [D15] の順番で継ぎ，ヤロポルクがキエフ公になったときのペレヤスラヴリの公座は，ムスチスラフの一族（すなわちフセヴォロド [D111]）が就位することが，ヤロポルクとムスチスラフの間の「約定」(ряд) によって決まっていたことが分かる。ヤロポルクはこれを実行に移したことになる。

る〕[193]。

さて，ユーリイ (Юрги)[194][D17] とアンドレイ (Андрѣи)[195][D18] は〔お互いに〕こう言った。「見よ，あのヤロポルク [D15]，われら〔二人〕の兄弟は，自分が死んだあとには，キエフをフセヴォロド [D111] に，自分の甥に与えようとしているではないか」[196]。そして，〔二人は〕かれ〔フセヴォロド [D111]〕をペレヤスラヴリから追放した[197]。

そして，〔フセヴォロド [D111] は〕再びノヴゴロドへ戻って来た。〔ノヴゴロドの〕人々の間に大いなる騒動が起こった[198]。プスコフ人 (плесковици) とラドガ人 (ладожанѣ) がノヴゴロ

193）この十字架接吻による誓いは，1125 年に「ノヴゴロド人がフセヴォロドを公座に据えた」ときに，フセヴォロドがノヴゴロド人と終身在位等の約定 (ряд) を結び，その遵守を誓約したものだろう（上注 148 参照）。この記述から，1132 年のこのフセヴォロドの公座移転（退去）は，ノヴゴロド人にとって不本意なものであったと推察される。なお，*Твр*6640(1132) 年記事では，「ヤロポルクの命令」の後に，«и посади его вь Переяславли, посылаль бо по него»（かれ〔フセヴォロド〕をペレヤスラヴリ〔の公座に〕据えた，〔ヤロポルクは〕かれ〔フセヴォロド〕を呼び寄せる使者を遣ったのだった）という説明的な補筆がなされている。

194）ユーリイ [D17] は，当時，ロストフ＝スーズダリの公座に就いていた。

195）アンドレイ [D18] は「善良公」(Добрый) のあだ名があり，当時は，ヴラジミル＝ヴォルィンスキイの公座に就いていた。ムスチスラフ [D11] とヤロポルク [D15] に比べれば，ユーリイ [D17] とアンドレイ [D18] は，ウラジーミル・モノマフの息子のうち「年少諸公」に当たっており，一族の中の地位は大きく異なっていた。

196）このウラジーミル・モノマフの年少の二人の息子たちの，キエフ公位継承をめぐる不満の言葉は，年長の息子たち（ムスチスラフ [D11] とヤロポルク [D15]）の間で公座引き渡しの約束がなされている（上注 35 参照）ことに対する，モノマフの一族としての強い異議申し立てである。これは，年長兄の息子（甥）と年少の弟たち（叔父）との間の公位継承争いという，いわゆる「長幼序列制」(старшинство) において不可避的に発生する親族間の抗争の一つの例と見ることもできる。

197）フセヴォロドがヤロスラヴリから追放されたことについては，この説明で終わり，記述はノヴゴロドの事態へと移るが，キエフの年代記は，ペレヤスラヴリを巡る抗争をさらに語っている。*Лвр*6640(1132) 年記事によれば，「〔フセヴォロド〕は早課 (заутрья) のときから〔ペレヤスラヴリの公座〕に座したが，聖餐式の前に，ユーリイ [D17] がかれを追放した。〔ユーリイは〕部隊とともにかれ〔フセヴォロド]〕を討つためにやって来た。ユーリイは 8 日間〔ペレヤスラヴリの公座に〕座したが，ヤロポルク [D15] が，十字架の誓いを守って，かれ〔ユーリイ〕を退去させた」[ПСРЛ Т. 1，1997: Стб. 301] とある。つまり，ユーリイはスーズダリから，アンドレイはヴラジミル＝ヴォルィンスキイから駆け付け，武力による威嚇によってペレヤスラヴリの公座に就いたばかりのフセヴォロド [D111] を追い出したが，8 日後には，兄のキエフ公ヤロポルク [D15] の武力による脅しによって，自らもスーズダリへ引き返えさざるを得なかったことになる。結局ペレヤスラヴリの公座には，フセヴォロドの弟イジャスラフ [D112:I] が就くこととなった。

198）フセヴォロド [D111] の帰還に対して，ノヴゴロド人の間に大いなる「騒動」(*Сн, Км* въстань; *Ак* мятение; *Бр* смятение) が起こった原因の説明がないが，諸説のとおり，ノヴゴロド公終身在位の誓いをいったん破ったフセヴォロドが，再び公座に就こうとしていることに対する危惧や不満の現れと見てよいだろう。

ドへやって来た[199]。かれらはフセヴォロド公 [D111] を城市〔ノヴゴロド〕から追放した。そしてあらためてかれらは評議すると[200]，ウスチイ[201]で (Устьяхъ) かれ〔フセヴォロド〕を再び連れ戻した[202]。

また，ミロスラフ[203] (Мирослав) にプスコフの市長官職を与えた。また，ラグーイル[204] (Рагуил) にラドガの〔市長官職を〕与えた[205]。

199）「プスコフ人とラドガ人がノヴゴロドへやって来た」理由については，文脈から見て，フセヴォロド排除を志向する「騒動」に加わるためと考えられる。ノヴゴロドの地の防衛および徴税・徴兵の権限と責任をもつ公の選定は，二つの付属都市 (пригород) にとっても重大な関心事であり，フセヴォロド追放ののちに招聘する公を，みずから選ぼうとしたのかもしれない。

200）「評議する」(сдумавше) とは，いわゆる民会 (вече) を開いて，次の公の招聘について意見をまとめたということ。

201）「ウスチイ」(Устьи) については，「河口」(устье) を意味する普通名詞から派生していることから，地点同定が難しい。*H1*6824(1316) 記事に記されている地名「ウスチヤニ」(Устьяны) はロヴァチ川 (Ловать) 支流のポーラ川 (Пола) 河口にある停泊地と推定されるが（[Насонов 1951: С. 80-81] の間の地図 Новгородская земля. Основная часть を参照），表記の違いだけで，これと同じ場所である可能性が高い。その場合，フセヴォロドが再々度キエフへ向かおうと船で南下して，イルメニ湖を渡ったことになる。ノヴゴロドから 55km ほど離れており，急げば追いつくことができる距離か。

202）おそらくノヴゴロド人，プスコフ人，ラドガ人による民会の評議で，次にノヴゴロド公になるべき候補者が見つからなかったのだろう。そのため，フセヴォロドを追放したことを拙速と判断して，追放されてキエフへ向かう途上（まだロヴァチ川に入ったばかりだった：上注 200）のフセヴォロドに使者を派遣して呼び戻したのではないか。ノヴゴロドにとって長期の公の空位は，政治的にも経済的にもリスクが大きかったはずである。

203）これは，1126 年記事でノヴゴロド市長官に任じられたミロスラフ・ギュリャティニチ (Мирослав Гюрятинич) のこと（上注 151）で，ノヴゴロドの有力貴族だった。1128 年にザヴィド・ドミトロヴィチが市長官になったとき，かれは市長官職から離れている。かつて，ノヴゴロド市長官だったこの人物が，付属都市のプスコフ市長官に任じられたのだから，とりわけ重要な任務を負って赴任したはずである。

204）ラグーイル (Рагуил) について他の史料には言及はないが，文脈からノヴゴロドの貴族であることは間違いないだろう。

205）この，プスコフとラドガの市長官職にノヴゴロドの有力貴族を任命したという記事は，この年のノヴゴロドにおける「騒動」にプスコフ人とラドガ人が参加したという事態（上注 198）と関係があるに違いない。この市長官任命は公（フセヴォロド）によってではなく，ノヴゴロド貴族たちによってなされたものであり（動詞 даша〔与えた〕はアオリスト複数形），市長官たちは，ノヴゴロド貴族たちの利益を代表して，これら付属都市を監督するのが主な任務だったはずである。その意味では，先のプスコフ人とラドガ人たちの放恣な振舞いを受けて，二つの都市民の行動を監視し，場合によっては鎮圧するためにこの任命が行われたと考えるべきだろう。

6641(1133) 年。

太陽にしるしがあった。晩課の前だった[206]。

同じ年，ヴォルホフ川 (Волхово) にかかる橋を架け替えた[207]。〔橋を〕取り壊したのである。

そして市場区[208] (Торговище) に，木造の二つの教会が丸太で建てられた。それは，聖なる聖母〔教会〕[209] (святая Богородица) と聖ゲオルギイ[210]〔教会〕(святыи Георгии) だった。フセヴォロド公 [D111] の時だった[211]。

同じ年の冬，フセヴォロド [D111] は，ノヴゴロド人とともに，チューヂ人を攻める遠征を行った。そして，ユーリエフ (Гюргевъ) 城砦[212] を占領した。聖ニキーフォル (святыи Микифор) の

206）「太陽のしるし」(знамение въ солнци) の日付が記されていないが，6641(1133) 年の記事にあることから，1133 年 8 月 2 日の皆既日食を指していることが分かる［日月食等データベース］。この日食は，現在のノヴゴロド時間にすると（GMT+3 時間），最大食分が 14:42 で，前後 1 時間ほど食が観察された。当時の日没は 21:14 ほどであり，晩課は 18 時くらいから始まったと考えられ，確かに「晩課の前」(пред вечернею) の時間帯になる。

207）これは，ヴォルホフ川に架けられていた大橋 (Великий мост) のこと。

208）「市場区」(Торговище) は地名で，商業地区 (Торговая сторона) の大橋 (Великий мост) 詰めから 300m 四方ほどの空間を指し，もっとも古くから市場（いちば）があり，取引の中心地だったところ。

209）「聖なる聖母」(святая Богородица) の木造教会は，まもなく石造りに建て直され，*H1* 記事によれば，1135 年に定礎され，1144 年に完成しており，これがのちに「聖母就寝教会」(Церковь Успения Пресвятой Богородицы на Торгу)（現在の大モスクワ通り (ул. Большая Московская に現存）と呼ばれるようになることから，聖母就寝 (Успение) の祝祭に献堂された教会だったことがわかる。

210）「聖ゲオルギイ」(святыи Георгии) に献堂された教会は，その後何度も火災で燃え，そのたびに木造で立て直されたが，1356 年に石造りに改築されている。現在のイリイナ通り (Ильина ул.) に現存している。この教会はユーリイ修道院（上注 129）と同じ守護聖人に献堂されており，建設にはフセヴォロド公の関与が想定される。

211）「フセヴォロド公の時」(при князи Всеволодѣ) とあることから，この二つの教会を献堂したのは，フセヴォロド公 [D111] 自身だった可能性が高い（前注も参照）。

212）「ユーリエフ城砦」(город Гюргевъ) は，現在のエストニアのタルトゥー市 Tartu に相当し，*ПВЛ*1030 年記事にヤロスラフ [13] が対チューヂ人遠征を行い，征服地に自分の守護聖人名をつけた城砦を建てたとある［ノヴゴロド第一年代記 (3)：注 374］。その後，1060 年記事によれば，この頃はまだルーシから派遣された徴税人 (данники) の拠点となっていたようだが，まもなく現地のチューヂ人によって占領されたのだろう。1134 年 2 月のこの遠征は，城砦を取り戻して再占領し，エストニア地方のチューヂ人からの徴税体制を再構築するために企図され，成功したものと思われる。

祝祭日 2 月 9 日のことだった[213]。

6642(1134) 年。

ノヴゴロド人はスーズダリと戦争について話し始めた[214]。そして自分の家臣を殺した。かれを橋から投げ落したのである[215]。五旬節の土曜日[216] だった。

同じ年, 商業地区の側 (Торговыи полъ) が焼けた。プロトニツキイ小川から丘の端まで[217]〔焼

213）ニキーフォル（*Сн*, Бр Никифор, *Км* Микифор）はアンティオキアの殉教聖人ニケフォロス (Νικηφόρος)(† 257 年頃) のことで祝祭日は 2 月 9 日 [Лосева 2001: С. 266]。この年代記記事は, 1116 年のムスチスラフの「熊の頭」(Медвежья Голова) への対チューヂ人遠征記事（上注 108）と同じ書き方であり，2 月 9 日（1134 年）も同様に，遠征からの無事帰還を祝った日付の可能性が高く，聖堂の献堂もあり得る。*H1*6705(1197) 年記事に,「大主教マントゥーリイが中州に聖ニキーフォル教会を建てた」(постави архиепископ новгородчкыи Мантурии владыка церковь на островѣ, святого Никифора.) とあるが，時間が経ちすぎているとはいえ，この遠征になんらかの関わりがあるのではないか。

214）「スーズダリとの戦争について」(о сужальстѣи воинѣ) は，本年代記ではここで唐突に言及されるが，*Лвр*, *Ип* の記事と以下の進展を総合すると，次のような事態が背景にあった。ペレヤスラヴリの公座から追放されたフセヴォロド [D111] は，最終的にノヴゴロドの公座に受け入れられたが（上注 148), ペレヤスラヴリの公座の主はその後, ユーリイ [D17] からイジャスラフ [D112:I] と変わり, イジャスラフ（フセヴォロドの弟）もまた, キエフ公ヤロポルク [D15] の命令で, 叔父のヴャチェスラフ [D16] にペレヤスラヴリの公座を譲らざるを得なかった。イジャスラフはノヴゴロド，スモレンスク地方を巡行してキエフのための貢税を集めていたが，その間に，今度はユーリイがペレヤスラヴリを占領してしまう（1134 年）。危機を感じたイジャスラフは, 兄のノヴゴロド公フセヴォロド [D111] に助けを求めた。その結果, ユーリイの本拠地であるスーズダリへ遠征（戦争）を仕掛けて, スーズダリからユーリイ [D17] を追い出し，イジャスラフをその公座に就けることを，フセヴォロドが計画するに至ったのである。このとき，ユーリイはロストフ＝スーズダリにはいなかったと考えられる。

215）当時の市長官ペトリロ（上注 182）は，フセヴォロド公のスーズダリ遠征の計画を支持したが，ノヴゴロドの貴族の一部は，公のために自らが市民軍して遠征に参加することに反対したのだろう。そして，その抗争が，反対派の殺害をともなう実力行使にまで発展したということではないか。

ここでは，市長官の配下だった者が，遠征方針に異を唱えたため，市長官の手で殺された場合を想定して「自分の家臣は」(муж свои) と訳したが，殺されたのは，反対派の貴族の可能性もある（その場合の訳語は「自分たちの貴族は」となる）。

ソフィア地区と商業地区を結ぶ大橋 (Великий мост) の上から「人を投げ落とす」([с]вергоша с моста) のは，その人の罪を判定する一種の「神判」であり［草加　2007：222 頁，注 31］（下注 349), 自分たちの主張の正しさを市民にアピールする場だった（ほとんどの場合は溺れて死ぬことから）。以下の事態の進展から見て，この紛争は，市長官派（遠征支持派）が主導権を握ったようである。

216）「五旬節の土曜日」(в суботу пянтикосьную) は，現代ロシア語ならば，суббота по пятидесятнице となる。つまり, 五旬節（日曜日）が過ぎて最初の土曜日のこと。1134 年の場合には, 6 月 9 日に相当する。

217）「プロトニツキイ小川から丘まで」(от ручья Плотничкаго до конец Холма) の小川 (ручье) は，1105 年の火災記事（上注 51）にあった「フョードル小川」のことを指している。「丘」(Холм) はスラヴェンスキイ区 (Славенский конец) の南東部分を指し，かつて村落があった小高い土地の通称である [Рыдзевская 1922: С. 110]。

けた〕。以前にも焼けたことがあった[218]。10 堂の尊い教会堂が，8 月 4 日に焼け落ちた。

同じ年，フセヴォロド [D111] はノヴゴロド人とともに遠征した。自分の兄弟[219]〔イジャスラフ [D112:I]〕をスーズダリ〔の公座〕に据えようとしたのである[220]。そして〔フセヴォロドとノヴゴロド人は〕ドゥーブナ川で (на Дубнѣ) 引き返した[221]。そして，〔かれらは〕〔遠征の〕途上でペトリロ (Петрило) から市長官職を取り上げて，イヴァンコ・パーヴロヴィチ (Иванко Павлович) に与えた[222]。

218）この以前とは，1105 年の火災を指しており（上注 51），今回もスラヴェンスキイ区の半分以上が被災したと考えられる。

219）「自分の兄弟」(брата своего) とはイジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] を指しているが，本記事では，かれの名を名指すことをせず，またイジャスラフがこの遠征に参加していたこと（次注）にも言及していない。これはおそらく，この記事の記者のイジャスラフに対する反感によるものではないか。

220）上注 213 を参照。この遠征にイジャスラフ [D112:I] 自身も参加していたことについては，*Лвр*6643(1135) 年の並行記事に「フセヴォロド・ムスチスラヴィチ [D111] とイジャスラフ [D112:I] は，ロストフを攻めるべく進軍した。〔しかし〕ノヴゴロド人はヴォルガ川で帰郷してしまった。そして，フセヴォロド [D111] は再びノヴゴロドへ戻った」(и иде Мстиславичь Всеволодъ. и Изяславъ на Ростовъ. и на Волзѣ воротишася Новгородьци. и иде Всеволодъ опять Новугороду.) とあることから分かる。

221）ドゥーブナ川 (Дубна) はトヴェーリから 75km ほどヴォルガ川を下った右岸支流で，その河口には，現在モスクワ州ドゥーブナ市 (Дубна) がある。ノヴゴロドからドゥーブナ川河口までだと北東へ 400km ほどの距離があり，スーズダリに到達するにはそこからさらに東へ 200km ほど進まなければならない。フセヴォロド [D111] の遠征軍はほぼ 2/3 行程まで進んだところで引き返したことになる。なお，ここには「引き返した」(воротишася... опять) 理由は書かれていないが，ノヴゴロド市民軍の内紛によって，遠征継続が不可能になったのではないか（次注参照）。

222）ペトリロ (Петрило) は 1130 年（もしくは 1131 年 1 ～ 2 月）に市長官に選出されており（上注 182），遠征では，市長官の立場でノヴゴロド市民軍の指揮を執っていたに違いない。遠征の途上で市長官が交代し，遠征軍が引き返すという異常な事態が起こったのは，市民軍の内部で紛争が起こり，その結果遠征継続に反対するグループが実権を握って，遠征が不可能になったということだろう。イヴァンコ・パーヴロヴィチ (Иванко Павлович) はそのグループの指導者であり，実権の交代は，市長官職の交代というかたちで実現したと思われる。

なお，イヴァンコは，およそ半年後の 1135 年 1 月の対スーズダリ遠征にも市長官として参加しており，その時に，ジダニャ丘の戦いで戦死している（下注 232 参照）。

他方，イジャスラフ [D112:I] はキエフへ行った[223]。そして，すべてのルーシの地が相反目した[224]。

同じ年，海を越えたデンマーク (Дони) で，ノヴゴロド人は財産を没収[225] された[226]。

そして典院イサイヤ[227] (Исаия игуменъ) は使者としてキエフへ行った。そして〔かれは〕府

223）この 1134 年夏の遠征中断後のイジャスラフ [D112:I] の去就については，*Лвр*6643(1135) 年の本遠征についての記事に，「他方，イジャスラフ [D112:I] はヴォロク〔・ラムスク〕にとどまっていた。そして，〔1134 年の〕秋，ヤロポルク [D15] が兄弟たちとともにチェルニゴフへの遠征をしているのを見て，〔イジャスラフも〕そこ〔チェルニゴフ〕へと向かった」(а Изяславъ оста на Волоцѣ . на ту же осень увѣдавъ оже идеть Ярополкъ съ братьею к Чернигову. и иде тамо же)[ПСРЛ Т. 1: Стб. 303] とある。本記事のように「キエフへ」向かったのではなく，「チェルニゴフへ」行ったというのが史実に対応しているだろう。この H1 記事の文脈では，イジャスラフは叔父ヤロポルク [D15] の対チェルニゴフ遠征に加わるために行ったという解釈が妥当に見えるが，そうではなかったようである。また，*Ип*6643(1135) 年記事によれば，イジャスラフは 1134 年 11 月～ 12 月には，チェルニゴフ公フセヴォロド [C41] とポロヴェツ人の連合軍に加わり，ペレヤスラヴリ地方（ユーリイ [D17] の占領下にあった）を攻撃している。つまり，イジャスラフ [D112:I] は，何らかの理由で，一時的にチェルニゴフ（オレーグ一族）勢の側に転向したことが分かる。

224）「すべてのルーシの地が相反目した」(разддрася вся земля руская) とは，ルーシの地の主要都市である，キエフ（ヤロポルク [D15]），ペレヤスラヴリ（ユーリイ [D17]），チェルニゴフ（フセヴォロド・オリゴヴィチ [C41]）に座している諸公が，互いに敵対して紛争になっていたということ。*Ип*6643(1135) 年記事にも，1134 年 11 月～ 12 月の事態について「かれら〔ヤロポルク [D15] 陣営〕はオレーグの息子たちを攻撃した。こうして，そこにおいて双方のあいだには諍いが，おおいなる悪が起こった」と書かれている [ПСРЛ Т. 2 Стб. 297]。

225）「財産を没収された」は *H1-C* (*Сн*) рубоша; *H1-M* (*Км, Тл, Бр*) と異読がある。*Сн* の рубоша は動詞 рути のアオリスト三人称複数形で，古いノヴゴロド文献では「財産の差し押さえ，没収」「身柄の拘留」の意味で用いられた。*H1-M* 諸写本の読みは，рути の意味を捕らえ損ねて，рубити に誤読した結果である。

226）デンマーク (Дони) については，6638(1130) 年記事でも言及があり（上注 176），ノヴゴロドと商取引が盛んだった地域である。ここでは，デンマークへ出かけたノヴゴロド商人 (гости) がこうむった災難についてのものだが，その背景は不明である。

227）この「典院イサイヤ」はユーリイ修道院の院長を指している。かれは，1128 年に典院キリアクが死去したのち（上注 160），かれを継いで典院の職に就いていた。ユーリイ修道院の開基にはフセヴォロド公 [D111] 自身もかかわっており（上注 130），その典院は教会世界におけるノヴゴロド公の代理人のようなものだった。

主教ミハイル[228] (митрополит Михаил) とともに，12 月 9 日にノヴゴロドへ戻った[229]。

同じ年の冬，フセヴォロド [D111] はスーズダリへ戦争のために進軍した[230]。そして，ノヴゴロドの全領地も[231]〔進軍した〕。12 月 31 日のことだった。悪しき日々になった。酷寒と雪嵐が，すさまじく恐ろしかった。

そしてジダニャの丘[232](Жданя гора) で戦いがあった。多くの悪しきことが起こった。ノヴゴロド市長官イヴァンコ[233](Иванко) が殺された。かれは非常に勇敢な男だった。1 月 26 日だった。そして，ペトリロ・ミクーリニチ[234] (Петрило Микулиниц) も，そして多くの身分の高い人士たち[235] も〔殺された〕。スーズダリ人はもっと多く〔殺された〕。和議が結ばれ，〔遠征軍はノヴ

228）府主教ミハイル (Михаил) はギリシア人で，1130 年にキエフに赴任し，同年にノヴゴロド主教ニフォントに叙任式を施している（上注 180）。

229）典院イサイヤは「使者として」（ここは *Сн* съломъ; *Км, Тл, Бр* с посломъ の異読があるが，前者が本来の読み）キエフに行ったが，派遣したのは，その緊密な関係から（上注 226）見て，明らかにフセヴォロド [D111] である。そしてその任務は，事態の展開から見て，キエフの教会を通じて，ノヴゴロドの大主教（ニフォント）とノヴゴロド市長官（イヴァンコ・パーヴロヴィチ）に圧力をかけるために府主教を呼び寄せ，フセヴォロド [D111] による対スーズダリ遠征を成功させることにあっただろう。イサイヤは，府主教ミハイルを伴って，1134 年 12 月 9 日にノヴゴロドに到着している。

230）「スーズダリへ戦争のために進軍した」(иде... на Суздаль ратью) とあるが，この遠征の目的は何だったのか？　少なくとも，1134 年夏の時のような「イジャスラフをスーズダリの公座に据えるため」（上注 219）ではもはやないことは確かである。当時イジャスラフはノヴゴロドを去って，チェルニゴフ公フセヴォロド [C41] と同盟していたのだから。遠征はフセヴォロド [D111] の強い主導によって組織されたと考えられ，スーズダリ公ユーリイが不在のときを狙って（当時，ユーリイはペレヤスラヴリの所領に力を注いでおり，チェルニゴフ公フセヴォロド [D41] と対立していた），自らがロストフ＝スーズダリの公座を狙ったか，大規模なスーズダリ領地の掠奪を目的としていたのではないか。

231）1134 年夏のスーズダリ遠征（上注 220）が「ノヴゴロド人とともに (с новгородци)」（すなわちノヴゴロド城市の市民軍を率いて）であったのに対して，今回の 1134 年 12 月～ 1135 年 1 月の遠征には「ノヴゴロドの全領地」(вся новгородчкая область) が参加しており，ノヴゴロドの地の全域から軍兵を集めたことがわかり，明らかに軍勢の規模は大きくなっている。

232）「ジダニャ丘」(Жданя гора) は，現在のヤロスラフ州南のペレヤスラフ地区 (Переславский район) にあるジダナヤ丘 (Жданая гора) に相当している。先の遠征で引き返したドゥーブナ川河口からさらに 80km ほど東へ進んだところで，この丘からさらに東南東へ 120km ほど行けばスーズダリへ到達する。ロストフ＝スーズダリ人はこの「ジダニャ丘」まで防衛の軍勢を進めて，待ち受けていたことになる。

233）市長官イヴァンコ・パーヴロヴィチについては，上注 221 を参照。

234）ペトリロ（上注 182）は，1134 年夏の対スーズダリ遠征の時に市長官だったが，これが中断したときに市長官の職をイヴァンコに譲っている（上注 221）。このおよそ半年後の再度のスーズダリ遠征では，軍司令官として参加したのだろう。

235）「多くの身分の高い人士たち」(много добрых мужь) とは，遠征に参加したノヴゴロド貴族たちのことを指している。

ゴロドに〕帰還した[236]。

そして府主教〔ミハイル〕を〔解放して〕キエフへと行かせた[237]。2 月 10 日, 肉断ちの主日だった[238]。〔フセヴォロド [D111] とノヴゴロド人が〕スーズダリへ遠征したときには, かれ〔ミハイルをキエフへ〕行かせなかったのである。なぜなら，かれ〔ミハイル〕はかれら〔ノヴゴロド人たちに〕こう言っていたのだから。「あなたがたは〔遠征に〕行ってはならない。神がわたしのことを聞いてくれるのだ[239]」。

そして，〔ノヴゴロド人たちはノヴゴロドに〕帰還すると，ミロスラフ・ギュリャティニチ (Мирослав Гюрятиничь) に市長官職を与えた[240]。

236）この，1135 年 1 月のフセヴォロド [D111] による対スーズダリ遠征とジダニャ丘の戦いの結果については，本記事では，「スーズダリ人がより多く」戦死して，ノヴゴロド側が優勢だったように書かれているが，*Ип*6645(1137) 年記事（実際は 1135 年の出来事）では「ノヴゴロド人はスーズダリ人とジダニャ (Жданя) 丘で戦った。スーズダリ人はノヴゴロド人に打ち勝った」(в се же лѣто бишася Новъгородъчи. съ Суждальчи И на Жданѣ горѣ. и одолѣша Суждалци Новгородцем) と，はっきりとスーズダリ側が勝ったとされている。さらに，*Лвр*6644(1136) 年記事では，同様の戦いの記述のあとに「ロストフ人がノヴゴロド人に勝利した。かれら〔ノヴゴロド人〕を多数打ち負かし，ロストフ人は大いなる勝利とともに帰還した」(и побѣдиша Ростовци . Новгородцѣ. и побиша множество ихъ . и воротишася Ростовци с побѣдою великою) とある。フセヴォロド [D111] が遠征の目的を果たせずに帰還したことから見ても，実際はノヴゴロド側が非勢であり，結ばれた講和 (сотворше мир) も，スーズダリにとって有利な内容だったと考えるべきだろう。

237）「府主教をキエフへ行かせた」(пустиша митрополита Кыеву) の言い回しと，以下の記述から，府主教ミハイルは，フセヴォロド公 [D111] とノヴゴロド人（貴族）に対して，スーズダリへの遠征を思いとどまるよう強く主張したために，かれらが遠征しているあいだは，ノヴゴロドからキエフに帰ることを禁止され，軟禁されていたことが分かる。府主教がキエフに戻れば，キエフ公ヤロポルク [D15] を通じて，ユーリイ公 [D17] の早期のスーズダリへの帰郷を促すだろうことを，フセヴォロド [D111] は恐れたと思われる。1135 年 2 月初めに，遠征軍が目的を果たせず帰還した後に，もはや足止めの必要がなくなったことから，ミハイルは解放されて，キエフへ戻ることができたのである。

238）1135 年の大斎は 2 月 18 日から始まり，その一週間前の主日（日曜日）は肉断ちの週の最後の主日 (мясопустная неделя) と呼ばれ，確かに 2 月 10 日に相当する。

239）この「神がわたしの言うことを聞いてくれる」は『ヨハネによる福音書』9:31 の言い回しを踏まえており，ここでは「自分の言うことが神の意志である」という意味。

240）1135 年 2 月のことである。ミロスラフについては上注 151 を参照。1132 年にプスコフの市長官に転じていた（上注 202）が，このときノヴゴロドに戻ったらしい。有力貴族たちが戦死したために，古参の貴族に市長官職を委ねたということか。

6643(1135) 年。

市長官ミロスラフ (Мирослав) は，キエフ人とチェルニゴフ人を和解させるために[241] ノヴゴロドから行き，そして何も得ることなく戻って来た。なぜなら，すべてのルーシの地 (вся земля Русская) が大いに荒れていた[242] からである。

ヤロポルク [D15], は自分のもとにノヴゴロド人を〔軍兵として〕呼び集めた[243]。一方, チェルニゴフの公[244]〔フセヴォロド [C41]〕は自分のもとに〔チェルニゴフ人を呼び集めていた〕。そして〔キエフ公とチェルニゴフ公は〕戦った[245]。そして神は〔フセヴォロド・〕オリゴヴィチ [C41] とチェルニゴフ人を助けた。〔フセヴォロド [C41] は〕多数のキエフ人を斬り殺し, 一方, 他の者を生け捕りにした。**8 月だった**[246]。

だがこれは〔まだ〕悪しきことではなかった。以前よりもはるかに多く〔二つの勢力が〕軍

241）「キエフ人とチェルニゴフ人を和解させるため」(мирить киянъ с чергиговци) というのは，実際には，キエフ公ヤロポルク [D15] が，チェルニゴフ公フセヴォロド [C41] との戦いのために，ノヴゴロド人を軍兵として徴集するのを阻止することが目的であり，その請願のためだったと考えられる。かれはキエフのヤロポルク [D15] のもとへ行ったのだろう。

242）「荒れていた」と訳した原語には異読がある。C възмялася, *Км* възмутилася, *Тл*, *Бр* взмяклася. 不定形は，それぞれ возмястися, возмутитися, взмякнутися(?) が想定されるが，「混乱する」「騒動が起こる」という基本的な意味はかわらない。

243）市長官ミロスラフのキエフ訪問と請願（上注 240）にもかかわらず，ノヴゴロド人は，キエフとチェルニゴフとの抗争に，キエフ側の部隊として徴集されている。キエフ公がノヴゴロド人を徴集（зваше к себѣ）したとあるが，フセヴォロド [D111] がノヴゴロド人軍兵を率いて，キエフの遠征部隊に合流したのである（下注 269 も参照）。

244）「チェルニゴフの公」(черниговьскыи князь) は *Сн* の読みで，*H1-M(Км, Тл, Бр)* には князь（公）の語はない。文脈から判断して，前者が本来の読みで，*H1-M* の編集段階で князь の削除（もしくは脱落）があったのだろう。当時のチェルニゴフ公は，フセヴォロド・オリゴヴィチ [C41] だった。

245）このキエフ公ヤロポルク [D15] とチェルニゴフ公フセヴォロド [C41] の「戦い」(бишася) とは，*Ип*6644(1136) 年記事によれば，1135 年 7 月頃にチェルニゴフ公フセヴォロド [C41] がペレヤスラヴリへ進軍し，キエフ公ヤロポルク [D15]，ヴャチェスラフ [D16]，ユーリイ [D17]，アンドレイ [D18] のモノマフ一族諸公の連合軍に損害を与え，8 月 8 日にキエフに敗走したヤロポルクに対して，フセヴォロド [C41] がキエフの付属都市ヴィシェゴロドを包囲した事態を指している [ПСРЛ Т. 2: Стб. 298-299]。

246）「8 月だった」(мѣсяца августа) の句は *H1-C* にはなく，*H1-M* 諸写本，*Твр, H4* の対応記事にある。この句は，後代の *H1-M* 編者の挿入によるものだろう。「8 月」という月名は，上注 244 の *Ип*6644(1136) 年記事から採ったのではないか。

兵を増やし始めたのである。それは，ポロヴェツ人とすべて**のルーシ人**だった[247]。

同じ年，フセヴォロド [D111] は，大主教ニフォント (Нифонт) とともに，ノヴゴロドの市場区 (Торговище) に，石造りの聖母教会を定礎した[248]。

同じ年，ロジネト[249] (Рожьнѣт) がヤコヴ通り (Яковля улица) に聖ニコーラ教会[250] (церковь святого Николы) を定礎した。

同じ年の冬[251], 大主教ニフォント (Нифонт) が最も身分の高い人士たち[252] とともにルーシへ行き，キエフ人に遭遇した。これに対立して，立って〔包囲して〕いるチェルニゴフ人，そし

247）「軍兵を増やし始めた」(почяса копити вои) の述語動詞が双数アオリスト形になっていることから，主語は並列する二つのものになるはずである。その主語には異読があり，*Сн* и половче, и всѣ; *Ак* и половче, и все となっており，さらに *Км* では и половци, и вся Русь となっている。このうち *Сн* と *Ак* の読みが本来と思われるが，всѣ (все) の代名詞（複数主格形）がなにを指しているのか示されていない。文脈から見て，おそらく，当時ポロヴェツ人 (половче) と対立していた勢力全体であり，少し前に вся земля Русская の表現があることから，これを指すと解釈するのが妥当だろう。*Км* の вся русь は *Км* 編者による解釈的改変だが，やはりこの解釈に拠って直したのではないか。なお，ここの「ルーシ人」(русь) は，キエフ人とチェルニゴフ人を併せた意味合いを持ち，ノヴゴロド人ではないことを強く含意している。

248）この市場区の聖母教会 (церковь святыя Богородиця на Торговищи) は，1133 年に丸太で建てられた木造の聖母教会（上注 208）に相当し，この聖母就寝教会を石造りに建て直すことを意味している。その定礎にフセヴォロド公 [D111] とノヴゴロド大主教ニフォントが関与していることから，改築には何らかの重要なきっかけがあったのだろう。1135 年 2 月に帰還した，スーズダリ遠征とジダニャ丘の戦いの記念であった可能性もある。1144 年の記事でようやく「完成した」と記されている（下注 387）。

249）この人名については，*H1-C, H1-M* ともに，底本の校訂（[НПЛ С. 23, 208]）では，Ирожьнетѣ Ирожнѣт（イロジネト）となっている。しかし，2000 年の『年代記全集』版の人名索引（[ПСРЛ Т. 3, 2000: С. 633]）では，и Рожнетъ と読むように指示されている。そこで参照されているギッピウス (Гиппиус А. А.) 論文の白樺文書 (№ 336：12 世紀 10-30 年代) は，Рожнет という人物が名宛人になっている。ヤコヴ通り (Яковля улица) は，ソフィア地区のネレフスキイ区 (Неревский конец) にあり，白樺文書№ 336 発掘地点に隣接していることから，この Рожнет とニコーラ教会を定礎（献堂）した人物が同一である可能性が高い。Рожнет はこの場所に屋敷 (усадьба) を持っていたことから，教会を建てられる資力のある人物と考えらえる [НГБ IX, 1993: С. 181-182]。

250）この「ヤコヴ通りの聖ニコーラ教会」については，6864(1356) 年記事に木造の聖堂を再建したという記事があることから，木造だったと考えられる。ただ，定礎について書かれているくらいだから，それなりに大きな建物だったのだろう。

251）1135/36 年の冬のこと。

252）「もっとも身分の高い人士たち」(лучьшии мужи) とは，市長官やその候補になるようなノヴゴロドの有力貴族たちを指している。

て〔その〕多くの軍兵たち〔にも遭遇した〕。そして神の意志により[253]かれらは和解した[254]。

また，ミロスラフ (Мирослав) が逝去した。主教〔ニフォントが戻って来る〕前の，1 月 28 日だった[255]。

また，主教〔ニフォント〕が〔ノヴゴロドに〕戻って来た。2 月 4 日だった。

また，コンスタンチン・ミクーリニチ[256] (Костянтин Микулиниц) にノヴゴロドの[257]市長官職が与えられた。

6644(1136) 年

インディクトの 14 年[258]，ノヴゴロド人は，プスコフ人とラドガ人を召集した。そして，自分たちの公フセヴォロド [D111] を追放することについて評議した[259]。そしてかれを〔フセヴォ

253）「神の意志により和解した」(божиею волею смиришася) の言い回しには，主教ニフォントの働きを強調しようとする年代記記者の意図が反映しているだろう。

254）この事態については，*Ип*6644(1136) 年記事に詳しく述べられている [ПСРЛ Т. 2: Стб. 299-300]（ただしニフォントの来訪についての言及はない）。それによると，1135 年 12 月にチェルニゴフ公フセヴォロド [C41] がポロヴェツ人とともに，ドニエプル川右岸のキエフの付属都市（トレポリ，クラスノ，ヴァシーリイ，ベルゴロド）を攻略して，キエフに迫った。ヤロポルク [D15] はキエフの城内に立て籠り，1136 年 1 月にかれは，フセヴォロド [D41] と相手に有利な講和を結んだ。和議の十字架接吻の宣誓式には府主教ミハイルが同席したとされている。

255）ミロスラフは 1135 年 2 月に市長官職に就いてから（上注 239）一年足らずの 1136 年 1 月 28 日に亡くなっている。その短さは不自然であり，何らかの事件が想定されるが，年代記等の史料にその手掛かりはない。1136 年 5 月～ 7 月のフセヴォロド公 [D111] 監禁・追放事件の直前の時期であり，フセヴォロド反対派の主導者であったことから，フセヴォロド支持派による謀殺の可能性もある。

256）「コンスタンチン（コスチャンチン）・ミクーリニチ」(Костянтин Микулиниц) は，「市長官表」[№111-1] にあり，市長官ペトリロ（ペトリャタ）（上注 182）の兄弟と考えられる。フセヴォロド公 [D111] に近い人物で，この 1136 年 2 月から市長官職に就いたが，1137 年 3 月 7 日には，プスコフに追放されたフセヴォロド公のもとに逃げて（下注 289），身を寄せている。その後，1146-47 年にノヴゴロド市長官に再任され，1147 年に死去している。

257）「ノヴゴロドの」(Новегородѣ) の読みは *Сн* のみで，*H1-M* 諸写本にはない。*H1-M* の編集段階で，当然のこととしてこの語が削除されたと考えられる。

258）インディクト (индикт) は，ビザンツ式暦法で（上注 93），*H1-C* に индикта лѣта 14. とあるが，*H1-M* 諸写本にはない。*H1-M* 編者が削除したと考えられる。なお，インディクト暦 14 年は，1135 年 9 月 1 日～ 1136 年 8 月 31 日の期間に相当する。

259）「評議した」(сдумавша) とは，ここでは，いわゆる民会 (вече) を開いて，フセヴォロド公の追放について決定したということ。

ロドを〕, 妻と子供たちと姑[260]とともに, 主教の館[261] (епископль дворъ) に閉じ込めた。5 月 28 日だった。そして，武器をもった見張りが昼も夜も警戒した。30 人の家臣だった。

〔フセヴォロドは〕2 ケ月のあいだ閉じ込められていた。そして，〔ノヴゴロド人はフセヴォロド等を〕内城 (город) から出て行かせた[262]。7 月 15 日だった。

一方，〔ノヴゴロド人は〕かれの息子ウラジーミル [D1113] を引き取った[263]。

見よ，〔次のことをノヴゴロド人は〕かれの罪科[264]としたのだった。

260）フセヴォロドの妻 (жена) は，スヴャトスラフ･ダヴィドヴィチ（スヴャトーシャ）[C31] の娘で（上注 56），1123 年にフセヴォロドと結婚している（上注 137）。姑 (тыця, тѣща) は，夫のスヴャトスラフが 1107 年にキエフ洞窟修道院の修道士となって以降は，娘のもとで暮らしていたのだろう。また，子供たち (дети) とは，ウラジーミル [D113]（下注 262）と娘のヴェルフスラーヴァ (Верхуслава) がいたと思われる [Домбровский 2015: C. 192-209].

261）「主教の館」(епископль дворъ) は内城 (Детинец) の北東部，ソフィア聖堂の北東側に隣接してあった。場所は現存している（[Великий Новгород. Энциклопедический словарь: C. 254-255; Кремль]）。

262）「内城から出ていかせた」(пустиша из города) の「内城」はノヴゴロドの内城 (Кремль, Детинец) のことだろう。*Ин*6646(1138) 記事によれば，このあとまもなく，フセヴォロド [D111] は，「キエフの自分の父方の叔父ヤロポルク [D15] のところに来た。叔父はかれにヴィシェゴロドを与えた」(а Всеволодъ Мьстиславичь. и приде Кыеву. къ строеви своему Ярополку. и вдасть ему стрыи Вышегородъ) とあり家族とともに（息子ウラジーミル [D1113] は残して〔下注 262〕）キエフ（ヴィシェゴロド）へと向かったことが分かる。フセヴォロドに与えらえたヴィシェゴロドはキエフの付属都市であり，ヤロポルクもフセヴォロド自身も一時的な滞在のつもりだったのだろう。*Лвр*6646(1138) 年の対応記事に，フセヴォロド [D111] はヴィシェゴロドに「一年間座した」(и ту сѣдѣ лѣто одно) とあることから [ПСРЛ Т. 1，1997: Стб. 305]，1136 年 8 月頃～ 1137 年 8 月頃の間，かれはヴィシェゴロドの公座に就いていたことになる。

263）フセヴォロド [D111] の息子ウラジーミル [D1113] についての史料における言及はこの箇所のみ。生年は不明で，可能性としては 1125 年から 1134 年の間と幅があるが [Домбровский 2015: C. 209-213]，その場合でも，当時の年齢は 2 歳～ 11 歳でまったくの子供だった。かれを「引き取った」(прияша) というのは，手元に留置したということで，フセヴォロド [D111] のノヴゴロドからの退去を保証させるためにかれの子供を人質 (талия) にとったと解釈できるだろう。スヴャトスラフ･オリゴヴィチ [C43] が，1136 年 7 月 19 日に〔ノヴゴロド公として〕到来していることから，ウラジーミル [D1113] が留置されたのは 7 月 16 日～ 18 日の 3 日間だけで，その後解放されて，父母とともにノヴゴロドを去ったと考えられる。

264）ここで「かれの罪科」(вины его) と訳したのは，フセヴォロド公 [D111] をノヴゴロドから追放する理由のこと。ここで箇条書きに整理されて書かれているということは，民会 (вече)（上注 258）で決まった内容の引用なのだろう。そのことは，部分的に直接話法で書かれていることからも分かる。

１．〔フセヴォロド [D111] は〕領民 (смерд) を大事にしなかった[265]。

２．「なぜ，あなたはペレヤスラヴリ〔の公座〕に座そうとしたのか[266]」

３．「あなたは, 誰よりも先に〔遠征軍の〕部隊から〔馬で〕駆け去った。それは何度もあった」[267]。

〔４．[268]〕最初はわれらに, フセヴォロド [C41] のところに進撃せよと言って[269], 命じておきながら，あとになって撤退を命じたことがある[270]。

265）「領民を大事にしなかった」(не блюдет смерд) の「領民」(смерд) は，公の支配領地の農民で，公に対する貢税，賦役，軍役などの義務を課せられた階層のこと（［ノヴゴロド第一年代記 (4)：注 162］参照）。領民からの税収は, 公だけでなく, ノヴゴロド貴族や都市民の生活を支える主要な財政源だった。「大事にしなかった」とは，フセヴォロドの公座在位期間の，冷害による大規模な飢餓（1126 ～ 1128 年），天災・水害による民衆の被害，対チューヂ人遠征に動員される軍兵の苦しみに，かれ自身がしかるべき対策を講じなかったこと，それによって領地からの税収が減ったことを言っているのだろう。

なお，『ニーコン年代記』の対応記事 *Нкн*6643(1135) には「なぜ，遊びや慰めを好み，人々を監督しかったのか。なぜ，〔狩猟のための〕鷹や犬を集め，人々を裁き，管理することをしなかったのか」(и почто възлюби играти и утѣшатися, а людей не управляти; и почто ястребовъ и собакъ собра, а людей не судяше и не управляаше)[ПСРЛ Т. 9: С. 159] と，フセヴォロドの怠慢，行政能力のなさを強調する糾弾内容がさらに書かれている。これは後代の補筆だろう。

266）これは, 1132 年のフセヴォロドのペレヤスラヴリ行きのことを指している（上注 191）。かれはノヴゴロド人に対して終身のノヴゴロド公座在位を誓っていたため（上注 148），この行動は明らかな誓約違反として糾弾されたのである。

267）フセヴォロド糾弾の 3 番目の理由は，かれの軍の指揮官としての優柔不断さ，無能さについて言っているのだろう。かれが指揮をとって失敗した遠征は，1135 年 1 月のジダニャ丘の戦いのときの対スーズダリ遠征であり，それから 1 年数か月しか経過していない当時は，戦闘に際してのかれの無様な振舞いの記憶が新しかったに違いない。

なお，*Нкн*6643(1135) では，「なぜスーズダリ人とロストフ人を攻めようとしたのか」(почто въсхотѣ ити на Суждалци и Ростовци)[ПСРЛ Т. 9: С. 159] と，遠征の実行そのものを糾弾する内容になっている。

268）すべての写本で，糾弾の項目は 3 条に分けられており，以下の叙述も，第 3 条のフセヴォロドの優柔不断さの事例と理解することも可能である。しかし，カラムジン以来の諸研究では，その内容的な独立性から，以下を第 4 項目とすることが慣例になっているので，翻訳でもこれにならった。

269）ここに，*H1-C* では рече（と言って）の語があるが，*H1-M* 諸写本にはない。рече は直接話法を導く語であることから文脈における必然性がある。*H1-C* が本来の形で，*H1-M* では рече を削除したのだろう。

270）「われらにフセヴォロド [C41] のところに進撃せよと命じ」(велѣвъ ны ко Всеволодку приступити) たのは，前年の 1135 年に，キエフ公ヤロポルク [D15] がノヴゴロド人を呼び集め (зваше к себѣ) て，チェルニゴフ公フセヴォロド [C41] と戦ったときのことを言っているのだろう（上注 242）。年代記には記されていないが，この時，フセヴォロド [D111] はノヴゴロド人部隊を引き連れて，叔父ヤロポルク [D15] の軍に合流したはずであり，この戦いの際のフセヴォロド [D111] の指揮が不出来だったということではないか。実際，戦いはチェルニゴフ公フセヴォロド [C41] にとって有利に展開した（上注 244）。

そして，〔ノヴゴロド人は〕別の公が来るまで[271]，かれ〔フセヴォロド [D111]〕を出て行かせなかったのである。

その頃，修道院の聖なる復活教会 (церковь святого Въскресениа) が焼けた[272]。

同じ年，ノヴゴロドへ，スヴャトスラフ・オリゴヴィチ公 (князь Святославъ Олговиць)[C43] が，チェルニゴフから，兄弟のフセヴォロド [C41] のところから，やって来た[273]。7 月 19 日のことだった。8 月朔日から 14 日遡った日[274] のことで，公会議の聖女エウフィミアの祝祭日

271）「別の公が来るまで」(донелѣже инъ князь прииде/прииде) は，1136 年 7 月 19 日のスヴャトスラフ・オリゴヴィチ [C43] のノヴゴロドへの到来（下注 272, 273）を指している。

272）「聖なる復活教会」(церковь святого Въскресениа) はソフィア地区リューディン区 (Людин конец) の土塁から 100m ほど離れたミャチノ池 (озеро Мячино) のほとりにあった同名の女子修道院の主教会。1195 ～ 1196 年に石造りで再建されており，また火災で燃えていることから，この時には木造だったのだろう。記事がこの場所におかれていることから，火災は 1136 年 7 月のことと思われるが，フセヴォロド追放の事件と火災は関係ないようである。

273）スヴャトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は，オレーグ公 [C4] と原野のポロヴェツ人首長オスロク (Осулок) の娘との間に，1106/1107 年頃に生まれており，当時 30 歳ほどだった。かれは，幼少のときに，ポロヴェツ人アエパの娘と政略結婚をさせられている（かの女はこの時にはすでに死没）。そのような関係で，オレーグ息子たちの中では，スヴャトスラフは成年になっても都市に公座を与えられず不遇なままにチェルニゴフにいた。それが，この度のノヴゴロドの政変のおかげで，オレーグ一族への招聘がなされ，ノヴゴロド公として赴任することができたということだろう。

274）「8 月朔日から 14 日遡った日」(преже 14 каланда августа) とは，7 月 19 日を，ユリウス暦の起源である古代ローマの暦法で表現したもので [СлРЯ XI-XVII Вып. 7: С. 32; каланды]，おそらくは anti [diem] quartum dicimum (14) kalendas Autustias のようなラテン語の言い回しを，スラブ語に写したものだろう。「8 月の最初の日（朔日）(kalenda) から，〔8 月 1 日を含む〕14 日前の日」という意味だから，確かに 7 月 19 日に相当する。ルーシでは古代ローマ暦の表現は普及しなかったことから，この言い回しは非常に特殊なものである。

(на сборъ святыя Еуфимие) の日曜日[275], 昼の第３刻[276], 他方, 空の月の〔月齢は〕19 日目[277]だった[278]。

同じ年，インディクト 15 年になった時[279]，〔ノヴゴロド人は〕，ユーリイ・ジロスラヴィチ[280] (Юрг Жирославиць) を殺し，かれを橋から投げ落した。9 月のことだった[281]。

275）大殉教聖女エウフィミア (великомученица Ефвимия Всехвальная, Εὐφημία) は，303 年にカルケドンの闘技場で迫害によって殉教した聖人。451 年の第四回カルケドン公会議で，かの女の聖骸が正統と異端を定める奇跡を起こした故事を記念して，7 月 11 日が祝祭日になっている。ここでは，「公会議の聖女エウフィミアのあとの日曜日」(въ недѣлю на сборъ святыя Еуфимие) と記されており，ストゥディオス修道院規定書には，この祝祭日（7 月 11 日）を過ぎた直近の日曜日に祝うとある [Лосева 2001: С. 380]。1136 年 7 月 19 日は確かに日曜日であることから，このような書き方をしたのではないか（厳密には 7 月 12 日が直近だが）。前注のラテン暦による表記と併せて，7 月 19 日を何らかの祝祭日に強引に結びつけて，特別な日としようとする年代記記者（編者）の強い意図がここにはあるだろう（下注 277 参照）。

276）「昼の第 3 刻」(въ 3 час дне) は，現在のノヴゴロド時間（GMT+3 時間）でいうと，午前 8 ～ 9 時頃に相当する。この記事の記者の実見によるものだろう（下注 277 参照）。

277）「空の月の〔月齢は〕19 日目だった」(а луне небе*Сн*ѣи въ 19 день) とは，1136 年 7 月 19 日のノヴゴロドにおける月の満ち欠けは，月齢 18.2 であり，月齢 0.2（新月）である 7 月 1 日から数えると，確かに「19 日目」になる［こよみの計算長期版：月の満ち欠けカレンダー］。これは実見をもとに記したのかもしれないが，復活祭の日付を求める計算を応用して記者（編者）が月齢を割り出すことも可能である（下注 277 も参照）。

278）この，*H1-C* だけにある特殊な暦法を含む記事の記者（編者）について，ノヴゴロド人キリク (Новгородец Кирик) が書いた『暦法研究』(Учение о числах) との内容的類似性や書かれた時期（6644(1136) 年）が一致することから，シャフマトフは，キリク自身が実見をもとに記事を書き，自らの暦法の知識を使って，フセヴォロド [C43] のノヴゴロド来訪を称揚的に記録したのではないかと推定している [Шахматов 2002 (1908): С. 137-138 (Разыскания §135)]。このキリクを，この時期の記事の直接の記者とする説は，以下のかれの関与を示唆する一連の記事（上注 118，下注 374, 388, 391 を参照）からみても正しいと思われる。なお，キリクの本年代記への関与については，ギモン (Гимон Т. В.) による検討を参照（[Православная энциклопедия Т. 34: С. 169-170; Кирик]。

279）「インディクト 15 年になったとき」(наставъшю индикта 15) と本記事末尾の「9 月のことだった」(мѣсяця септября) は *H1-C* のみの読みで，*H1-M* 諸写本にはない。*H1-M* 編者の削除によるもの。実際に，1136 年 9 月 1 日からインディクト 15 年が始まっている。

280）「ユーリイ・ジロスラヴィチ」(Гюрги Жирославиць) の名の表記に異読がある。*Сн* Гюрги; *Км* Юрга; *Ак* Юрьга 。これはすべて「ゲオルギイ」(Георгий) すなわち「ユーリイ」(Юрий) の通用名である。ユーリイについての詳細は不明だが，父称とともに記されていることから貴族もしくは貴族の上級家臣であることは間違いない。スヴャトスラフ [C43] が公座に就いてから 2 ヶ月後にはすでに，スヴャトスラフ公支持派と前の公フセヴォロド支持派の貴族たちの間で大きな紛争が発生し，大橋からの投げ落とし（上注 214）が行われたということだろう。6644(1136) 年の記事が，一貫して前ノヴゴロド公フセヴォロド [D111] に対して批判的な立場から書かれていることから見て，ユーリイ・ジロスラヴィチはフセヴォロド支持派の貴族・家臣であった可能性が高い。

281）この異読については，上注 278 参照。

同じ年，12 月 5 日に聖ニコーラ教会が大いなる献堂式によって献堂された[282]。

同じ年に，ノヴゴロドにおいてスヴャトスラフ･オリゴヴィチ [C43] が結婚した[283]。〔スヴャトスラフは〕聖ニーコラ[284]〔教会〕で自らの司祭たちの手で戴冠式を行った。**主教**[285] ニフォントはかれの戴冠式を執り行わなかったのである。また，〔配下の〕司祭たち，修道士たちに結

282）聖ニコーラ（奇跡成就者聖ニコライ святой Николай Чудотворец）に献堂された聖堂の定礎については，1113 年のムスチスラフ公 [D11] によるものと（上注 85），1135 年にロジネトがヤコヴ通りに定礎したもの（上注 249）と，二つの記事があり，その二つのうちどの聖堂の献堂式が行われたのか，にわかに定めがたい。しかし，「大いなる献堂式によって」(великым сящением) と儀式が大掛かりであったこと（おそらく，主教ニフォントが主宰した）が記されていることから，これはムスチスラフ公 [D11] がヤロスラフ館の近く（市場区）に定礎した石造りの現「ヤロスラフ館のニコライ首座教会」(Николо-Дворищенский собор; Никольский собор на Ярославовом Дворище)（上注 85）のことを言っていると見るべきだろう。なお，献堂式の日付は 12 月 5 日 (въ 5 декабря) とあるが，12 月 6 日は献堂された聖人である聖ニコライの祝祭日であり，1136 年 12 月 5 日の午後から日没（正教では日没に一日が始まる）にかけて献堂式が行われたことは明らかである。

283）「スヴャトスラフ・オリゴヴィチはノヴゴロドで結婚した」(оженися Сятославъ Олговиць Новегородѣ) とあることから，結婚相手はノヴゴロド出身の女性と推察されるが，どのような女性であるか記されていない（タティーシチェフはペトリロ〔上注 180 ？〕の娘で，公の配下の者がペトリロを殺した」としているが，引用元が不確かであり信頼できない [ИГР Т. 2: Прим. 267]）。ノヴゴロド公が，現地で結婚式を行った例としては，6630(1122) 年に元ノヴゴロド公だったキエフ公ムスチスラフ [D11] が，ノヴゴロド貴族ドミトル･サヴィドヴィチの娘を娶って（婚約式を行い），キエフに連れてきており（上注 137），6631(1123) 年にはその息子フセヴォロド [D111] が，スヴャトーシャ [C31] の娘をノヴゴロドに連れてきて結婚式を行っている（上注 137）。さらに，*Ин*6663〔1155〕年記事には，キエフ公になったユーリイ手長公 [D17] は「自分の息子の〔ノヴゴロド公〕ムスチスラフ [D17A] に，ノヴゴロドで〔貴族の〕ピョートル・ミハルコヴィチの娘と結婚するよう命じ」，実際にムスチスラフは結婚している [ПСРЛ Т. 2: Стб. 482]。これらの例から見て，スヴャトスラフ [C43] の場合も，ノヴゴロドの貴族たちの支持を得るために，誰か有力貴族の娘と結婚したとするのが，もっともあり得るだろう。

なお，このスヴャトスラフ公の結婚は，1136 年 12 月～ 1137 年 2 月の期間に行われている。

284）この「聖ニコーラ」(у святого Николы) については，文脈から見ると直前記事にある現「ヤロスラフ館のニコライ首座教会」（前注）を指しているように読めるが，どうやらスヴャトスラフが居住する城塞区（ゴロディシチェ）にあった（あるいは急ぎ建築した）「ニコライ教会」のことを言っているようである [Гиппиус 2004: С. 172, Прим. 5]。12 世紀にノヴゴロドの公座に就いたノヴゴロド公には，かれらの居住地である城塞区（ゴロディシチェ）に，守護聖人としてのニコライに献じた木造の聖堂を持つ慣習があったようであり，6673(1165) 年にはスヴャトスラフ・ロスチスラヴィチ公 [J4] が，城塞区（ゴロディシチェ）におそらく木造のニコーラ教会を建てており，6699(1191) 年にも，ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1153] が同じ場所に丸太を伐り出してニコーラ教会を建てている。1136 年のスヴャトスラフ [C43] の場合にも，年代記には記されていないが，チェルニゴフからノヴゴロドへ赴任したときに引き連れてきた「自分の司祭たち」（聴罪司祭など）のために，小さな木造聖堂を城塞区（ゴロディシチェ）に建てた可能性があり，そこでかれの結婚の戴冠式が，急遽行われたのではないか。

285）*Км* владыка Нифонтъ; *Сн*, *Ак* Нифонтъ の異読がある。前者の владыка（猊下）は *Км* 系列写字生（編者）の補筆によるもの。

婚式に行かせなかった。〔ニフォントは〕言った「**あなたは**[286]〔スヴャトスラフは [C43]〕かの女を娶るのは然るべきではない」[287]。

この年，フセヴォロド [D111] の寵を受けていた者たちが，公〔スヴャトスラフ [C43]〕を射撃したが，〔公は〕生きていた[288]。

6645(1137) 年

インディクト 15 年の 3 月 7 日になった時[289]，市長官コンスタンチン[290] (Костянтин) がフセヴォロド [D111] のもとへ走り，また他の身分の高い人士が何人か〔走った〕[291]。

そして，ヤクーン・ミロスラヴィチ[292] (Якун Мирославич) に市長官職が与えられた。ノヴゴロドにおいてだった。

286）ニフォントの直接話法の言葉には異読があり，*Сн* не достоить ея пояти; *Км, Ак* не достоить ти ея по(н)яти となっている。文脈から見て配下の司祭・修道士たちへの言葉だから，*H1-M* 諸写本の ти（あなたは）は明らかに後代の挿入である。

287）ニフォントがスヴャトスラフの結婚（再婚）に反対した理由として，社会的に不釣り合いな結婚だったことを挙げる研究者もいるが [Горский 2001: С. 12]［ゴルスキー 2020：7 頁］[Гиппиус 2004: С. 172, Прим. 5],「かの女を娶るのは然るべきではない」(не достоить ея пояти) の表現が，教理問答において教会法に適っていないことをあらわす定型表現であることから（例えば『キリクの問答書』(Вопрошание Кириково) 第 4 条を参照 [Вопрошание Кириково: Стб. 25]），ここはニフォントがこの結婚が教会法違反であることをとがめたと考えるべきだろう。違反の内容については，結婚相手が再婚だった，修道女だったなどが考えられるが，まったくの推測の域を出ない。ここで，結婚相手についてまったく触れていないのも（上注 282），年代記記者が教会法違反を憚ったのではないか。

288）「フセヴォロドの寵を受けていた者たち」(милостьничи Всеволожи) とは，フセヴォロド公 [D111] に近かったノヴゴロド貴族たちを指しているだろう。かれらのスヴャトスラフ公 [C43] 暗殺の試みが未遂に終わったということは，先の記事のユーリイ・ジロスラヴィチ（上注 279）の場合と同様に，かれらは過酷な弾圧を受けたに違いない。

289）「インディクトの 15 年の 3 月 7 日になった時」(Настанучю мѣсяця марта в 7 индикта лѣту 15) は *H1-C* の読みで，独立与格構文を保っているが，*H1-M* 諸写本の読みでは下線部分を削除したために，文法的に不完全文になっている。明らかに前者が本来である。なお，本記事は 3 月式暦で書かれていることから，6645 年の項の冒頭に置かれているが，インディクト 15 年（1136 年 9 月～ 1137 年 8 月）であることから，1137 年 3 月 7 日の事件ということになる。

290）市長官コンスタンチン（コスチャンチン）・ミクーリニチについては上注 255 を参照。かれは，1136 年 2 月に市長官に選ばれているので，この時は，1 年 1 ヶ月ほどしか在任していなかったことになる。

291）フセヴォロド支持派だった市長官コンスタンチンとその仲間の貴族たちは，スヴャトスラフ公派の貴族たちから迫害を受けて，当時フセヴォロド [D111] が滞在していたヴィシェゴロド（上注 261）へ亡命したということだろう。

292）ヤクーン・ミロスラヴィチ (Якун Мирославич) は，「ノヴゴロド市長官表」[№ 111-1] に記され［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 668］，おそらく前々任の市長官ミロスラフ（上注 239, 254）の息子と想定される上級貴族。フセヴォロド支持派だった前市長官のコンスタンチンが亡命したことで（上注 290），当時のノヴゴロド公スヴャトスラフ [C43] 支持派の貴族たちによって選ばれたのだろう。事態の進展を見ると，スヴャトスラフ公に最も近い人物であることが分かる。

同じ年，フセヴォロド・ムスチスラヴィチ公 [D111](князь Мьстиславич Всеволод) がプスコフへ来た[293]。〔フセヴォロドは〕自らのノヴゴロドの公座に再び就くことを望んでいたのである。かれ〔フセヴォロド〕は，ノヴゴロドとプスコフの人士たちによって，かれの支持者たち[294]によって呼ばれたのである。〔かれらは言った〕「公よ，出てきて下さい。あなたは再び望まれています」[295]。

そして，見よ，フセヴォロド [D111] が，プスコフで，兄弟のスヴャトポルク (Святополк)[296] [D114] とともにいるということを〔ノヴゴロド人が〕伝え聞いたとき，ノヴゴロドでは大きな騒乱 (мятежь) が起こった。フセヴォロド [D111] を望まない人々もいれば，フセヴォロド [D111] のところへ，プスコフ (Плескову) へと逃げ出す人々もいた。かれら〔逃げ出した者たちの〕館は掠奪に遭った。コンスタンチン[297] (Костянтин)〔の館〕，ネジャタ

293）フセヴォロド [D111] が，招聘の使節であるプスコフ人たちとともにプスコフに到着したのは，1137 年の 8 月頃のことである（上注 261 参照）。

294）「支持者たち」の原語は приятели。年代記では，この語は，公とかれが利害関係を持つ城市の市民たちとのかかわりで頻繁に用いられている。場所や状況によって様々だが，総じて，城市における公の受け入れや支配をめぐって特定の公（現実の支配公に対抗する公の場合が多い）を支持し，時にその公にとって有利な情報を提供したり，公に有利な活動を行う貴族，豪族，有力市民などを指している [Лавренченко 2015: С. 98]。

295）このことについては, *Ип*6646(1138) 記事によれば「同じ年, プスコフ人が〔ヴィシェゴロドへ〕遣って来た。そして，フセヴォロドを公として自分のもとに受け入れた。ノヴゴロド人と引き離したのである」(Того же лѣто. придоша Пльсковичи. и пояша к собѣ Всеволода княжить. а от Новгородець отложиша) と書かれている。この記述では，フセヴォロド公 [D111] の招聘はプスコフ人だけが行い，初めからノヴゴロドからの政治的な分離を意図していたかのように書かれている。これに対して，本年代記 *H1* の記事では，ノヴゴロドとプスコフの支持者たちが，フセヴォロドに再びノヴゴロドの公座に就いてもらうために招聘したのであり，プスコフに来たのは，あくまでノヴゴロド（スヴャトスラフ公 [C43] とその支持貴族たち）を屈服させる準備を整えるためとして描かれている。真相はおそらく後者のほうが近いだろう。

296）ここで, フセヴォロド [D111] はヴィシェゴロド（キエフ）から, 兄弟のスヴャトポルク [D114] を伴ってやって来たことが分かる。スヴャトポルクは，1135 年に，当時キエフにいたフセヴォロドとともに，ペレヤスラヴリの叔父ユーリイ [D17] 討伐遠征に参加したが，その後は，キエフのヤロポルク [D15] のもと（おそらくヴィシェゴロド）に身を寄せていたのだろう。兄弟のフセヴォロドがノヴゴロド地方へ向かう際に，その軍事力を補うために同行したと考えられる。この 1137 年当時，スヴャトポルクは 20 歳を少し過ぎたくらいの年齢だった。

297）ヴィシェゴロドのフセヴォロド公のもとに, 1137 年 3 月に亡命した市長官のコンスタンチン・ミクーリニチのこと（上注 289 参照）。

の[298] (Нѣжатин)〔館〕や，他の多く者たち〔の館が掠奪された〕。そしてさらに，フセヴォロド [D111] の支持者たち，貴族たちの捜索が始まり，かれらからは一人当たり 1500 グリヴナが徴収され[299]，商人たちに〔その金を〕与えて戦争の準備をさせた。〔それは〕罪のない者たちに対しても及んだ[300]。

その後，スヴャトスラフ・オリゴヴィチ [C43](Святославъ Олговиць) はすべてのノヴゴロドの地〔の勢力･軍兵〕を集めた。そして，自分の兄弟グレーブ[301] [C44](Глѣбько) とクールスク人 (куряны) をポロヴェツ人とともに (с половци) 引き入れ，フセヴォロド [D111] を追放するために，プスコフを攻めるべく (на Плесковъ) 進軍した[302]。

プスコフ人 (плесковици) はかれら〔遠征軍〕に降伏することも，自分たちのもとから公〔フセヴォロド〕を追い出すこともなかった。しかし，かれら〔プスコフ人〕は警戒して，あらゆるところに樹木を伐って鹿砦を築いていた[303]。

298）「ネジャタ」(Нѣжата) は，原語では Нѣжатин [дом] と所有形容詞形で示されている。「ノヴゴロド市長官表」(№ 111-1) では「ネジャチン」(Нѣжатин) の名で記されており［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 670］，市長官表 Б では Нѣжата Твердятич の名になっている。フセヴォロド派貴族として，市長官のコンスタンチンと行動を共にしたのだろう。かれは，まもなくノヴゴロドに戻って，反スヴャトスラフ [C43] 派としてスーズダリに亡命してから戻っており，1144 年には市長官になっている。中断はあるものの 1161 年まで務めていることから，このころはまだ若かったのではないか。

299）「かれらからは一人当たり 1500 グリヴナが徴収され」(имаша на них с полторѣ тысяцѣ гривенъ) と金額が明示されていることから，なんらかの裁判によって「罰金」が課されたことが想定されるが，その執行者（民会によるものか？），制度的・法的根拠，経緯などについては不明である。1500 グリヴナは，『ルーシ法典』(Русская Правда) で定められている罰金 (вира)（最高額で 80 グリヴナ）に比べて格段に高額であり，体制への反逆に対する厳罰という象徴的な意味があったのではないか（下注 350 も参照）。

300）「罪のない者たちにも及んだ」は *Сн* нъ сягоша и невиноватыъ; *Км* досягоша и не виноватых の異読があるが，大きな意味の違いはない。「及んだ」(сячи/досячи) とは，フセヴォロド派の者でない者たちからも何らかの「罰金」（前注）を徴収したということだろう。

301）スヴャトスラフ [C43] の兄弟のグレーブ･オリゴヴィチ (Глеб Ольгович)[C44] は，クールスク公で，この時は，スヴャトスラフ公の援軍要請を受けて，クールスクから自らの従士たちとクールスク人（城市民を徴兵した軍兵），さらにポロヴェツ人傭兵（クールスクはキプチャク平原と隣接しており，かれらと日常的な関係を保っていた。またグレーブの母親はポロヴェツ人の可能性がある）を率いて，ノヴゴロドへ駆けつけたと考えられる。グレーブは，この遠征が中断（下注 303）したあと，すぐに支配領地へ戻ったらしく，翌年の 1138 年にクールスクで没している。なお，ここで Глеб の名が Глѣбко と指小形になっているのは，公族の家庭内での通称（上注 56 参照）が，年代記に書き留められたものだろう。

302）スヴャトスラフ [C43] は，反対派から接収した資金によって，軍兵･傭兵を招集し，商人を動員しての軍備を手配した。そして，周到な準備を整えた後，部隊の移動が容易になる厳冬期（1137 年 12 月～1138 年 1 月頃）に遠征を行ったと考えられる。

303）「あらゆるところに樹木を伐って鹿砦を築く」(засѣкли осѣки всѣ) とは，敵軍の到来が予想される街道や城下に，伐採した樹木や枝を敷き詰めたり，周囲に逆茂木を立てて，敵軍の馬や輜重車（橇）の移動や侵入を妨害すること。

そして，公〔フセヴォロド [C43]〕と人々は，遠征の途上で評議して，ドゥーブロヴナ (Дубровна) で引き返した[304]。かれらはさらにこう言っていた。「自分の兄弟たちと血を流すことはやめよう。神がその神慮により正しく定めたようにしよう」。

そのとき，フセヴォロド・ムスチスラヴィチ公 [D111] がプスコフで逝去した。**2 月だった**[305]。

そして，プスコフ人はかれ〔フセヴォロド〕の兄弟のスヴャトポルク (Святополк)[D114] を味方に付けた[306]。

そして，〔ノヴゴロド人は〕かれら〔プスコフ人〕とも，スーズダリ人 (суздалци) とも，スモレンスク人 (смолняне) とも，ポロツク人 (полочане) とも，キエフ人 (кыяне) とも親和の状

304）「ドゥーブロヴナ」(Дубровна) はノヴゴロドとプスコフを間の村の名前，シェロニ川 (река Шелонь) 支流ウドハ川 (река Удохе) の河口にあり，現在のドゥーブロヴノ村 (деревня Дубровно)（プスコフ州ポルホフ区 (район) の北方）に相当する。スヴャトスラフ公 [C43] の遠征部隊は，船（もしくは氷上の馬橇）でノヴゴロドからイルメニ湖に入り，シェロニ川を 130km ほど遡ったところで評議して引き返したことになる。プスコフまでは，あと 62km ほどだった。

なお，遠征途上で，遠征隊の意見がまとまらず（「評議して」(сдумавше)）引き返した例は，1134 年夏のフセヴォロドによるスーズダリ遠征のときにもあった（上注 220）。ここでも，スヴャトスラフ支持派の貴族たちは一枚岩ではなかったということか。なお，遠征を中断した理由のひとつに，神慮 (божий помысел) が挙げられているが，その背後には，フセヴォロド [C43] に批判的だった（上注 286 参照）ノヴゴロド主教ニフォントの意向があったかもしれない（上注 150 も参照）。

305）異読があり，*H1-M* 諸写本は мѣсяца февраля だが，*Сн* にはない。*Ип*6646 (1138) 記事の対応箇所には，「2 月 11 日に，乾酪の週の木曜日にそこで〔逝去した〕。そして，〔遺体は〕聖三位一体教会に安置された。これは，かれ〔フセヴォロド〕自身が創建した聖堂だった」(месяца февраля въ. 11-и. масленои недѣлѣ в четвергъ тамо же и положенъ бысть въ церкви святои Троичѣ, юже бѣ самъ създалъ въ Пльсковѣ). と葬儀も含めた詳しい記述がある。*Сн* の読みが本来であり，*H1-M* は *Ип* 系列の記事を参照して，мѣсяца февраля の句だけを挿入したのだろう。ここで，フセヴォロド逝去の日とされる 1138 年 2 月 11 日は，たしかに乾酪の週 (седмица сырной, насленая неделя)（2 月 7 日～ 2 月 13 日）にあたるが，金曜日である。おそらく，2 月 10 日木曜日の日没以降に死没した（正教の暦では日付が代わる）と理解すればよいだろう。なお，フセヴォロド [D111] のプスコフ滞在は，1137 年 8 月～ 1138 年 2 月の 7 ヶ月ほどの短期間だった。

306）「プスコフ人はかれの兄弟のスヴャトポルクを味方につけた」(яшася плесковичи по брата его Святополка) の言い回しは分かり難い。フセヴォロド [D111] 支持派のプスコフ貴族やプスコフ在住のノヴゴロド貴族は，公の死によって当面の目標を見失ったが，身代わりに弟のスヴャトポルク公 [D114] を立てることで，公座の奪回の活動を続けようとしたということだろう。

態にはなかった[307]。

そして，一年中，大きなオスミンカ[308]〔のライ麦が〕7 レザナの値段が続いた[309]。

6646(1138) 年

3 月 9 日，四十聖人の日[310]，大きな落雷 (громъ) があった。屋内にいてもわれらにははっきり聞こえたほどだった。

同じ年, スヴャトスラフ・オリゴヴィチ公 [C43] がノヴゴロドから追放された。4 月 17 日だった。復活祭の後の 3 番目の日曜日のことだった[311]。〔かれは〕2 年に 3 ヶ月足りない期間[312],〔公座に〕座していた。

307）フセヴォロド [D111] が没した 1138 年 2 月時点で，確かに，ルーシの主要な都市は，ノヴゴロド公スヴャトスラフ [C43] に敵対する諸公が支配していた。記述の順番で見ると，プスコフではフセヴォロドの弟スヴャトポルク [D114] が擁立され，ノヴゴロド公座奪取を狙っていた。ロストフ＝スーズダリはユーリイ手長公 [D17] が公支配していた。スモレンスクにはロスチスラフ公 [D116] が 1127 年から安定した支配を確立していた。当時のポロツク公はヴァシリコ・スヴャトスラヴィチ [L22] だが，かれの祖父フセスラフ呪術公 [0811:L] 以来，ポロツクとノヴゴロドは対立関係にあった。キエフにはヤロポルク公 [D15] がいた。以上のように，チェルニゴフ（フセヴォロド [C41] が支配公）を除いて，その他の主要都市の支配公は，ほとんどがモノマフ一族に占められていたのである。

308）「大きなオスミンカ」(осминка великая) は，前出の 1127 年，1128 年のノヴゴロドの天災による飢餓の記事とのつながりから「ライ麦」(рожь) の秤量であることは明らかである（*Твр* の対応記事には осминка ржи とある）。「オスミンカ」については上注 158 を参照。なぜ「大きな」(великая) の形容語がついているか不明だが，「オスミンカ」の意味は「八分の一」という広く通用される言葉で，おそらく「小さな」単位もあったのだろう。

309）レザナ (рѣзана, резана) の貨幣単位については,［ノヴゴロド第一年代記 (3)：注 253］を参照。『ルーシ法典』におけるグリヴナとレザナの換算率は 1 レザナ＝ 0.02 (1/50) グリヴナであることから，1 オスミンカのライ麦の価格である 7 レザナは 0.14 グリヴナの価値になる。1127 年の飢餓のときには，価格が半 (0.5) グリヴナだったことから，これに比べると，この時の価格は約 3.5 分の 1 である。1128 年の飢餓のときには，1 グリヴナだったから，約 7 分の 1 に下がったことになる。直前の記事で，ルーシの主要な諸都市と「親和の状態にはない」とあり，おそらくノヴゴロドと諸都市との交易がなく，他地域からの穀物の購入が途絶えていたことから，この記事の「ライ麦 1 オスミンカ 7 レザナ」の価格は，天災による飢餓の時ほどではなくとも，ある程度の物価高騰の苦しみがあったと解釈することができる。

なお，16 世紀の『ニーコン年代記』の対応記事では，「この不和の中で大いなる飢餓があった」(и бѣ въ тѣхъ розмириахъ гладъ великъ) [ПСРЛ Т. 9: С. 161] と解釈的に書き直している。

310）「四十聖人の日」とは,「セヴァステの四十殉教者」(Сорок мучеников севастийских) の祝祭日のことで，3 月 9 日にあたる（上注 105 参照）。

311）この部分は *H1-C* のみの読みで, *H1-M* 諸写本にはない。*H1-M* の編集段階で削除された可能性が高い。なお，1138 年の復活祭は 4 月 3 日であり，その後 (по Пасцѣ) の，復活祭の日曜日から数えた「3 番目の日曜日」(въ недѣлю 3 [третью]) とは，確かに 4 月 17 日に相当する。

312）スヴャトスラフ [C43] の最初のノヴゴロド公座在任期間は，1136 年 7 月 19 日（上注 273）～ 1138 年 4 月 17 日だから，1 年 8 ヶ月と 29 日になる。「2 年に 3 ヶ月足りない」(два лѣта безъ 3 мѣсяць) は 1 年 9 ヶ月のことだから，これにほぼ対応する。

そして，**再び**[313]，同じ年，ユーリイ・ウラジーミロヴィチ [D17] を〔招聘するために〕スーズダリへ使者を派遣した[314]。

一方, この月〔4 月〕の 23 日,〔ノヴゴロド城市の〕人々は**驚愕した**[315]。スヴャトポルク [D114] がプスコフ人とともに,〔ノヴゴロド〕城市の傍に来ているという虚聞が伝えられたからである。すべての城市〔の人々〕は，城市を出てシリニシチェ[316] (Синилищь) へ向かったが，何も〔見つけられ〕なかった。

一方，スヴャトスラフ [C43] の妃 (Святославлья) は，身分の高い人士たちとともにノヴゴロドで引き受けられ〔留置され〕た[317] が，スヴャトスラフ [C43] 自身は，道中でスモレン

313）「そして再び」(и пакы) は *Км* のみの読みで，*Сн, Ак* にはない。また，事実とも符合しない。*Км* 系列の編者による固有読みである。

314）この 1138 年 4 月後半の時点で，ノヴゴロド貴族の間では，ユーリイ手長公 [D17] 支持派が主導的な勢力となっていたことが分かる。

315）「驚愕した」は *Сн* пополошишася の訳で, *Км, Ак* положиша は意味がとり難い。後者は *H1-M* 段階での二次的な推定読みだろう。

316）「シリニシチェ」は異読があり，*Сн* Сильнищь; *Км, Ак* Синилищь。標準綴りは Сильнище。史料では, Синилище , Синичья горка の表記もある。ノヴゴロドのソフィア地区側の郊外の高台で, ソフィア聖堂から南南西方向に 1.8km ほど離れている。現在ここには,「シニチヤ丘のペトロとパウロ教会」(Церковь Петра и Павла на Синичьей горе) がある。ノヴゴロドとプスコフを結ぶ街道上にあり，ノヴゴロド城市民は，プスコフからのスヴャトポルク [D114] の軍勢を出迎えて，恭順の意を示すためにこの場所に出て来たのである。

317）「スヴャトスラフの妃」は，1136 年 12 月～ 1137 年 2 月にスヴャトスラフ [C43] がノヴゴロドで結婚した相手で，おそらくノヴゴロド貴族の娘と考えられる（上注 282）。かの女はノヴゴロドとの地縁が深かったことから，姻戚の者たち（「身分の高い人士たち」(лучьшии мужи)）が，スヴャトスラフ公とともにノヴゴロドを去ることを許さず，留置されたのではないか。

スク人[318]が捕まえて[319]，スミャディン[320] (Смядын) の修道院でかれを監禁していた。同様にまた，かれ〔スヴャトスラフ〕の妃はノヴゴロドで，聖女ヴァルヴァラ修道院[321] (у святои Варварѣ в манастырѣ) で〔監禁されていた〕。これは，ヤロポルク [D15] とフセヴォロド [C41] (Всеволодок) との〔話し合いによる〕裁定が下るのを待っていたのである。

同じ年，ユーリイ [D17] の息子で，ウラジーミル [D1] の孫であるヤロスラフ公[322] (князь Ярославъ) が，スーズダリからノヴゴロドへ，公座に〔就くために〕やって来た。5 月 10 日だった[323]。

〔ノヴゴロド人は〕プスコフ人と和解した[324]。

同じ年，キエフで，ヤロポルク公 [D15] が逝去した。そして，かれの兄弟のヴャチェスラフ

318）スヴャトスラフ [C43] が，ノヴゴロドから故郷のチェルニゴフへ帰るためには，ロヴァチ川 (Ловать) ⇒トロパ川 (Торопа) を連水陸路経由で通過して，ドニエプル川上流に入り，川を下るときにはスモレンスクを通過しなければならない。このとき，当時のスモレンスク公ロスチスラフ [D116:J] の指示によって，配下のスモレンスク人がスヴャトスラフ [C43] を捕らえたのだろう。

319）この事態については，*Лвр*6646(1138) 記事で，「この年，ノヴゴロドから逃げたスヴャトスラフ・オリゴヴィチを捕まえた。〔これについて〕ヤロポルク [D15] に知らせがもたらされた。そして，この時から，オレーグ [C4] の息子たちは，いっそう激しく掠奪行為を始めるようになった」(Того же лѣта яша Олговича Святослава бѣжаща из Новагорода, и приде вѣсть Ярополку, и оттолѣ больми почаша воевати Олговичи) との記述があり，モノマフ一族とオレーグ一族との間の対立抗争の重大なきっかけになったことがわかる。

320）スミャディン (Смядын) は，スモレンスク城市から西へドニエプル川を 3km ほど西に下った左岸に河口があったスミャディニ川 (Смядынь) 河口域とその周辺地を指す地名（現存せず）。そこにあった修道院 (манастырь) とは，そこがグレーブ公 [15] 殺害の場所であったこと（［ノヴゴロド第一年代記 (3)：注 85］）から建てられた「ボリスとグレーブ修道院」だったと思われる。*H1*6653(1145) 記事に，ここに「ボリスとグレーブの石造りの教会」が定礎されたとあることから，以前同じ場所に木造の修道院（付属教会）が建っていたのではないか。

321）「聖女ヴァルヴァラ修道院」(святая Варвара) は，ソフィア地区リューディン区のチェルニツィナ通り (улица Чернинцны) にあった修道院で，本年代記 1218-1219 年に石造りの教会建築の記事があることから，木造の修道院（教会）が建っていたのだろう。

322）この「ヤロスラフ」(Ярослав) は *H1-C* と *H1-M* に共通の読みだが，*Лвр*6646(1138) の項に「ロスチスラフ・ユーリエヴィチ [D171] を自らの公として引き受けた」(а Гюргевича пояша Ростислава княжить у себе)（*Ин*6647(1139) では а Ростислава Гюрдевича новгородци посадиша в себе）との記事があり，また以下の記述から見て，Ярослав は Ростислав の誤記と見るべきだろう。［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 503］も参照。

323）上注 313 の，ノヴゴロド人による招聘に応じて，ユーリイ手長公 [D17] が息子を派遣したのである。1138 年 5 月 10 日のことである。

324）ユーリイ [D17] の息子ロスチスラフ [D171] がノヴゴロド公として赴任したことによって，プスコフにいたスヴャトポルク [D114]（上注 314）はノヴゴロドの公座に就く見通しを失って，プスコフを去り，キエフに戻った（その後まもなく，ベレスチエ〔ブレスト〕に所領を与えられている〔下注 353〕）と考えられる。そのため，プスコフ人は独自路線をあきらめ，ノヴゴロドの公と市長官に従うことに同意したのである。

(Вячеславъ)[D16] が〔キエフの〕公座に座した[325]。

6647(1139) 年。

ユーリイ (Юрги) 公 [D17] が，スーズダリからスモレンスクへ向けて到来した[326]。そして，フセヴォロド [C41] を攻めるために，ノヴゴロド人をキエフへと招集した。そして，〔ノヴゴロド人は〕かれ〔ユーリイ〕に聞き従わなかった[327]。

そのとき，ロスチスラフ[328] [D171] は，ノヴゴロドからスモレンスクへ[329]，父のもとへと逃げた[330]。9 月 1 日だった。ノヴゴロドに，1 年と 4 ヶ月のあいだ[331]〔公座に〕座していた。

そして，ユーリイ [D17] は〔ノヴゴロド人に対して〕怒りを発して，再び，スーズダへと向

325）*Ип* および *Лвр* の対応記事によると，キエフ公ヤロポルク [D15] 没したのは 1139 年 2 月 18 日で，ヴャチェスラフがキエフに入城して公座に就いたのは 2 月 22 日のことである。

326）ユーリイ手長公 [D17] は，以下の記事によれば，このとき（1139 年 3 月～ 5 月）スモレンスクを占領して，1139 年 9 月頃までこの城市を拠点として滞在し，チェルニゴフ攻撃を準備していたようである。

327）この「ノヴゴロド人」の，ユーリイ手長公 [D17] への反発は，息子ロスチスラフ [D171] をノヴゴロド公座に就けておきながら財政回復の努力をせず，キエフ公に対抗するための徴兵のみを強いるユーリイの方針に，ノヴゴロド貴族の多くが賛同しなかったということだろう。これは，まもなくロスチスラフ [D171] の追放へ（下注 329）とつながることになる。

328）ノヴゴロド公のロスチスラフ・ユーリエヴィチ [D171] のこと。上注 321 を参照。

329）1139 年 9 月の時点ではユーリイ手長公 [D17] はまだスモレンスクに滞在していた（上注 325）。ロスチスラフ [D171] はその後，父ユーリイとともにスーズダリに行き，1141 年 11 月に再びノヴゴロドの公座に就くことになる（下注 362）。

330）この，1139 年 9 月 1 日のロスチスラフ [D171] のノヴゴロドからの「逃亡」について，*Ип*6648(1140) 年の記事（実際は 1139 年の出来事）では「その年，ノヴゴロド人はロスチスラフ･ユーリエヴィチ [D171] を追放した」(В се же лѣто. выгнаша Новгородци Гюргевича Ростислава) と書かれている。実際は，直前の記事に見るように，ノヴゴロド貴族の間で，反ユーリイ [D17] = ロスチスラフ [D171] の勢力が急速に台頭し，ロスチスラフ [D171] はノヴゴロドの公座をこれ以上保持することができなかったのだろう（上注 326）。

331）1138 年 5 月 10 日から 1139 年 9 月 10 日までのロスチスラフ [D171] の公座在位だから，当日を含めて 482 日であり，確かに 1 年 4 ヶ月に相当する（［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 504］も参照）。なお，*Сн* 写本では，«и҆ .лѣто. и҆ д҃. мцѣ» となっており，冒頭の и҆ はティトラは付されているものの，«.» ではさまれていないことから，数字として理解すべきではなく（数字の場合は 8 になるが），本来接続詞の «и» であったものが，*H1-C* の編集（もしくは *Сн* の書写）の過程で誤ってティトラが付されたと考えるべきだろう。

かうと，ノーヴィイ・トルグ (Новыи Торгъ) を占領した[332)]。

ノヴゴロド人は，スヴャトスラフ・オリゴヴィチ [C43] を招聘するための使節を，キエフへ[333)]と派遣した[334)]。かれらは，誓約の儀式をおこなった[335)]。

そして，ノヴゴロドでは騒乱が起こっていた。スヴャトスラフ [C43] が長い間不在だった〔か

332）ユーリイ [D17] は，息子ロスチスラフ [D171] のノヴゴロドからの追放によって，ノヴゴロド人の援軍が得られないことを知ると，チェルニゴフ攻撃を諦めて，いったん所領のスーズダリに戻ることにした（「スーズダリへと向かう」）。その行路は，スモレンスクからドニエプル川を遡って，連水陸路を経てヴァズーザ川 (Вазуза) ⇒ヴォルガ川に入ることになる。それから，ヴォルガ川河岸のトヴェーリ (Тверь) に到達し，そこに河口があるトヴェルツァ川 (Тверца) をわずか遡ったところ（60km ほど）に，城市ノーヴィイ・トルグ (Новыи Торг)（別称「トルジョク」(Торжок)）がある。この城市は，ノヴゴロド地方の南東端に位置し，ロストフ＝スーズダリ地方と接する商業都市だった。ユーリイ公とノヴゴロドから逃げて来た息子ロスチスラフ [D171] は，ノヴゴロド人に対する報復として，スモレンスクからスーズダリへの帰還の途上に，この有力な都市に立ち寄って掠奪を仕掛け，穀物等の搬入など，ノヴゴロドの交易を麻痺させようとしたのである。

333）本年代記には記されていないが，この期間にキエフでは大きな政権交代が起こっていた。*Ин*6648 (1140) 記事（実際は 1139 年の出来事）によれば，キエフ公になったばかりのヴャチェスラフ [D16] に対して，チェルニゴフ公フセヴォロド [C41] はヴィシェゴロドを占領し，さらにキエフを攻撃した。ヴャチェスラフ [D16] は対抗をあきらめて，フセヴォロドにキエフを引き渡した。フセヴォロド [C41] がキエフの公座に就いたのは 1139 年 3 月 5 日のことである [ПСРЛ Т. 2: Стб. 303]。それ以降，1139 年いっぱい，フセヴォロド [C41] とスヴャトスラフ [C43] はキエフにいた。スモレンスク郊外の修道院に捕らえられ，監禁されていた（上注 318）スヴャトスラフ [C43] は，ユーリイ [D17] がスモレンスクを占領したとき（1139 年 3 月～ 5 月）に（上注 325）解放されて，キエフ公になったばかり（1139 年 3 月 5 日）の兄弟フセヴォロド [C41] のもとに身を寄せたと思われる。

334）このキエフへの使節派遣は，1139 年 9 月 1 日にノヴゴロド公がいなくなってからすぐに（9 月中）行われたと考えられる。*Ин*6648(1140) 年の記事（実際は 1139 年の出来事）では，「ロスチスラフ逃亡」の記述（上注 329）に続いて，「そして，フセヴォロド [C41] に請願して，兄弟のスヴャトスラフ [C43] をノヴゴロド〔の公として〕求めた。こうして，かれら〔ノヴゴロド人〕はかれ〔スヴャトスラフ〕をノヴゴロドに据えた」(и испросиша у Всеволода брата Святослава в Новъгородъ и посадиша и Новѣгородѣ)[ПСРЛ Т. 2: Стб. 307] とある。

335）ここで，「誓約の儀式をおこなった」(заходивше ротѣ) とは，ノヴゴロド使節団とスヴャトスラフ [C43] が，後者がノヴゴロド公座就位の条件について約定 (ряд) を結び，その内容に違反しないことを誓う儀式を両者が行うこと。通常は，十字架接吻 (крестоцелование) を行うが，ここでは別の заходити ротѣ という表現が使われている。*Лвр*6647(1139) 年記事では「〔ノヴゴロド使節団は〕フセヴォロド [C41] のもとへ自分たちの子供たちを人質として置いて，こう言った『われらのもとにスヴャトスラフ [C43] を派遣して下さい』」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 307] とある。すなわち，заходивше ротѣ という特有な表現には，「人質を置く」(пустити... в тали) 儀式が反映されているのではないか。このような場合に「人質」をとる慣習については，上注 262 も参照。

なお，ヤーニンの解釈によれば，このときの約定でスヴャトスラフ [C43] は，終身ノヴゴロド公としてとどまることを約束した [Янин 2003: С. 138] としているが，史料的には確認できない。

らである〕[336]。

同じ年，スヴャトスラフ・オリゴヴィチ公 [C43] がノヴゴロドに入城し，公座に座した。12 月 25 日だった。

6648(1140) 年。

3 月 20 日, 太陽にしるしがあった。**新月から** 4 日目の〔月くらいの太陽〕が残って〔見えた〕。そして日没前に，再び丸くなった [337]。

同じ年，〔ノヴゴロド人は〕キエフへ，フセヴォロド [C41] のところへ，コンスタンチン・ミクーリニチ (Костянтин Микулиниц) を追放した。また〔同様に〕，かれの後に，6 人の人士が**行った** [338]。〔かれらは〕鎖を掛けられていた。それは，ポリューダ・コンスタンチノヴィチ (Полюда Гостятиниц)，デミヤン (Дѣмьян) とその他幾人か〔4 人〕だった [339]。

6649(1141) 年。

4 月 1 日に，天空に非常に驚くべきしるしがあった。6 個の輪があった。3 個〔の輪〕が周りにあり, また 3 個〔の輪〕が太陽の両側の周りにあった。ほとんど一日中そのようなままだっ

336）キエフにおいてノヴゴロドからの使節団とスヴャトスラフ [C43] の間でノヴゴロド公就位についての約定 (ряд) が結ばれたのが，かりに 9 月後半だとすると（上注 333），かれのノヴゴロド入城が 1139 年 12 月 25 日だから，約 3 ヶ月のあいだ，ノヴゴロド人は公座不在の状態に置かれたことになる。これを「長い間不在」(долго не бяше) と言うのは，ノヴゴロドがユーリイ手長公 [D17] からの攻撃の脅威にさらされていたからだろう。

337）これは，1140 年 3 月 20 日に観測された皆既日食のことを言っている。現在のノヴゴロド時間（GMT+3 時間）であらわすと，この日食は 17:10 に完全に月に隠れ，19:15 に食が終わっている。この日の日没が 19:24 だから，日没直前に確かに「再び丸く」なったことになる。なお，「新月から 4 日目」の月ほどの大きさは月齢 4 であり, これは日食の際の食分 0.8 に「欠け」の見かけがほぼ同じである。この日の日食では，18:20 頃に食分 0.8 になったので，その時（日没の約 1 時間前）実際に観察したことを言っているのだろう［日月食等データベース］［こよみの計算長期版：月の満ち欠けカレンダー］。

338）*Км* поиха; *Ак* ѣхаша（行った）になっているが，*Сн* инѣхъ（かれ以外の）となっている。後者のほうが自然であり，本来の読みではないか。

339）この記事によって，スヴャトスラフ [C43] の公座就位直後の 1140 年のあいだに，ノヴゴロドでは，スヴャトスラフ反対派貴族に対する，スヴャトスラフ及び支持派貴族（ヤクーン）による大規模な弾圧が行われたことが分かる（下注 358）。一部の上級貴族たちは，この弾圧を避けて，スーズダリへ亡命している。

た[340)]。

同じ年，キエフのフセヴォロド [C41] から〔使節が〕が遣って来た。〔かれの〕兄弟のスヴャトスラフ [C43] をキエフへ連れ戻すためだった[341)]。〔フセヴォロドは〕こう言っていた。「わしの息子[342)]〔スヴャトスラフ [C411:G]〕を公として受け入れよ」。

そして，〔ノヴゴロド人は〕主教〔ニフォント〕と多くの最高位の身分の人々を，かれ〔フセヴォロド〕の息子を呼び寄せるために派遣した[343)]。

そして，〔ノヴゴロド人は〕スヴャトスラフ [C43] にこう言った。「あなたは，兄弟〔フセヴォロド〕の〔使節が来るのを〕待って下さい。その時に〔キエフの兄弟のところに〕行けばよいでしょう」。〔だが〕かれ〔スヴャトスラフ〕はノヴゴロド人を恐れており，〔こう言った〕「わしを騙そうとしているのではないか」。そして，かれ〔スヴャトスラフ〕は夜半に，密かに逃

340）この「しるし」(знамение) の「3 個〔の輪〕が周りにあり，また 3 個〔の輪〕が太陽の両側の周り」(3 около, а 3 около оба полы солнца) が分かり難いが，これは日食のような天文現象ではなく，「幻日」（паргелий, sun dog）と呼ばれる気象（大気光学）現象のことを言っているだろう。太陽の日暈（ひがさ・にちうん）が複数出来て，暈が重なった部分の光が強いので太陽がいくつか現れたように見える現象である。

341）1139 年 12 月 25 日にスヴャトスラフ [C43] がノヴゴロド公になってから，このキエフ公フセヴォロド [C41] による使節派遣（1140 年末）までの約 1 年間（下注 343）のノヴゴロドの公座を巡る状況については，*Ин*6648(1140) 記事に詳しい。すなわち，公座就位後「しばらくして，ノヴゴロド人は民会で，スヴャトスラフ公に対して，その悪行ゆえに決起した」。これを見たスヴャトスラフは「フセヴォロド [C41] に使者を遣って，『ここの人々には重圧 (тягота) がある，自分はかれらの中にいたくない。あなたが望む者を派遣するがよい』と言った」[ПСРЛ Т. 2: Стб. 307]。そこで，フセヴォロドは，ノヴゴロドに側近の千人長イヴァン・ヴォイティシチ (Иван Войтишич) を派遣して，ノヴゴロドの高位の貴族たちを捕まえてキエフに送った。しかし，ノヴゴロドでは，スヴャトスラフ支持派の貴族たちが，民会で迫害を受けていた。自身も捕らえられる危険を感じたスヴャトスラフ [C43] は，千人長と相談して，妻と従士たちとともに，ポロツクからスモレンスクへと逃亡したのである [イパーチイ年代記 (2)：注 199]。

342）このフセヴォロド [C41] の息子とは，スヴャトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] のことで，この頃（1141 年）18 歳くらいだった。かれは結局，ノヴゴロドの公座に就くことはなかった（下注 353 参照）

343）*Ин*6648(1140) 記事では，キエフの千人長イヴァン・ヴォイティシチがノヴゴロドにやってきて（上注 340），「〔ノヴゴロド人〕の最高位の人士たちに懇請して〔集め〕，かれらを捕まえると，フセヴォロドのもとに連れて行った」(прося у нихъ мужь лѣпшихъ и поимавъ ѣ, приведъ къ Всеволоду) と，あたかも強制的に連れ帰ったように，キエフ公の視点から書かれている。ところが本年代記では，主教ニフォントとノヴゴロドの上級貴族たちは自主的に，フセヴォロド公 [C41] の息子を迎えるために赴いたように述べられている。

げ出した[344]。

ヤクーン[345] (Якунъ) は，**かれら**[346] とともに逃げた。そして〔ノヴゴロド人は〕ヤクーンを**プレサ川**[347] で捕えた。そして，かれを，かれの兄弟プロコーピイ (Прокопья) とともに，ここへ〔ノヴゴロドへ〕連行した[348]。母親が産んだときのように〔かれを〕裸にして，死なない程度わずかだけ〔かれらを打った〕[349]。そしてかれ〔ヤクーン〕を橋から投げ落とした。しかし，神が〔かれを〕救った。〔かれは〕浅瀬を歩いて川岸にたどり着いた。そしてそれ以上かれ〔ヤクーン〕を打たなかった[350]。しかし，かれから 1000 グリヴナを徴収した。かれの兄弟〔プロコーピイ〕からもまた 100 グリヴナを徴収した[351]。他の者たちからも徴収した。そして，ヤクーンを兄弟〔プロコーピイ〕とともに，チューヂ人のところ[352] に，両手を首のうしろで縛めた状態で追放した。

その後，ユーリイ [D17] はかれら〔二人〕を自分のところに引き取り，かれら二人の妻たち

344）このスヴャトスラフ [C43] の逃亡については上注 340 参照。その時期については，以下にある「9 ヶ月公が不在」の後に「〔1141 年〕11 月 26 日にロスチスラフ [D171]」が公座に就いたことから逆算すると，1141 年 1 月後半に起こったと考えられる。その場合，スヴャトスラフの二度目のノヴゴロド公座在位期間は，1139 年 12 月 25 日～ 1141 年 1 月後半だから，ほぼ 1 年と 1 ヶ月になる。

345）「ヤクーン」(Якунъ Мирославич) はスヴャトスラフ支持派の筆頭貴族で 1137 ～ 1141 年の期間の市長官だった（上注 291 参照）。

346） *Сн* съ нимь（かれとともに）; *Км*, *Ак* съ ними（かれらとともに）の異読がある。叙述の流れから判断すると，「スヴャトスラフとともに」と解釈できる前者が本来の読みだろう。

347）「プレサ川で」は異読があり，*Сн* на Плисѣ; *Км*, *Ак* на Плесѣ となっている。Плиса, Плеса（または Плисъ, Плесъ）に相当する川や湖は他の史料にはない。ポロツクからスモレンスクへ（上注 340）向けて逃げたスヴャトスラフと共に（後を追って？）ヤクーンは逃げたが，途中で追っ手に捕まったとすれば，ノヴゴロド⇒イルメニ湖⇒ロヴァチ川の行路（いわゆる「ヴァリャーグ人からギリシア人への道」(путь из варяг в греки) にあたる）の，ノヴゴロドからさほど離れていない地点ということになる。イルメニ湖からロヴァチ川を 13km ほど遡ったところに，ポリスチ川 (река Полисть) の河口があり，ノヴゴロドからは直線で 50km ほどしか離れていない。また，1132 年に，ノヴゴロドの使節がキエフに帰ろうとするフセヴォロド [D111] に追いついた場所，「ウスチイ」(Устьи)（上注 200）のすぐ近くでもある。その意味で，Плиса/Плеса は現在の Полисть（ポリスチ川）の当時の呼び名だったのではないか。

348）「連行した」は *Сн* приведъше; *Км* пришедше; *Ак* приведши の異読があるが，*Сн, Ак* の読みが本来で，*Км* は固有読みである。

349）「死なない程度わずかだけ」(мало не до смерти) の文には動詞がないが，後の文とのつながりから推測すると，動詞 биша（～になるまで打った）が省略もしくは欠落していると思われる。

350）「神が救った」(Бог избави) とあり，溺れ死ななかった者が容赦されたことは，この橋からの投げ落としが，一種の「神判」であったことを示している［草加　2007：222 頁，注 31］（上注 214 も参照）。

351）この体制への反逆に対して課された「罰金」の性格については，上注 298 を参照。

352）「チューヂ人のところ」(в чюдь) については，具体的な場所は記されていないが，例えば，1132 年の遠征で奪回して，チューヂ人に対する徴税活動の拠点となり，定期的な行き来があったはずのユーリエフ (Юрьев) 城砦（上注 211）などが考えられる。

もノヴゴロドから〔引き取った〕。そして，自分のところで手厚く遇したという[353]。

フセヴォロド [D41] は怒りを発した。そして，すべての者を，主教も，大商人たち[354]も引き取った〔留置した〕[355]。そして，ノヴゴロド人は 9 ヶ月のあいだ[356]公不在の状態だった[357]。

そこで〔ノヴゴロド人は〕スーズダリから，スーディロ[358] (Судило)，ネジャタ[359] (Нѣжата)，ストラシコ (Стражко) 呼び寄せた。かれらはスヴャトスラフ [C43] とヤクーン〔による弾圧〕

353）ヤクーンはまもなく流刑地（チューヂ人の地）から逃亡したと思われる。ただ，かれ自身が弾圧したスヴャトスラフ [C43] 反対派の貴族たちによって行政府が運営されているノヴゴロドへ帰国することは不可能だった。そこで，ヤクーンは，当時スヴャトスラフ [C43] と同盟を始めていたスーズダリのユーリイ手長公 [D17] のもとに亡命先を求めたのである。ユーリイがヤクーンとその妻を「手厚く遇した」(держаше в милости) のは，息子ムスチスラフ [D171] が公支配を行っているノヴゴロドの貴族の中に自分の支持者を確保するためだったと思われる。

354）キエフ公フセヴォロド [C41] の息子を引き受けるためのノヴゴロド使節団の中に「大商人」(гость) が加わっているのは，穀物の輸入など急を要する問題に対応するためだろう（下注 355 参照）。

355）キエフ公フセヴォロド [C41] が「怒りを発した」(разгнѣвася) のは，主教ニフォント等のノヴゴロドの使節団に対してであり，*Ип*6648(1140) 記事にはその経緯が詳しく述べられている。それによると，キエフにやってきた使節団は，フセヴォロド [C41] の息子スヴャトスラフ [C411:G] をノヴゴロド公として求め，スヴャトスラフを連れてキエフを発った。ところが，使節団が帰路にチェルニゴフに滞在していたときに，かれらは「協議」の上，初の意図を翻して，モノマフ一族から公を招聘する方針を表明し（*Н1*6650(1142) 記事によればスヴャトポルク [D114] のこと），その旨をフセヴォロドに伝えた。これを聴いたフセヴォロドは怒って，チェルニゴフに部隊を派遣して，使節団と息子をキエフに連れ戻して，使節団はキエフに留置（拘束）した。そして，その間に，ノヴゴロド公の候補になりそうな二人の公（おそらくスヴャトポルク [D114] とウラジーミル [D115]）に対して，ノヴゴロド公にならないよう工作を行ない，前者にはベレスチエ（ブレスト）を与えている。主教を含めた使節団の留置は，1141 年の冬から 1142 年夏にかけての期間に及んだ [ПСРЛ Т. 2: Стб. 307-308][イパーチイ年代記 (2)：注 200-208]。

356）1141 年 1 月後半から 11 月 26 日までの 9 ヶ月のこと（上注 343 参照）。この 9 か月間は公がいないためにノヴゴロドは苦しんだということが当然踏まえられている。

357）*Ип*6649(1141) 記事には，「ノヴゴロド人たちは，フセヴォロド [C41] がかれらの兄弟たち〔使節団〕を引き取った〔留置した〕ことを聞いて，公座に公がいないことに耐えられず，またどこからも穀物がかれらのところに来なくなった」(Сего же лѣта. слышавше Новгородци оже приялъ Всеволодъ братию ихъ. и не стерпяче бесъ князя сѣдити. и ни жито к нимъ не идяше. ни отколѣ же.)[ПСРЛ Т. 2: Стб 308] とある。公とその配下の従士たちの不在は，ノヴゴロド領内の治安（特に付属諸都市の）を不安定化させ，所領（特に辺地）からの徴税・徴兵を停滞させたはずである。さらに，食料不足という経済的要因が，次に見るように，ユーリイ一族からの公の招聘の一因となったことは興味深い。

358）「スーディロ」(Судило) の父称は「イヴァンコヴィチ」(Иванкович) で，市長官イヴァンコ・パーヴロヴィチ (Иванко Павлович)（上注 221, 232）の息子。リューディン区の貴族。かれついては，市長官表 [№ 111-1] に記されている。今回の 1141-44 年に市長になり，さらに 1147-56 年に再任されている。1156 年没。（［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 669］を参照）

359）「ネジャタ」(Нѣжата) については，上注 294 を参照。1137 年 9 月～10 月の暴動のときには，フセヴォロド [D111] 派貴族としてプスコフへ逃亡している。

ゆえに，かつてノヴゴロドから逃げた者たちであった[360]。

そして，スーディロにノヴゴロドの市長官職が与えられた[361]。

そして〔ノヴゴロド人は〕ユーリイ [D17] を公として〔招聘するための〕使節をスーズダリに派遣した。しかし，〔ユーリイはノヴゴロドへ〕行かず，前と同じように[362]，自分の息子ロスチスラフ [D171] を派遣した[363]。

同じ年，ロスチスラフ･ユーリエヴィチ [D171] は公座に就くために，ノヴゴロドに入城した。11 月 26 日だった[364]。

6650(1142) 年

主教，商人たち (купцѣ)，などノヴゴロドの使者たちは，ルーシから解放されていなかった[365]。かれらは，スヴャトポルク [D114] 以外の別の公を望んでいなかったのである。

そして，〔キエフ公フセヴォロド [C41] は〕かれらに手ずからスヴャトポルク [D114] を与え

360）多くの上級貴族たちが，1140 年のスヴャトスラフ [C43] とかれの支持派貴族（ヤクーン）による大規模な弾圧（上注 338 参照）を逃れてスーズダリへ亡命したことがわかる。

361）スーディロについては上注 356 を参照。ムスチスラフ [D171] をノヴゴロド公として迎えるにあたって，ユーリイ支持派の貴族スーディロが市長官に選ばれ，ノヴゴロドの行政体制を整えたのである。

362）「前と同じように」(яко преже бысть) とは，ノヴゴロド人は 1138 年 4 月にユーリイ [D17] のノヴゴロド公座への招聘を行ったが（上注 313），結果的に息子のロスチスラフ [D171] が赴任したことがある。ここでは，そのときのことを指している。

363）*Ип*6649(1141) 記事には，「〔ノヴゴロド人は〕ユーリイ [D17] のもとに自分たちの代表者たちを派遣して，ロスチスラフ・ユーリエヴィチ [D171] を〔公として〕受け容れた。ノヴゴロド人たちは大いなる名誉をもって，ノヴゴロドの，かれ自身の父親の公座 にかれ〔ロスチスラフ〕を就けた」(и послаша Гюргеви мужи своя. и пояша Ростислава Гюргевича. и посадиша Новгородьци с великою честью. Новѣгородѣ. на столѣ своего ему отца)[ПСРЛ Т. 2: Стб. 308] とある。この *Ип* 記事でも，ロスチスラフ [D171] はあくまで父ユーリイ [D17] の〈代理〉としてノヴゴロドの公座に就いたことが強調されている。

364）1141 年 11 月 26 日のこと。二度目のノヴゴロド公座就位である。

365）1141 年の夏から，キエフ公フセヴォロド [C41] によってキエフに留め置かれていた，主教ニフォントと上級貴族，大商人たちからなるノヴゴロド使節団のこと（上注 348 参照）。ここの「ルーシ」は具体的にはキエフを指している。

た[366]。

ユーリイ [D17] は，自分の息子をノヴゴロドへ〔公として〕行かせることで，〔ノヴゴロドの支配に〕戻っていた[367]。

ノヴゴロドでは，スヴャトポルク [D114] が自分の家来たちを全員引き連れて，かれら〔ノヴゴロド人〕のもとへとやって来るところであるという〔報を〕聞いた。そして，〔ノヴゴロド人は〕ロスチスラフ [C171] を捕らえると，主教の館に閉じ込めた。

〔ロスチスラフが〕公座にあったのは 4 ヶ月だった[368]。

そのとき，スヴャトポルク [D114] はノヴゴロドへ入城した。4 月 19 日だった。〔ノヴゴロド人は〕ロスチスラフ [D171] を解放して[369]，**ユーリイ [D17] のもとへ**[370] 行かせた。

同じ年，エミ人 (ѣмь) が到来し，ノヴゴロドの領地を掠奪した[371]。〔エミ人は〕400 人のラドガ人 (ладожанѣ) を撃ち殺し，一人たりとも取り逃がすことはなかった[372]。

366）「かれらにスヴャトポルクを手ずから与えた」(вда имъ Святополка изъ своею руку) のが誰であるか主語が記されていないが，明らかに，使節団を留置した当事者である，キエフ公フセヴォロド [C41] のことである。フセヴォロド公は，息子スヴャトスラフ [C411:G] をノヴゴロドへ公として派遣する方針を撤回して，ノヴゴロド使節団の要求を受け容れたことになる。*Ип*6650(1142) 年記事では，この方針変更は，「かれ〔フセヴォロド公〕が拘留していたノヴゴロド人とたちと約束した上で」(смолвяся с Новьгородьци. которыхъ то былъ приялъ)[ПСРЛ Т. 2: Стб.309-310] 行われたとされている。これは，1142 年 3 月初頭に決定され，まもなくスヴャトポルク [D114] と使節団はノヴゴロドへ向けキエフを出発したと思われる。

367）この「戻っていた」(воротивъся) と言うのは，1138 年 5 月～ 1139 年 9 月のロスチスラフ [D171] のノヴゴロド公座就位を最初のユーリイによるノヴゴロド支配と見なして，この状態を再び回復したという意味。

368）ロスチスラフ [D171] がノヴゴロドの公座に就いたのは 1141 年 11 月 26 日だから（上注 362），その 4 か月後であれば，1142 年 3 月 26 日前後にかれは主教館に幽閉されたことになる。

369）スヴャトポルク [D114] がノヴゴロドに入城した 1142 年 4 月 19 日の直後にロスチスラフの幽閉が解かれたとするなら，およそ 25 日のあいだロスチスラフはノヴゴロドの主教館に（上注 366）幽閉されていたことになる。

370）*Км* Юргю; *Ак* Юргию に対して，*Сн* къ отцю（父のもとへ）と異読がある。後者が自然であり，前者の *H1-M* の読みは説明的な改変だろう。

371）エミ人 (ѣмь) は，現在のフィンランドの南部一帯に居住していたバルト・フィン系部族（上注 140）。これまで，1042 年のウラジーミル [A]，1123 年のフセヴォロド [D111] による征服遠征の記録はあるが，エミ人の側からの「到来」(приходиша)，すなわち掠奪遠征についての記述はここが初めて。文脈からみて襲われた「ノヴゴロドの領地」(область Новгородская) とは，付属都市ラドガが管理していた地方のこと。

372）「一人たりとも取り逃がすことはなかった」(не пустиша ни мужа) は，遠征記事で勝利を強調するときの定型的表現。

同じ年，スウェーデンの公が司教を伴って (свьискеи князь съ епископомь)，60 隻の帆船[373]に乗り込み，大商人 (гость) たちを攻めた。かれら〔大商人たち〕は，3 隻の船で海の向こうから〔ノヴゴロドへ向けて〕航行していたところだった。〔大商人たちは〕戦ったが，上手くいくことは何もなかった[374]。〔スウェーデン公たちは〕かれら〔大商人たち〕の 3 隻の船を奪い取り (отлучиша)，かれら〔大商人たちの配下の者〕150 人を殺した[375]。

6651(1143) 年。

秋のあいだ絶え間なく雨が続いた。聖母の日 (Госпожин день) から冬至 (Корчюн) までだった[376]。暖かかった。雨があった。そして，ヴォルホフ川 (Волхов) で甚だしい大水があった[377]。いたる所で，干草や薪を流し去った。

湖〔イルメニ湖〕が夜に氷結した。風が〔氷を〕壊して，〔氷塊〕をヴォルホフ川へ流した。〔氷塊は〕橋を破壊し，4 台の橋脚を**あとかたもなく**[378]流し去った[379]。

373）「60 隻の帆船」(60 шнекъ) の「帆船」(шнека) とは，は，古ノルド語で「長い船」を意味する snekkja，さらに低地ドイツ語 snicke などからの音写語で，中世ラテン語の isnechia にも伝わっている。ここでは，スカンジナヴィアの軍装帆船を指している。なお，ロシア語の北方方言では шняка の形で，漁労用平底帆船の意味で使われている。

374）「上手くいくことは何もなかった」(не успѣша ничтоже) の主語は，その前の二つの文の動詞 шли（航海していた），бишася（戦った）の主語を引き継ぐとするのが自然であることから，「大商人たち」(гость) であり，「逃げようとしたが無駄だった」と解釈すべきだろう。

375）この記事は，ノヴゴロドとスウェーデンとの対立関係について記された最初期の記録。この時期のスウェーデンの統治者は，スヴェルケル家のスヴェルケル老王（Swærkir konongær gambl）（在位：1130 頃 -1156）であり，キリスト教を庇護していた君主だったが，「スウェーデンの公が司教を伴って」(свьискеи князь съ епископомь) の「公」(князь) がスヴェルケル王を指しているかどうかについては，他の史料がなく定めがたい。また，襲われた大商人たち (гость) は，3 隻の船 (лодия) に分乗しておそらく外国からの商品を積んでノヴゴロドへ向かう途中だったと考えられる。150 人が殺害されたくらいだから，この船は外洋航海用の大型船だったにちがいない。

376）「聖母の日から冬至までだった」の「聖母の日」(Госпожин день)（госпожа（女主人）すなわち聖母のこと）は 8 月 15 日の聖母就寝祭 (Успение Богородицы) を指している。「冬至」と訳した корчюн は，корочун, карачун, крачун などの語形があり，一年の内で最も昼が短い日，すなわち冬至（当時は 12 月 12 日に当たる）を指す民衆語 [Фасмер Т. 2: С. 336 (корочун)]。この民間の語を用いたのは，すぐ下に「キリスト降誕祭」(Рождество) の語を使っている（下注 379）ことから，時系列における厳密さを示すためと考えられるが，同時に，年代記記者の暦に対する強い関心をうかがわせる。このことは，この記者が『暦法研究』(Учение о числах) を書いたキリク (Кирик) であること（上注 277）の傍証になるのではないか。

377）本年代記で何度も記されている秋の増水のこと。

378）ここは，次の異読がある。*Км* безъ вѣсти занесе; *Ак* снесе; *Сн* отинудь бе[з] знатбе занесе。

379）この段落の記事は，ソフィア地区と商業地区とを結ぶ，ヴォルホフ川に架けられていた「大橋」(великий мост) とその橋脚 (городня) の破壊についての記述と考えられる。

同じ年，スヴャトポルク [D114] は，ノヴゴロドで結婚した。モラヴィア (Морава) から妻を連れてきた[380]。キリスト降誕祭と主の洗礼祭のあいだ[381] のことだった。

同じ年, コレラ人[382] (Корела) がエミ人 (емь) を攻める遠征を行った。かれら〔コレラ〕は〔撃退されて〕逃げ帰った。〔コレラ人の〕2 隻の小舟 (лоива) が打ち壊された[383]。

6652(1144) 年。

ヴォルホフ川に架ける橋をすべて作った。旧い〔橋〕の代わりにすべてを新しくした[384]。

380）「モラヴィアから妻を連れてきた」(приведе жену из Моравы) の「妻」とは，従来の系譜学では，オロモウツ公オタ二世黒公 (Ota II. Černý)（在位 1091-1110，1113-1126 年）の娘で，当時モラヴィアを支配していたオロモウツ公オタ三世デトレブ (Ota III. Dětleb)（在位 1140-1160）の姉にあたるエウフェミア (Eufemie Olomoucká) とされてきたが，ドンブロフスキによれば，かの女の生年は史料では 1115 年であり，結婚時の年齢が 30 歳ほどになり，当時の王族通婚の慣習に外れていることから，結婚相手はエウフェミア本人ではなく，かの女の逸名の妹ではなかったかと推定している [Домбровский 2015: C. 160-162]。

381）「キリスト降誕祭と主の洗礼祭のあいだ」(межи Рожествомь и Крещениемь) の「キリスト降誕祭」(Рожество) は 1143 年 12 月 25 日に，「主の洗礼祭り」(Крещение) は 1144 年 1 月 6 日にそれぞれ相当する（[Домбровский 2015: C. 159-160] も参照）。なお，*Лвр*6651(1143) 年の項の最後の記事では，その年の秋から冬にかけて，スヴャトポルク [D114] の兄弟イジャスラフ [D112:I]，がスーズダリ，スモレンスクを巡行して，ノヴゴロドに立ち寄り，そこで「冬を過ごした」とあるが，これはスヴャトポルクの結婚式に参列するためだろう。

382）コレラ人 (корела) は。バルト・フィン族の部族で，カレリア地峡からラドガ湖北岸一帯に居住していた。現在のプリオゼルスク (Приозерск) に，コレラ (Корела) と呼ばれた拠点地（城砦）があった。現在のカレリア人 (карелы) の祖先である可能性が高い。その名称は，1066 年に年代判定されているノヴゴロド白樺文書の No.590 に記されており，年代記ではこの箇所が初出。

なお, *Ин*6656(1148) 年記事によれば, 1149 年初め（2 月頃）にイジャスラフ [D112:I] がノヴゴロド人，プスコフ人を動員して行った対ユーリイ [D17] 討伐の遠征（下注 428 参照）には，「コレラ人」も遠征部隊に参加しており [ПСРЛ Т. 2: Стб. 370]，そのことから，コレラ人の一部は，1143 ～ 1148 年の期間にノヴゴロドの支配下に入り，貢税，徴兵に応ずるようになったと考えられる。

383）エミ人の居住地は不明だが，ノヴゴロドの領地との頻繁な接触から見て，カレリア地峡の南のラドガと隣接する一帯だったのかもしれない。その場合，コレラ人はラドガ湖を南下して（小舟を使っている）エミ人への掠奪遠征を行ったと考えられる。この事件については，おそらく当時エミ人と接触があった（上注 369）付属都市ラドガからもたらされた情報が記されたものだろう。

384）これは，ヴォルホフ川に架けられていた大橋 (Великий мост) のこと。前年 1143 年の秋にその橋脚が氷塊で破壊され流されたことから（上注 377）架け替え工事を行ったのだろう。ちなみに，1133 年にも架け替えが行われている。

同じ年，丘[385] (хълмъ) の聖エリヤ教会[386] が焼けた[387]。

同じ年，ノヴゴロドの聖ソフィア教会の啓蒙所のすべてに尊い〔聖像画を〕描いた。大主教ニフォントによるものである。

その頃，ネジャタ・トヴェルデャティチ (Нѣжата твердятиць) に市長官職が与えられた[388]。

同じ年，ノヴゴロドの市場区 (Торговище) に石造りの聖母教会が完成した[389]。

同じ年，聖なるニフォント大主教が，わたしを司祭に叙任した[390]。

6653(1145) 年。

丸々 2 週間ものあいだ，あたかも〔雷鳴のような〕音が鳴り響いていた[391]。収穫前は異様に暖かかった。その後雨が降り続いた。冬になるまでずっと晴れた日は見ることがなかった。そして，穀物は多かった。干し草は作れなかった。この〔年の〕秋は，一昨年よりも水は多かっ

385）「丘」(Холм) は商業地区スラヴェンスキイ区 (Славенский конец) の南東部分の名称。1134 年の火災の記事を参照（上注 216）。

386）このスラヴェンスキイ区の聖エリヤ教会 (церкы святого Илье) については上注 51 を参照。*H1-M* 記事によれば，1198 年に石造りの教会として定礎され，1202 年に完成している。ここで燃えたのは，その前身の木造の聖堂だろう。

387）本記事は *H1-M* のみの記事だが，*H1-M* の編集段階で削除されたものか，あるいは *H1-M* 成立（*Сн* 写本作成の）の過程で付加されたものか，両方の可能性がある。

388）このネジャタ (Нѣжата) については，市長官表 Б に Нѣжата Твердятич の名がある。上注 297 を参照。

389）この「石造りの聖母教会」(церковь камяна святѣи Богородици) については，6643(1135) 年記事で，フセヴォロド [D111] と大主教ニフォントが市場区に定礎したとあり（上注 247），9 年かかってようやく完成したことになる。

390）この記事は，*H1-M* のみにあり，*H1-M* の諸写本にはない。年代記記者である「わたし」についての個人的な内容であることから，*H1-M* 編者が削除したと考えられる。

この記事は，この年代記記者が「わたし」が，『暦法研究』『問答集』の著者キリクであること（上注 277, 374，下注 391）の傍証を提供してくれる。すなわち，かれの『暦法研究』(Учение о числах) によれば，キリクはこの著作が書かれた 6644(1136) 年の時点で，「聖なる聖母教会の輔祭にして聖歌隊長」(диакон, доместикъ церкви святыа Богородица) [Мильков В.В., Симонов Р.А. 2011: С. 318] であったことから，この 1144/45 年に「わたしを司祭に叙任した」(постави мя попомь) のは，時系列からみても自然である。

391）ここは難読箇所で，*Сн, Км* яко искря гуце: *Ак*. яко истря гуче となっている。ただし，この箇所はすべての写本で分かち書きされずに筆写されており，この分綴は底本の校訂者によるものである。底本に拠って邦訳は「燃えている火花のように」とあり，各国語訳（英独ポ）も同様の解釈をしている。しかし，『11－17 世紀ロシア語辞典』では，この箇所を яко и скрягуце と読んで，скричи, скрягу の動詞の変化形（能動現在分詞）と解釈し，греметь, грохотать の訳語を与えている [СлРЯ XI-XVII, Вып. 25, С. 4, 23]。ここでは，収穫期（8 月頃）に途絶えることなく雷雨が発生して雷鳴が響き続けたと理解するのが内容的，文脈的に自然であることから，後者の解釈を採った。

た[392]。ところが，冬には大雪はなく，晴れた日もなかった。それが 3 月まで〔続いた〕。

同じ年，二人の司祭が溺れ死んだ。主教〔ニフォント〕は，かれら二人〔の遺体を〕前に歌うことを許さなかった[393]。

同じ年，スミャディン (Смядин) でボリス [14] とグレーブ [15] の石造りの教会が定礎された。スモレンスク (Смолнеск) でのことである[394]。

その年，すべてのルーシの地はガーリチ (Галиць) を攻める遠征をした[395]。そして，多くの領地を荒廃させたが，ひとつの城市も占領できなかった。そして帰還した。ノヴゴロドから，キ

392）「一昨年より水は多かった」(а вода бысть болши третьяго лѣта) の「一昨年の水」とは，1143 年のヴォルホフ川の大水〔洪水〕（上注 375）のことを指している。

393）溺れ死んだ司祭の葬礼については，例えば，教義解説書『サルディカ公会議規則』«Правило Сардинского збора» の 32 項には，「もし司祭あるいは輔祭が溺死し場合には，祭服を着せて埋葬し，かれの奉事を行うのが然るべきである」(Аще поп утонеть или дьяконъ, достоить в ризах погрести и правити по немъ. <...>) で始まる条項があり，司祭が死んだ状況に応じた葬礼の方法が詳しく記されており [Смирнов 1913: С. 93]，聖職者の溺死，縊死，殺害などの不慮の死の際の葬礼について，詳細な規則が定められていたことがわかる。「かれらの〔遺体を〕前に歌う」(над ними пѣти) とは，埋葬式 (отпевание, погребение) のことを指しており，『聖事経』(Требник) によれば通常の司祭の埋葬式は聖堂内で遺体を前に行われることになっていた。この記事で，溺死した二人の司祭について，通常行われるべき埋葬式が主教ニフォントによって禁止された事態は，上記の『規則』が不慮の死の聖職者の葬礼について寛大なことを考慮すると，何か特別な事情があった異常な事態だったと考えられる。その詳細は不明だが，それゆえに記者が注目して書き記したのだろう。

この記事の記者は，教会規則における細部にわたる，あるいは例外的な事例への関心から見て，『問答書』(Вопрошание) の著者キリクである可能性が高い（上注 277, 374,388 参照）。例えば，キリクは『問答書』の第 38, 51, 52 項において，様々なケースにおける埋葬式の執行について，主教ニフォントに対して質問を行っている［宮野 2022：100，103 頁］。

394）*Н1*6646(1138) 年記事で言及されているスミャディンの修道院の木造教会を（上注 319），この時石造りの教会に改築したと考えられる。*Ин*6705(1197) 年記事に，スミャディンのボリス＝グレーブ教会について，「この教会はかれ〔ダヴィド [J3〕の父ロスチスラフ [D116:J] が創建した」[ПСРЛ Т. 2: Стб. 703] とあり，ロスチスラフのスモレンスク公在位は 1125 ～ 1154 年であることから，この 1145 年の定礎のことを指しているのではないか。ただし，完成（献堂）についての記録は年代記にはない。

395）この遠征が，キエフ大公フセヴォロド [C41] が組織した大遠征であったことは，*Ин*6652(1144) 年記事に詳しい。遠征の原因は，フセヴォロドの息子スヴャトスラフ [C411:G] がヴラジミル＝ヴォルィンスキイの公座に就いていたことに対して，ガーリチ公ウラジミルコ [A121] が異議を唱えたことにあり，フセヴォロド [C41] は，イーゴリ [C42], スヴャトスラフ [C43], ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] などの同族だけでなく，ヴャチェスラフ [D16]，イジャスラフ [D112]，ロスチスラフ [D116] などモノマフ一族の諸公も動員した大規模なものだった。なお，この遠征は 1144/45 年冬に出陣し，1145 年初めに遠征隊は帰還したと考えられる。

エフ人への援軍として，軍司令官ネレヴィン[396] (воевода Неревин)〔の指揮下に〕遠征した。そして〔遠征隊は〕和解して帰還した[397]。

6654(1146) 年

ルーシでフセヴォロド [C41] が逝去した。7 月だった[398]。

そして，かれの兄弟イーゴリ [C42] が〔キエフの〕公座に座した。2 週間座していた[399]。〔キエフの〕人々はかれに憤激した。そして**人々は**，ペレヤスラヴリ (Переяславль) のイジャスラフ･ムスチスラヴィチ [D112:I](Изяслав Мьстиславиц) に〔そのことについて〕伝えた。そして，〔イジャスラフは〕軍兵とともに〔キエフへ〕やって来た。戦いが起こった。神はイジャスラフ [D112:I] を助けた[400]。

そして，イジャスラフ [D112:I] が〔キエフの〕公座に座した。そして，イーゴリ [C42] 自身

396）ネレヴィン自身は市長官にはなっていないが，息子のサヴィド (Завид) が 1175 年から三度市長官職に就いており [Янин 2003: C. 504]，明らかに市長官を輩出するような一族の上級貴族である。*Н1*6675(1167) 年の記事によれば，かれはノヴゴロドの内争で，反スヴャトスラフ公 [J4] 派の市民の手で殺されている。

397）「そして和解して帰還した」(*Км, Ак* възвратишася (*Сн* воротишася) с любовию) の主語は明示されていないが，キエフ（ルーシの地）で組織された遠征隊全体を指すと見るべきだろう。「和解して」(любовью) については，*Ип*6652(1144) 年記事に詳しい経緯が記されている。ガーリチ公ウラジミルコ [A121] は，大遠征隊がガーリチに迫ったことを受けて，イーゴリ [C42] を仲介にして，遠征の総指揮者であるキエフ公フセヴォロド [C41] に和議を求め，大金を支払うことによって，講和に持ち込んだ。双方が戦争をせずに和を結んだことを，「和解をして」(любовью) とここでは表現している。

398）*Ип*6654(1146) 年記事によれば，フセヴォロド [C41] は 8 月 1 日（1146 年）に没しているが [ПСРЛ Т.2 : Стб. 321]，*Лвр* の同年の事では死の日付は 7 月 30 日になっている。どちらか定めがたいが，リトヴィナとウスペンスキイは 7 月 30 日がより確実性が高いとしている [Литвина，Успенский 2008: C.116-118]。*Ип* の 1194 年の息子スヴャトスラフ [C411:G] の死の記事には，「かれの父フセヴォロド [C41] はマカバイの聖人たちの祭日に神のもとに召された」とはっきり記されており，「マカバイの聖人たち」の祝祭日は 8 月 1 日であることから，*Ип* の日付が正しいだろう。本 *Н1* の「7 月」は，*Лвр* 系列の資料に依拠したことによると思われる。

399）*Ип* 及び *Лвр*6654(1146) 年記事によれば，フセヴォロド [C41] が没した（前注）翌日の 8 月 2 日（1146 年）にイーゴリ [C42] がキエフの公座に就いたと考えられ [ПСРЛ Т.2 : Стб. 321-322]，その後キエフに攻め寄せてきたイジャスラフ [D112:I] と戦い，8 月 13 日の戦闘に敗れて，その「4 日目」，すなわち 8 月 16 日に沼で捕らえられている [ПСРЛ Т.2 : Стб. 327][ПСРЛ Т.1 : Стб.313]。8 月 2 日～ 8 月 16 日の期間は 14 日で，ちょうど 2 週間に相当する。

400）この戦いの経緯については，*Ип*6654(1146) 年記事に詳しい [ПСРЛ Т.2 : Стб. 322-328]。

は戦闘後の 5 日目に捕まり [401], 牢舎へ投ぜられた。そして, 秋には [402],〔イーゴリは〕剃髪〔修道士となること〕を強く懇願して [403]，剃髪した。

その頃，**ノヴゴロドで** [404] コンスタンチン・ミクーリニチ [405] (Костянтин Микулиниць) に市長官職が与えられた。ネジャタ [406] (Нѣжана) からは〔市長官職が〕取り上げられた。

同じ年, 4 つの教会が建設された。内城の (в городѣ) 殉教聖人ボリス [14] とグレーブ [15]〔教

401）イジャスラフ [D112:I] が戦闘を制してキエフに入城したのが，*Ип, Лвр* によると，1146 年 8 月 13 日の火曜日のことであり, *Ип* 及び *Лвр*6654(1146) 年記事によれば「イーゴリは 4 日目に沼で捕えられ」(Игоря же по 4-хъ днехъ емше в болотѣ) とあることから，本記事とほぼ対応しているが，4 日目が「5 日目」になった理由は不明。

402）イーゴリ [C42] が得度剃髪した時期については, *Лвр*6654(1146) 年記事に「1 月 5 日」（1147 年）と記されており [ПСРЛ Т. 1: Стб. 314]，記事の具体性からみて，これが事実に対応しているだろう。*H1* の「秋に」(а на осень) の記述は，伝聞にもとづく誤解によるものではないか。

403）ここは異読があり，*Сн* вымолися постричься; *Км, Ак* вымолиша и пострищися となっている。*H1-C* では，イーゴリが剃髪すること自ら懇願したという意味になるが，*H1-M* 写本では，周りの人々がイーゴリに剃髪することを強く要請したことになり，意味が異なる。

*Лвр*6654(1146) 年によれば,「イーゴリ [C42] は牢舎で, イジャスラフ [D112:I] がかれの兄弟〔スヴャトスラフ [C43]〕を攻めることを聞いて, イジャスラフ [D112:I] に使者を遣って,「わたしは剃髪したい」と言って懇願した」(Игорь же слышавъ в порубѣ сыи. оже идет Изяславъ на брата его. Домолися, пославъ къ Изяславу, глаголя: «Еда бысть ся постриглъ».) とある。*Ип*6654(1146) 年記事でも「さて，イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] がキエフに戻ってくると，イーゴリ [C42] は地下牢の中で病みついており，病状は甚だしく重かった。イーゴリ [C42] はイジャスラフ [D112:I] に使者を遣って，依頼と拝礼を行って, こう言った。「兄弟よ。わしはひどく病んでいる。剃髪することを許可してほしい」(и пришедъ Изяславъ Мьстиславичь къ Киеву. и бѣ Игорь разболѣлъся в порубѣ и бѣ боленъ велми. и присла Игорь къ Изяславу. моляся и кланяяся река тако. брат се боленъ есми велми. а прошю у тебе пострижения) となっており，二つの年代記はともに，イーゴリが自ら剃髪することを懇願したことになっている。これを踏まえるなら，*H1-C* の読み（訳文に反映）が本来であり，*H1-M* の読みは後代の改変によると考えるべきだろう。

404）「ノヴゴロドで」(в Новѣгородѣ) は *Км, Ак* にあるが，*Сн* にはない読みで，必ずしも必要でないことから，*H1-M* 編集段階における付加だろう。

405）コンスタンチンについては上注 255 を参照。ネレフスキイ区の貴族で，1136 年 2 月～ 1137 年 3 月まで市長官職にあり，今回は再任である。

406）ネジャタは 1144 年に市長官職に就いたので（上注 386），1146 年に交替したとすればほぼ 2 年間その職にあったことになる。

会〕[407]。丘の[408](на Холмѣ), 預言者聖エリヤ[409]〔教会〕と聖使徒ペトロとパウロ〔教会〕[410]。聖**廉施者**コスマスとダミアノス[411]〔教会〕である。

6655(1147) 年。

秋に，スヴャトポルク [D114] は，ノヴゴロドの全領地とともに，ユーリイ [D17] を攻める遠征をおこなった。**遠征して**スーズダリを攻めようとしたのである[412]。〔しかし〕,〔ぬかるみの〕悪路のためにノーヴィイ・トルグ[413] (Новыи Торг) に戻って来た。

407）「殉教聖人ボリスとグレーブ教会」(церковь святую мученику Бориса и Глѣба) については，1167 年の記事に，裕福な大商人ソトコ・スィティニチ (Сотко Сытинич) によって石造りのボリスとグレーブ教会が定礎されたとあり，これは内城（原文は в городѣ/градѣ で Кремль, Детинец のこと）の南東城壁にあったボリス＝グレーブ櫓 (Борисоглебская башня)（15 世紀）の向かいに位置していた。この教会は，おそらく，本記事の 1146 年に建てられた木造のボリスとグレーブ教会のあった場所に，石造りで再建されたと考えてよいだろう [Великий Новгород. Энциклопедический словарь: С. 520]。

408）「丘」(Холм) はスラヴェンスキイ区 (Славенский конец) の南東部分のこと（上注 216）。なお,「丘の」(на Холмѣ) の句は,「ペテロとパウロ教会」の直後にあるが, この教会だけの位置の限定なのか,「エリヤ教会」も含むのかは統語法だけでは分からない。しかし，1144 年の *H1-C* だけの記事に,「丘の聖エリヤ教会が焼けた」（上注 384）の一文があり，本記事はこの焼失したエリヤ教会が木造で再建されたことを言っている可能性が高いことから,「丘の」の句は二つの教会にかかっていると解釈できる。

409）この「預言者エリヤ教会」(церковь святого пророка Ильи) については上注 51, 384 を参照。その位置については［ヤーニン 2001：8-9 頁］の地図を参照。

410）この「ペテロとパウロ教会」(церковь святую апостолу Петра и Павла) の位置については［ヤーニン 2001：8-9 頁］の地図を参照。

411）「聖コスマスとダミアノス」(святая Козма и Дамиан) は 3 世紀のギリシアの聖人で，*Сн* では святая безмздьника と，聖人の称号である безмездник の語が付されている。これは,「銀を持たないもの」を意味する ανάργυροι をスラヴ語訳したもの。бессребреник と文字通り訳されることもある。日本ハリストス正教会では「廉施者（れんししゃ）」の訳語があるのでこれを採った。безмездник の語が *H1-C* での付加であるのか，*H1-M* における削除であるのか判断は難しい。

なお，史料によれば，ノヴゴロドには二つの「コスマスとダミアノス教会」があり，それぞれネレフスキイ区のコズモデミアンスカヤ通り (Козмодемьянская улица) とほぼこの通りと並行するホロービア通り (Холопья улица) に位置していた。本記事の教会がどちらの教会（前身の木造教会）に相当しているかを定める手掛かりはない [Великий Новгород. Энциклопедический словарь: С. 524]。

412）1147 年にキエフ公イジャスラフ [D112:I] は，ダヴィドの二人の息子ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] と同盟してユーリイ討伐の遠征を計画していたが，かれらの裏切りによって計画が進まず，弟のスモレンスク公ロスチスラフ [D116:J] に使者を遣って,「そちらではノヴゴロド人とスモレンスク人たちに命じて，ユーリイの動きを抑えさせよ」と指示を二度にわたって出している [ПСРЛ Т. 2: Стб.347, 359]。1147 年秋のノヴゴロド公スヴャトポルク [D114] によるこのスーズダリ遠征は，この指示に従って行われたものと推察され，その場合，本格的な対決ではなく，ユーリイのキエフへの攻撃を封じるための防御的なものだった可能性が高い。

413）ノヴゴロドの付属城市ノーヴィイ・トルグについては上注 331 を参照。

同じ年, 冬に, **ノヴゴロドの**[414]市長官コンスタンチン (Костянтин) が逝去した[415]。スーディロ・イヴァンコヴィチ (Судило Иванкович) に再び〔市長官職が〕与えられた[416]。

その頃, 典院 (игумен) アントーニイ[417] (Антонъ, Онтонъ) が**逝去した**[418]。同じ年, アントーニイの後継として，アンドレイ (Андрѣи) に典院の位が与えられた[419]。

同じ年，キエフ人がイーゴリ・オリゴヴィチ公を殺害した[420]。

6656(1148) 年。

雹**と雷**[421]をともなう雨が降った。6 月 27 日の日曜日のことだった[422]。落雷でズヴェリツィン修道院 (Звѣрицин монастырь) の聖母教会が焼けた[423]。

同じ年，大主教ニフォントがスーズダリへ行った。和議 (мир) のために，ユーリイ [D17] の

414）この *Км, Ак* における「ノヴゴロドの」(новгородчкои/новгородскыи) の付加については，上注 402 を参照。

415）コンスタンチンは前年の 1146 年に市長官に再任されていることから（上注 403），1147/48 年冬に没したとすれば，市長官職に就いていたのは 2 年ほどになる。

416）スーディロについては，上注 356 参照。「再び」とは，すでに 1141-44 年に市長官職に就いており，今回は再任であることによる。

417）ノヴゴロドのアントーニイ修道院 (Антоньев монастырь) の創建者「ローマ人アントーニイ」(Антоний Римлянин) のこと。本年代記には, かれが修道院に聖母教会を 1117 年に定礎（上注 117）し，1119 年に完成（上注 132）ことが記されている。

418）異読がある。*Км, Ак* преставися（逝去した）であるのに対して，*Сн* умре（死んだ）である。

419）このアンドレイについては，16 世紀に書かれた『アントーニイ伝』では，「アントーニイの弟子で修道司祭。また〔アントーニイ〕の聴罪司祭で，かれのあと修道院の典院となった」[БЛДР Т. 13: С. 8] とされている。なお，この『アントーニイ伝』では，かれの死の年代は 6650(1142) 年の 8 月 3 日とされており，本年代記の没年と異なっている。

420）すでにスヒマ修道士となって，キエフ城内の聖テオドロス修道院で生活していたイーゴリ [C42] は，オレーグ一族への怒りにかられたキエフ人の暴動の中で，1147 年 9 月 19 日に殺害されている。この事件については，*Ип*6655(1147) 年記事に詳しく [ПСРЛ Т. 2: Стб. 349-354],『イーゴリ公殺害物語』として独立の作品として扱われている。なお，9 月の事件の記述が，本年代記では 6655 年の記事の最後に置かれているのは，ノヴゴロドではなくルーシ（キエフ）の事件であることから，付加的に扱われたということか。

421）「と雷」(и громомъ/громъ) は *Км, Ак* のみの読みで，*Сн* にはない。雷 (гром) については次に述べられるので，これは *H1-M* 編集段階での付加であることは明らかである。

422）1148 年の 6 月 27 日は確かに日曜日に相当する。

423）「ズヴェリツィン修道院」(Звѣрицин монастырь) は，ソフィア地区側の外壕の北，ヴォルホフ川河岸に位置している。ソフィア大聖堂からは北におよそ 1.5km 離れている。地名は Зверинец, Зверин などとも表記され，この場所に「狩場」があったことに拠っている。当時木造だった「聖母教会」は「聖母の庇護（ポクロフ）」(Покров Богородицы) に献堂されたもの。この修道院は 1467 年に石造りに改築され，ズヴェーリン・ポクロフスキイ修道院 (Зверин-Покровский монастырь) として現存している [Великий Новгород. Энциклопедический словарь: С. 304-305]。［ノヴゴロド第一年代記 (4)：注 126］も参照。

ところへ〔行った〕。ユーリイ [D17] は和解 (с любовию) を受け容れた。そして，〔ニフォントは〕大いなる献堂式によって，聖なる聖母教会 (церковь Богородия) を献堂した[424]。そして，〔ユーリイは〕ノーヴィイ・トルグ人 (новоторжьци) を全員解放した。大商人たちは害されることなく，かれらを，名誉をもってノヴゴロドへ送り返した[425]。しかし，〔ユーリイは〕和平 (мир) を与えることはなかった[426]。

同じ年の秋，イジャスラフ [D112:I] は，キエフから自分の息子ヤロスラフ [I2] を〔公として〕派遣した。そして，ノヴゴロド人は〔ヤロスラフを〕受け入れた。一方，〔イジャスラフは〕スヴャトポルク [D114] を，かれ〔スヴャトポルク〕の悪事ゆえに〔ノヴゴロドの公座から〕退位させ，かれにヴラジミル (Владимирь)〔＝ヴォルィンスキイ〕を与えた[427]。

同じ冬，ムスチスラフ [D11] の息子イジャスラフ [D112:I] が，キエフからノヴゴロドへやっ

424）これは，ニフォントがスーズダリで「聖母教会」(церковь Богородия) の献堂式を行ったと解釈でき，この「聖母教会」はスーズダリで最も古い「聖母生誕教会」（Богородице-Рождественский собор としてスーズダリ内城に現存）と推定される。その創建は，11 世紀初頭のウラジーミル・モノマフの時代だが，この 1148 年の時点で大規模な改築があり，ニフォントは立ち会ったという説が出されてきたが，聖堂の考古学的研究からは改築説は否定されている [Загревский 2009]。いずれにせよ，「大いなる献堂式によって」(великым священием) 献堂されたのだから，城市の中心的な聖堂の建設（改築）にかかわることは間違いない。

なお，『キエフ洞窟修道院聖僧伝』(Киево-Печерский патерик) の第 4 話の最後の節で，修道院の「聖母就寝教会」(Успенская церковь) について語る中で，ウラジーミル・モノマフがこの教会の縦横高さがこれと同じ聖堂をロストフに建て，このことを父から聞いた息子のユーリイはスーズダリに同尺 (в меру) の聖堂を建てたが，〔この二つの聖堂は〕数年のうちに完全に崩壊してしまった。「長年存在している聖母教会はこれ〔洞窟修道院の聖母就寝教会〕だけである」[БЛДР Т. 4: С. 310] という記録がある。これによれば，ユーリイはスーズダリに「聖母就寝教会」を建設したことがあると解釈でき，1148 年の献堂式はこの教会のことを言っているかもしれない。

425）この，ユーリイ [D17] によるノーヴィ・トルグ人とノヴゴロドの大商人 (гости) の解放とは，1139 年にユーリイがノーヴィ・トルグを占領したとき（上注 331）に捕虜としてスーズダリへ連行し，拘束していた者たちを指しているだろう。

426）この段落の，1148 年夏頃の主教ニフォントのスーズダリ行き使節団の使命は，前年の 1147 年秋に行ったノヴゴロド公スヴャトポルク [D114] の遠征の相互の損害などについての事後交渉を行い，和 (мир) を結ぶことにあった。これは，キエフ公イジャスラフ [D112:I] とスモレンスク公ロスチスラフ [D116:J] の，当時の対ユーリイ全面対決の方針に反していることから，スヴャトポルク [D114] が，おそらくノヴゴロドの利益のために独断決め，ニフォントを派遣したと考えらえる。結果的に，ユーリイは，以前から拘禁していた商人たちは解放したものの，スヴャトポルクを信用できなかったのだろう，和議（互いに戦争を行わないという協定）を結ぶことはしなかった。

427）この 1148 年秋に行われたとされるノヴゴロド公位の交替について，*Ип*, *Лвр* には記述がない。交替の理由の「かれ〔スヴャトポルク〕の悪事ゆえに」(злобы его ради) の「悪事」は，直前の記事にある，スヴャトポルク [D114] がキエフ公イジャスラフ [D112:I] の方針に反して，ユーリイ [D17] と和を結ぼうとしたこと（上注 424）を言っているのだろう。イジャスラフは，将来のノヴゴロド人を動員した大規模な対ユーリイのロストフ＝スーズダリ遠征に備えて，影響力を行使できる自分の息子（おそらく年少だっただろう）をノヴゴロドの公座に据えたと考えられる。

てき来た。そして，ユーリイ [D17] を攻めるために，ロストフへ向けて，ノヴゴロド人とともに行った〔遠征した〕。ユーリイ [D17] の〔支配下の〕者たち[428] を多数捕獲した。〔遠征軍は〕ヴォルガ川沿いの 6 つの城市を占領した[429]。ヤロスラヴリ (Ярославль) の手前まで〔の一帯を〕荒廃させた。〔捕虜として〕捕まえたのは 7000 人だった。そして**悪路のために**引き返した[430]。

6657(1149）年。

ノヴゴロド大主教ニフォントがルーシへ行った[431]。イジャスラフ [D112:I] とクリメント (Клим) 府主教に呼ばれたのである。なぜなら，イジャスラフ [D112:I] はルーシの領地の主教たちとともに，かれ〔クリメント〕を帝都に派遣することなしに，〔府主教に〕叙任したのであり，〔これについて〕ニフォントはこう言っていた。「〔クリメントが府主教に〕なったのは然るべきことではない[432]。なぜなら，〔クリメントは〕大いなる公会議 (великии собор) の祝福を受けておらず，叙任〔の儀式〕もなかったのだから」[433]。かれ〔イジャスラフ〕は，かれ〔ニ

428）この「ユーリイの支配下の者たち」(людье Гюргево) とは，ヴォルガ沿岸のロストフ＝スーズダリ公（当時はユーリイ）の領地内に住み，公への貢税や賦役を担っているいわゆる領民 (смердь) を主に指している。

429）「占領して」(взяша)，掠奪と住民の捕獲を行った 6 つの城市 (город) は名指されていないが，当時存在したヴォルガ沿岸城市としては，ウーグリチ (Углич) やクスニャチン (Кснятин) を挙げることができる。

430）この段落の大規模な掠奪遠征について，*Ип*6656(1148) 年記事によると，1149 年初めにイジャスラフの遠征部隊は，スモレンスクの弟ロスチスラフ [D116:J] のもとに行き，そこから，ノヴゴロドへ行った（1149 年 2 月）。そして，そこでノヴゴロド人，プスコフ人，コレラ人の部隊を率いると，ヴォルガ川支流メドヴェヂツァ川で，ロスチスラフ軍と合流して，ヴォルガ川両岸のスーズダリ領地を掠奪しながら進軍し，モロガ川河口まで到達した。そして，その場所からノヴゴロド人とルーシ人をヤロスラヴリへと派遣して掠奪させたが，すでに 3 月 27 日の融氷・融雪期になっていたため（結氷した道や川面を橇で進んで，兵員，輜重，掠奪品，捕虜を大量，迅速に輸送することが難しくなる），部隊は引き返した [ПСРЛ Т. 2: Стб. 370-372]。

431）年代記の時系列から見て，ニフォントは，1148 年夏頃のスーズダリへの使節行（上注 424）からノヴゴロドへ戻った直後の 1148 年夏～秋に，キエフに呼び出されたと考えられる。

432）「然るべきことではない」(не достоинѣ есть) とは，教会法に違反しているということ指す定型表現（上注 286 参照）。

433）同様の内容が *Ип* に詳しく述べられている。それによると，1146 年 8 月にキエフの公位を奪取したイジャスラフ [D112:I] は，1147 年夏（7 月）に修道士だったスモレンスク人のクリメント (Клим-Климент Смолятич) をルーシの府主教に任命し，その後キエフにルーシの地の主教たちを招集すると，自分たちの会議決定だけで，クリメントの府主教叙任を宣言した（1148 年）。この措置に対して，ノヴゴロド主教ニフォント（とおそらくスモレンスク主教マヌイル）は「〔帝都の〕総主教抜きで，主教たちが府主教を叙任してよいなど，教会法にはない」[ПСРЛ Т. 2: Стб. 341] と言って反対した。しかし，主教たちはキエフにあった聖クレメンスの聖骸によってクリメントの叙任儀式を行った。なお，本記事では，6657(1149）年の項に以上の事件の記述がとりまとめて記述されている。

フォント〕をすぐに〔キエフから〕立ち去らせることをせず，かれ〔ニフォント〕を洞窟修道院に留置 (посади) した。それは，ユーリイ [D17] の〔キエフ〕到来のときまで続いた[434)]。

同じ年，ユーリイ [D17] がキエフを攻めるために〔スーズダリから〕到来した。スヴャトスラフ・オリゴヴィチ [C43] に呼ばれたのである[435)]。ペレヤスラヴリで戦闘があった。ユーリイ [D17] の奸策によってペレヤスラヴリ人は降伏した[436)]。ユーリイ [D17] はキエフ〔の公座〕に座した。他方イジャスラフ [D112:I] はヴラジミル〔・ヴォルィンスキイ〕へと逃げた[437)]。

同じ年，ノヴゴロドの徴税人 (даньници новгородстѣи) が少人数で行った[438)]。〔スーズダリ公〕

434）クリメントの府主教叙任に反対したニフォントの「留置」については，*Ип, Лвр* には記されていない。本記事によると，ニフォントは 1148 年夏～秋から，ユーリイ手長公 [D17] が 1149 年 9 月に再びキエフ公位を奪い返してかれを解放するまでの約 1 年間，洞窟修道院内に拘禁されていたことになる。

435）この段落には，1149 年 7 月～ 8 月のキエフ公位交替の政変がとりまとめて記されている。ユーリイ [D17] は「スヴャトスラフ [C43] に呼ばれて」(позванъ Святославом) キエフ遠征をしたとあるが，スーズダリ公ユーリイも，ノヴゴロド＝セヴェルスキイ公スヴャトスラフ [C43] もそれぞれがキエフ公イジャスラフ [D112:I] と対立しており，二人は合流してイジャスラフ討伐遠征を行った。かれらは，その途中でポロヴェツ人の援軍と合流し，まずペレヤスラヴリへ向かった。ユーリイ等の進軍を聞いたイジャスラフは，キエフからペレヤスラヴリ防衛のために駆けつけている。

436）ユーリイは，1149 年 8 月 23 日のペレヤスラヴリ郊外の戦いで，イジャスラフの部隊をキエフへと敗走させ，翌日にペレヤスラヴリに入城している。「ユーリイの奸策により」(научением Гюрговым) とは，その戦闘の際に，イジャスラフに対して，自分がペレヤスラヴリを取る代わりにキエフ支配を認める提案をするなど，懐柔策を弄したこと [ПСРЛ Т. 2: Стб. 379-380] を言っているのではないか。

437）ユーリイ軍はペレヤスラヴリ入城（1149 年 8 月 24 日）の 3 日後にキエフへと進軍した。イジャスラフは，キエフ人がユーリイと戦う意思がないことを知ると，キエフの公座を放棄し，府主教クリメントを伴って，ヴラジミル＝ヴォルィンスキイへと退去した [ПСРЛ Т. 2: Стб. 382-383]。

438）徴税人 (данники) は，貢納者の反抗・反乱や地方領主・豪族などによる妨害にそなえて，武装した部隊を編成して遠征するのが通例だった。*H1-M*6579(1071) 記事 [№. 207] のヤーニのエピソードを参照。ここでは，その部隊が「少人数」編成だったということ。

また，どこに「行った」(идоша) かについて記されていないが，「ペチョーラの貢税」(дани печерьскые)[ПСРЛ Т. 1: Стб. 302] について，1141 ～ 1142 年にユーリイ [D17] が，息子のロスチスラフ [D171] をノヴゴロド公に据えたときに，その権利をユーリイ一族が奪い取り，その後ムスチスラフ一族の諸公（スヴャトポルク [D114]，ヤロスラフ [I2]）がノヴゴロド公となっても，この徴税権は引き渡さなかったことが知られている [Янин 2013: С. 63]。この経緯を考慮に入れると，当時のノヴゴロド公スヴャトポルク [D114] は，ペチョーラ地方に徴税部隊を派遣した可能性がある。

ユーリイ [D17] は小人数で行ったことを聞きつけると[439]，ベルラドの公[440](князь Берладьскии)〔イヴァン [A1221]〕と軍兵を派遣した。〔ノヴゴロド人は〕どこかで小人数で戦った。ノヴゴロド人は〔川の〕中州に陣を敷いた。かれら〔ベルラドの公の軍勢は〕はこれに対抗して陣を敷き，舟を敷き並べて砦をつくりはじめた。3 日目にノヴゴロド人はかれらに向かって進軍し，戦闘が行われた。双方で多くの者が斃れた。その数はスーズダリ人が多く，数えきれないほどだった。

同じ年の冬，数千人のエミ人 (ѣмь) が，ヴォヂ人[441] (водь) を攻める遠征を行い，到来して戦争を仕掛けた。ノヴゴロド人はこのことを聞いて，かれら〔エミ人〕を迎え撃つべく，およそ 500 人がヴォヂ人と共に遠征した[442]。かれら〔エミ人〕のひとりたりとも取り逃がすことはなかった[443]。

439）「ユーリイは少人数で行ったことを聞きつけると」(учювъ Гюрги, оже въ мале шли) の文は *H1-C (Сн)* のみの読みだが，物語の叙述に不可欠な部分であることから本来あった読みで，*H1-M (Км, Ак)* では，編集初期の段階でこの文が脱落したと考えられる。

440）この「ベルラドの公」(князь Берладьскии) とは，ガーリチ公一族出身のイヴァン・ロスチスラヴィチ [A1221] のこと。かれは，1144 年に伯叔父のウラジミルコ [A121] から一時的にガーリチを奪取したが，戦いに敗れてキエフに逃げのび，キエフ公フセヴォロド [C41] のもとに身を寄せ（1146 年），その死後，スヴャトスラフ [C43] を頼ってノヴゴロド＝セヴェルスキイへ行き，さらに 1147 年にはスモレンスク公ロスチスラフ [D116:J] のところに，1148 年にはスーズダリのユーリイ [D17] のもとに身を寄せて勤務していた。1149 年のこの遠征は，庇護者のユーリイ公に命じられて行ったもの。

その後（1157 年）かれは，ユーリイのもとからドナウ川方面へ逃亡して，プルート川下流域の城市ベルラド (Берлад) に（現在のルーマニア東部のブルラド (Bârlad) 市に相当）へ行き，その地の逃亡自由民たちを糾合して戦闘や略奪を行ったことから，年代記ではイヴァンのことを「ベルラド人」(Берладник) と呼んでいる。本年代記の呼称も，おそらくそれにならったものだろう。

441）「ヴォヂ人」(водь) は，フィン・ウゴル系の民族で，現ロシア，レニングラード州のフィンランド湾沿岸地帯に居住していた。英語読みではヴォート人 (Votes)。年代記では，*H1-C*6577(1069 年) 記事に вожяны の名で最初の言及があり（[ノヴゴロド第一年代記 (4)：注 127]），このときはノヴゴロドを攻めるフセスラフ [L] の陣営に属していた。

442）エミ人は 1142 年夏にラドガ地方のノヴゴロドの領地への遠征を行っており，ヴォヂ人の居住地はこの領地と隣接している（前注）ことから，これと同様のエミ人による掠奪遠征だったのだろう。このころ，ヴォヂ人はすでにノヴゴロドの支配下に入り，貢納者になっていたことから，ノヴゴロド人にとっては自領地への掠奪行為として，撃退のための遠征軍を派遣したのである。

なお，「かれらを迎え撃つべく，およそ 500 人がヴォヂ人と共に遠征した」(любо въ 500 съ водью идоша по нихъ) は *Сн* の読みで，*Км, Ак* は идоша по нихъ въ 500 с воеводою（かれらを迎え撃つべく，500 人が軍司令官とともに遠征した）となっている。後者の司令官名の記されていない с воеводою は不要な表現であることから，二次的改変によるものと解釈し，*Сн* の読みを採った。

443）「ひとりたりとも取り逃がすことはなかった」(не упустиша ни мужа) の定型表現については，上注 370 を参照。

同じ夜，月にしるしがあった。全体が消えてしまった。早課[444]のときに，再び丸くなった。2 月だった[445]。

6658(1150) 年。

大主教ニフォントがキエフから戻った。ユーリイ公 [D17] によって自由にされたのである。そこでノヴゴロドの人々は喜んだ[446]。

6659(1151) 年。

イジャスラフ [D112:I] はヴャチェスラフ [D16] とともに，ペレヤスラヴリの近くで，ユーリイ [D17] を打ち負かした。7 月 17 日だった[447]。

444）早課 (заутрьняя) は，ほぼ現在の午前 3 時（日の出前）から 6 時（日の出の時）までの時間帯に行う奉事のこと。

445）記述内容から，皆既月食のことを言っているのは明らかである。6657 年の記事の最後に「2 月」(феврар) と記されているので，これは 1150 年 2 月になる。しかし，1150 年のノヴゴロド地方では 2 月に皆既月食は観察されていない。3 月 15 日に皆既月食は起こったが，日の出の時に，食の状態のまま月は沈んでいることから「再び丸くなった」状態は観察できない [Святский 2007: С. 145-146]。そのため，年紀の錯誤によって，月食の記事がここに置かれたという説が出されている。すなわち，1161 年 2 月 12 日に観察された皆既月食は，本記事の記述と合致し，*H1* の 1161 年の項には言及がないことから，このときに月食の記事が，誤って 6657(1149/50) 年の年紀のもとに置かれたという推定もなされている [Святский 2007: С. 167, Прим. 9]。

446）主教ニフォントは，1149 年 9 月にキエフの公座に就いたユーリイ手長公の手によって，およそ 1 年続いた洞窟修道院における拘禁から解放された（上注 432 参照）。この，ニフォントのノヴゴロドへの帰還は，6658 年の初め，すなわち 1150 年 3 月頃のことと考えられる。

447）1151 年 2 月～ 3 月にイジャスラフ [D112:I] はキエフの公座をユーリイから奪回し，まもなく叔父のヴャチェスラフ [D16] をキエフに招いて公座を引き渡す。ユーリイは公座回復のためのキエフ遠征をするが，5 月のルート川の合戦に敗れてペレヤスラヴリへ逃げる。*Ип*6659(1151) 年記事によれば，1151 年 7 月にイジャスラフとヴャチェスラフはユーリイ討伐の遠征を行い，ペレヤスラヴリ郊外で二日戦って，三日目に交渉を行い，ボリスとグレーブの祝祭日である 7 月 24 日に講和を結んで，ユーリイにスーズダリへ退去することを承諾させている [ПСРЛ Т. 2: Стб. 442-443]。この記事を考慮に入れると，本記事の 7 月 17 日は，ペレヤスラヴリ郊外での戦いの日付と見ることができる。

なお，この年に起こったキエフ公座をめぐる一連の戦闘のうちで，本記事でとくにこの戦いについて記されているのは，この戦闘によって，ユーリイとのキエフ公座を巡る確執が一段落させた事件として，とりわけ意義があったからだろう。

同じ年の冬，イジャスラフ [D112:I] の公妃が逝去した[448]。

同じ年，大主教ニフォントが，聖ソフィア〔大聖堂〕の〔屋根の〕全体を完全に鉛で葺いた。そして，〔壁の〕周り全体を石灰で塗った。

その頃，二つの教会が創建された。聖ヴァシーリイ[449] (Святии Василии)〔教会〕と聖コンスタンティノス帝とその母ヘレナ[450](Святая цесарь Констянтин и матерь его Елена)〔教会〕である。

6660(1152) 年

4 月 23 日のこと，商業地区[451] (средѣ Торга) にある聖ミハイル教会[452] (церкви святого Михаила) から火が出た。それは多くの悪をなした。商業地区全体で，〔北方向のあちら側は〕小川[453] (ручье) までの屋敷〔商業施設〕が焼けた。〔南東方向の〕こちら側はスラヴ

448）この「公妃」(княгыни) はイジャスラフ [D112:I] の最初の結婚のときの妻だが，この箇所以外に史料の言及はなく出自も不明。息子たちの年齢からみて，1030 年以前に結婚したことが推定できるにすぎない。ドンブロフスキはその出自の考察に頁を費やして，わずかにルーシ公家の出身を示唆している [Домбровский 2015: С. 120-125]。なお，その死亡記事は，*Ип* 及び *Лвр* に 6659(1151) 年の項の最後の記事として記されており，その年代はやはり 1151/52 年冬，おそらくは 1152 年 2 月頃のことと推定できる。

449）ノヴゴロドの史料には「聖ヴァシーリイ教会」(церквь Святии Василии) についての記述は何度も登場するが，その名を持つ教会は二つあり，第一はパリオンの主教聖バシレオス（9 世紀）(святой Василий, епископ Парийский; Βασίλειος Παρίου) に献堂された教会で，第二は，カエサリアの主教聖大バシレオス（святой Василий Кесарийский; Βασίλειος ο Μέγας, Καισαρείας）に献堂された教会である。ともにリューディン区のヤルィシェヴァ通り (Ярышева улица) にあった。「聖ヴァシーリイ教会」についての本年代記の言及はこの箇所が初出だが，どちらの教会であるかは定めがたい [Великий Новгород. Энциклопедический словарь: С. 521]。

450）「聖コンスタンティノス帝と聖ヘレナ」に奉献された教会はノヴゴロドに二か所あり，ネレフスキイ区東に並行しているヤネヴァ通り (Янева улице) とロストキナ通り (Росткина улица) にそれぞれ位置して，両者は近接していた。本記事がそのどちらに当たるかは定めがたい [Великий Новгород. Энциклопедический словарь: С. 524]。

451）「商業地区」(Торг) は，いわゆる Торговая сторона のことで，ヴォルホフ川を挟んで，ソフィア地区 (Софийская сторона) の対岸の外壕の内側全体を指している。

452）「聖ミハイル教会」(церкви святого Михаила на Торгу) は，大天使ミカエル (архангел Михаил) に奉献された教会で，スラヴェンスキイ区のミハイロヴァ通り (Михайлова улица) とヴィトコフ通り (Витков переулок) の交差点に位置していた。1300 年に石造りの聖堂が定礎されるが，それまでは木造だった。[Великий Новгород. Энциклопедический словарь: С. 478]。

453）「小川」(ручье) は，商業地区のプロトニツキイ区 (Плотоницкий конец) とスラヴェンスキイ区 (Славенский конец) の境にあたる，フョードロヴァ街〔現在のシトナヤ通り (Щитная улица)〕と並行して流れている（上注 51 参照）。

ノ[454] (Славно) まで，8 つの教会が焼けた。9 番目には，ヴァリャジスカヤ[455] (Варазьская)〔通りの教会が焼けた〕。

6661(1153) 年

神を愛する大主教ニフォントがラドガ (Ладога) へ行った。そして，聖クリメント (святыи Климент) の石造りの教会を定礎した[456]。

同じ年，典院アルカージイ (Аркадъ, Аркадии) は聖なる聖母就寝教会 (церковь святыя Богородиця Успение) を**定礎し**[457], 自分のために修道院を開基した[458]。これは, キリスト教徒にとっては避難所であり，天使には喜び，悪魔には滅びであった。

6662(1154) 年

ノヴゴロド人はヤロスラフ公 [I2] を追放した[459]。〔1154 年〕3 月 26 日だった。そして，ム

454）「スラヴノ」(Славно) は，スラヴェンスキイ区をほぼ南北に走るスラヴナヤ街 (улица Славная или Большая-Пробойная) のこと（上注 51 参照）。

455）「ヴァリャジスカヤ通り」(Варажская улица) は，スラヴェンスキイ区の南側を東西に走り，スラヴナヤ通り（前注）と交差する。

456）この石造りの「クリメント教会」（1 世紀末のローマ司教（88–97 年）クレメンス一世 (Clemens Romanus; Κλήμης Ῥώμης) に献堂されている）は，ラドガ (Старая Ладога) の現在の城塞 (Крепость) に隣接する内城 (Земляное городище) に位置しており，20 世紀の発掘によってその遺構が確認されている。17 世紀 初めのスウェーデン人デラガルディの攻撃の際に損壊したらしく，1646 年の記録によれば木造に改築されている [Раппапорт 1982: C. 78-79]。

457）異読があり，*Км*, *Ак* заложи（定礎した）だが，*Сн* сруби（丸太組みで建てた）となっている。

458）これは，現存するアルカージイ聖母就寝修道院 (Аркажский Успения Пресвятой Богородицы монастырь) の主教会で，ノヴゴロド内城から南方およそ 3km に位置している。当時は木造の聖堂が建設されただけだが，後には，ユーリエフ修道院と並んでノヴゴロドでは重要な意義を持つようになった。「これは, キリスト教徒にとっては……」の句はそれを踏まえた後代の追加だろう。なお, アルカージイは, 主教ニフォントの死後の 1156 年に主教に選ばれ，1158 年に叙任されている。

459）ヤロスラフ [I2] は，1148 年秋に,「悪事」により追放されたスヴャトポルク [D114] の代わりに，父のキエフ公イジャスラフ [D112:I] によってノヴゴロドに派遣され，ノヴゴロド人に受け入れられている（上注 425）。この追放の時点で，すでに 5 年半以上にわたってノヴゴロドの公座に就いていたことになり，その間，とりわけ「悪政」を行ったとは年代記に記されてはいない。そのため，この追放はノヴゴロド人（主教・貴族）の主導によるというより，スモレンスク公ロスチスラフ [D116:J] の側からの強い働きかけによって行われたものと推定される。

なお，この追放についてソロヴィヨフはヤロスラフが市民との約定を破ったことが原因と推定しており [Соловьев 1988: C. 480]，ヤーニンは都市内の貴族の対立によるものではなく，公の抑圧に反発した民衆の暴動によるものではないかと考えている [Янин 2003: C. 143]。

スチスラフ [D11] の息子ロスチスラフ [D116:J] を[460]〔公座に〕導き入れた。4 月 17 日だった[461]。

同じ年，聖サヴァ教会 (церковь святого Савы) が建てられた[462]。

同じ年，イジャスラフ [D112:I] がキエフで逝去した。11 月 14 日だった[463]。

その頃，ロスチスラフ [D116:J] は，ノヴゴロドからキエフへ，公座に就くべく向かった[464]。ノヴゴロドには息子のダヴィド [J3] を残した[465]。そして，ノヴゴロド人は憤激した。なぜなら，〔ロスチスラフは〕かれら〔ノヴゴロド人〕のための約定を行わず，むしろ〔約定を〕破った

460）次の異読があり，*Сн*, Ростислава, сына Мьстиславля; *Км, Ак* Мьстислава, сына Ростиславля, 親子関係が逆になっている。かりに後者が Ростислав Мстиславич [J5] のことを指すとすると，その生年は 1150 年前後であり，時代的に整合しない。これは，*H1-M* 編集過程での誤認（誤記）による読みだろう。

461）*Ип* 及び *Лвр* 6662(1154) 年の冒頭に近い記事（すなわち 1154 年 3 月頃の出来事と想定される）では「ノヴゴロド人はヤロスラフ・イジャスラヴィチ [I2] を追放し，ロマン [J1] を〔公として〕据えた」(выгнаша Новгородци Изяславича Ярославича, Романа посадиша) とあり [ПСРЛ Т.2 : Стб. 468] [ПСРЛ Т. 1: Стб. 341]，ノヴゴロドの公座を引き継いだのは，本記事のロスチスラフ [D116:J] ではなく，その息子のロマン・ロスチスラヴィチ [J1] であるとしている。もっとも，1154 年 3 月 26 日のヤロスラフ [I2] 追放後，4 月 17 日にロスチスラフ [D116:J] がノヴゴロドに「導入」されるまでの 24 日の間，ロマン [I1] がスモレンスクからノヴゴロドに派遣されて，公座に就いていたが，短期間なので *H1* では記されなかったという解釈は可能であり，これによって二つの記事の内容の辻褄をあわせることできる。ただ，本 *H1* 記事の記述は日付も含み具体的であることから，研究上の通説では，ヤロスラフ [I2] の後は，ロスチスラフ [D116:J] がノヴゴロドの公座を引き継いだとされている。

462）これは，ネレフスキイ区コズモデミアンスカヤ通り (Козмодемъянской улице) にあった，5-6 世紀の修道院規則の著者パレスチナの聖サヴァス (Савва Освященный, Σάββας ο Ηγιασμένος) に奉献された教会。

463）イジャスラフ公 [D112:I] の死没については，*Ип*6662(1154) 年記事に讃詞の文体の詳しい記述があり，十字架挙栄の日（9 月 14 日）に病みつき，ピリポの日 (11 月 14 日) に没したとあり，日付は本記事と合致している [ПСРЛ Т. 2: Стб. 469]。

464）*Ип*6662(1154) 記事によれば，イジャスラフの死を受けてキエフで共同統治をしていた叔父ヴャチェスラフ [D16] はロスチスラフを呼び寄せる使者を遣り，かれが「スモレンスクから」来るのを待ち，ロスチスラフは「スモレンスクからキエフへ」やって来た [ПСРЛ Т. 2: Стб. 470] とされている。本記事の「ノヴゴロドからキエフへ」との記述と異なるが，ノヴゴロド⇒スモレンスク⇒キエフの行路で来たとすれば，ひとまずの解釈は可能である。ロスチスラフのノヴゴロド出発は 1154 年 11 月末と考えられ，その場合かれのノヴゴロド公座在位期間は 7 ヶ月ほどだったことになる。

465）次の異読がある。*Сн* оставивъ сына Давыда; *Км, Ак* оставивъ сына своего どちらが本来の読みであるか定めがたい。ただし，下注 472 の *Км, Ак* の同じ句 сын его の読みが二次的であることから，この箇所も *Сн* が本来的である可能性が高い。

なお，ロスチスラフ [D116:J] による，息子ダヴィド [J3] のノヴゴロド公代理（代官）指名については，*Ип, Лвр* に記述はない。本記事で，「残した」(оставивъ) とあることから，ノヴゴロド人の同意をとらない，ロスチスラフの一方的な措置だったと考えられる。ダヴィドの生年は 1140-41 年であり [Домбровский 2015: С. 444]，このとき 13-14 歳にすぎなかった。

からである。そして,〔ノヴゴロド人は〕かれの息子〔ダヴィド [J3]〕に, かれ〔ロスチスラフ〕のあとを追って〔去るように〕道を示した[466]。

その頃,〔ノヴゴロド人は〕ニフォント猊下を上級の貴族たち[467]とともに，ユーリイ [D17] のもとに派遣して,〔その〕息子を〔ノヴゴロド公として〕求めた。そして，ユーリイ [D17] の息子ムスチスラフ [D17A] を〔公座へ〕導き入れた。〔1155 年〕1 月 30 日だった[468]。

同じ年の冬，ヴャチェスラフ [D16] がキエフで逝去した[469]。

その頃, ロスチスラフ [D116:J] は,〔キエフの公座に〕一週間座してから[470]，キエフからチェルニゴフへ〔遠征に〕行った。奸策によってかれ〔ロスチスラフ〕は打ち負かされた。そして,

---

466）ノヴゴロド人の「憤激」(вознегодоваше) の理由は，ロスチスラフ [D116:J] がノヴゴロドの公座に就いたとき（上注 458）にノヴゴロド人と結んだ「約定」(ряд) で定められた公の義務が，年少の息子を代官に置くことで，もはら果たされないと見なしたのだろう。以下の経緯が示すように，ノヴゴロドの行政府（主教，上級貴族）は，公の招聘先を，ロスチスラフ一族からユーリイ一族へと，すぐさま方針転換している。

なお,「道を示した」(показаша путь) は自主的な退去を促したということで，本人に大きな非がないような場合に用いられる（[ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 510 参照]）。

467）「上級の貴族たち」と訳した передние мужи は，文字通りは「前にいる身分の高い者たち」という意味で，ここでは，ノヴゴロド貴族の中のとりわけ位や格式の高い者を指している。この使節団が特に重要な使命を負っていたことが分かる。

468）*Ип. Лвр* ともに 6662(1154) 年の項の終わりに近い記事で,「その時，ノヴゴロド人がユーリイ [D17] のもとにやって来て, かれのもとから, 息子のムスチスラフ [D17A] を, 自分たちの公として受け入れた」[ПСРЛ Т. 2: Стб. 476][ПСРЛ Т. 1：Стб. 344] と同じ内容の文言が記されている。ここには日付は記されていないが。この記事の時系列から見ても,「1 月 30 日」のムスチスラフのノヴゴロド入りは信頼できるだろう。「ノヴゴロド公表」[№ 107] によるとかれは「2 年 1 か月」公座に座していたとあるので, 1157 年 3 月に追放されたことになる［ノヴゴロド第一年代記 (2)：注 519］。

469）ヴャチェスラフ [D16] の死について，*Ип*6662(1154) 年記事では，キエフ公ロスチスラフ [D116:J] がチェルニゴフへ向けて, イジャスラフ [C35] 討伐遠征に出立した翌日に (*Лвр* ではドニエプル川を渡ったところで)，ヴャチェスラフの訃報を受け取ったとある。この記事は，*Ип* ではムスチスラフ [D17A] のノヴゴロド公としての受け入れ記事のかなり前に置かれている（*Ип* では次注にように次に置かれている)。おそらく，*Ип. Лвр* の記事の時系列が正しく，本 *H1* 記事で「冬に」とあるヴャチェスラフの死没の時期は, 1155 年 1 月より前, おそらく 1154 年 12 月と推察できるが, 確定的な日付は不明である。

470）ロスチスラフ [D116:J] が「キエフに一週間座してから」(сѣдевъ Кыевѣ неделю) というのは, かれが，ノヴゴロドからスモレンスク経由でキエフに到着して（上注 461)，叔父ヴャチェスラフ [D16] とキエフ人（貴族）から正式に公座を譲られてから，チェルニゴフへの遠征の翌日にヴャチェスラフの死を知るまでの期間のことを言っているのだろう。1154 年の 12 月中の一週間ということになる。

イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] がキエフで〔公座に〕座した[471]。

6663(1155) 年

聖枝祭の主日に，ユーリイ公 [D17] がキエフに入城し[472]，〔キエフの〕公座に座した。他方，イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] はチェルニゴフへ逃げた。

そして，ユーリイ [D17] はかれ〔ユーリイ〕の甥たちを[473]，和議をもって受け入れ，和解した。そして，かれらに然るべき領地を分け与えた[474]。そして，ルーシの地は平静になった。

471）*Ип*6662(1154) 年記事によれば，ロスチスラフ [D116:J] は，叔父ヴャチェスラフ [D16] の訃報を聞くと（前々注，前注参照），部隊をドニエプル川の対岸に残して，自分はキエフに戻って葬儀を行った。その後，ロスチスラフはすぐに部隊に戻り，イジャスラフ [C35] 討伐のチェルニゴフ遠征を継続した。イジャスラフは，この機を利して，ポロヴェツ人とユーリイの息子グレーブ [D178] を味方につけて大軍をもって対抗し，チェルニゴフ郊外の戦いでロスチスラフ軍を圧倒した。その結果，ロスチスラフはスモレンスクへ逃げ，イジャスラフはそのままキエフへ進軍して，公座に座した。

ここで，ロスチスラフが「奸策によって打ち負かされた」(побѣдиша и, прельстивше) とあるのは，イジャスラフがポロヴェツ人の大軍を引き入れたことを言っているのだろう。

472）「聖枝祭の主日」(вербьниця) とは復活祭一週間前の日曜日（主日）で，1155 年 3 月 20 日に相当する。なお，この祝日はキリストのエルサレム入城を記念するもので，いかにもキエフ入城の日として適した祝日が選ばれている。

473）「かれの甥たち」には異読があり，*Км, Ак* сынъ его; *Сн* сыновьць となっている。前者は сын が単数対格形で，次の文の имъ（かれらに）と文法的な数が一致しないこと，его は свои (своего) でなければ不自然であることなどから，二次的な改変によるもので，後者が本来の形と思われる。*Сн* の語形は сыновец の複数対格形で，сыновец は広い意味での брат（兄弟・従兄弟・又従兄弟）の息子を指している。具体的には，スモレンスク公ロスチスラフ [D116:J]，ヴラジミル＝ヴォルィンスキイ公ウラジーミル [D115] などの甥たちの他に，遠縁の従兄弟たちであるチェルニゴフ公イジャスラフ [C35] やノヴゴロド＝セヴェルスキイ公スヴャトスラフ [C43] も指しているのかもしれない。

なお，この部分は典拠と想定される記事が「子供たちに」(дѣтемъ) となっていることから（次注 471），сынови（息子たちに）が，誤って сыновец と筆写されて伝わった可能性もある。

474）ユーリイのキエフ入城について，*Ип* 6663(1156) 記事では，и <u>прия</u> [его] <u>с радостью</u> вся земля Руская. тогды же сѣдъ, <u>раздая волости</u> дѣтемъ.（全ルーシの地がかれを喜びとともに受け入れた。その時，〔ユーリイは〕公座に座すと，子供たちに領地を分け与えた）とあり，これは本 *Hl* 記事の и <u>прия</u> Юрьи сынъ его [сыновьць] в миръ <u>с любовию, и волости</u> имъ <u>раздая</u> достоиныя（ユーリイ [D17] はかれ甥たちを 和議をもって受け入れ，和解した。そして，かれらに然るべき領地を分け与えた）の文と下線部分が語彙，構文ともに類似している。おそらく，*Hl* 記事は *Ип* 記事（もしくはその資料）を典拠にして改変し，日付などの新しい情報を加えて作成されたものだろう。

参考文献

Богданов 2005 — Богданов С.В. К изучению термина «волок» письменных источников XIII-XV вв. // Новгород и Новгородская земля. История и археология: Материалы научной конференции. Великий Новгород, 2005. Вып. 19. С. 234-262.

Великий Новгород. Энциклопедический словарь — Великий Новгород. История и культура IX-XVII веков: Энциклопедический словарь. СПб., 2009.

Вопрошание Кириково — Памятники древнерусского канонического права. СПб., 1880. Ч. 1 (Русская историческая библиотека, т. 6). Стб. 21—62.

Гиппиус 2004 — А.А. Гиппиус. О нескольких персонажах новгородских берестяных грамот XII века // В.Л. Янин, А.А. Зализняк, А.А. Гиппиус. Новгородские грамоты на бересте: Из раскопок 1997-2000 годов. Т. XI. М. 2004.

Горский 2001— Горский А. А. «Всего еси исполнена земля русская...»: Личности и ментальность русского Средневековья. М. 2001.

Домбровский 2015 — Домбровский Д. Генеалогия Мстиславичей: Первые поколения (до начала XIV в.). СПб., 2015.

Егоров 1927 — Егоров В. А. Новгородские храмы как памятники русско-финских отношений // Отчет за первые два года деятельности ЛОИКФУН, Л., 1927.

Житие Антония Римлянин — Житие прп. Антония Римлянина // Православный собеседник. 1858. № 5. С. 151-171; № 6. С. 310-324. http://krotov.info/acts/16/2/antony_rim.htm

Загревский 2009 — Заграевский С.В. О гипотетическом «промежуточном» строительствесобора Рождества Богородицы в Суздале в 1148 году и первоначальном виде суздальскогохрама 1222–1225 годов. В кн.: Материалы межрегиональной краеведческой конференции (28апреля 2008 г.). Владимир, 2009. С. 218–235.

ИГР-2 — Карамзин Н. М. История государства Российского. Т. 2.

Комментарии к ПВЛ 1950 — Повесть временных лет. Ч. 2. Приложения / Статьи и коммент. Д.С. Лихачева; Под ред. В.П. Адриановой-Перетц; Ред. изд-ва А.А. Воробьева. М.; Л., 1950. С. 203–484.

Комментарии к ПВЛ 2012 — Повесть временных лет / Пер. с древнерусского Д. С. Лихачева, О. В. Творогова. Коммент. А. Г. Боброва, С. Л. Николаева, А. Ю. Чернова при участии А. М. Введенского и Л. В. Войтовича. СПб., 2012. С. 183–380.

Конькова 2009 — Конькова О. И. Водь. Очерки истории и культуры.СПб., 2009.

Кудряшов 1948 — Кудряшов К. В. Половецкая степь. М., 1948.

Лавренченко 2015 — Лавреннченко М. Л. «Приятели» русских князей (По текстам летописей за XII век) // Славяноведениие № 2, 2015. С. 96 - 108.

Литвина, Успенский 2006 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Выбор имени у русских князей в X-XVI вв. М., 2006.

Лихачев 1986 (1948) — Лихачев Д. С. «Софийский Временник» и новгородский политический переворот 1136 г. // Лихачев Д. С. Исследования по древнерусской литературе. Л., 1986. (Исторические записки. М., 1948, т. 25, с. 240–265).

Лосева 2001 — Лосева О. В. Русские месяцесловы XI-XIV веков. Под ред. акад. Л. В. Милова. М., 2001.

Макарий 1860 Ч. 1 — Макарий (Миролюбов), архимандрит. Археологическое описание церковных древностей в Новгороде и его окрестностях. Ч. 1. М., 1860. (Древние церкви в Новгороде и его окрестностях).

Мильков В.В., Симонов Р.А. 2011 — Мильков В.В., Симонов Р.А. Кирик Новгородец ученый и мыслитель. М., 2011.

Моргунов 2017 — Моргунов Ю. Ю. К изучению трасс кочевых набегов на Южную Русь // Памятники средневековой археологии Восточной Европы к юбилею М. Д. Полубояриновой. М_2017. С. 201–208.

Морозов 2007 — Морозов Н.А. Новый взгляд на историю Русского государства. СПб., 2007.

Мусин 2016 — Мусин А. Е. Загадки дома Святой Софии: Церковь Великого Новгорода в X-XVI вв. Спб., 2016.

Назаренко 2019 — Назаренко А. В. Кое-что о двух русских митрополитах XI в., Ефреме Киевском и Ефреме Переяславском // Древняя Русь. Вопросы медиевистики. 2019. № 1. С. 87–90.

Насонов 1951 — Насонов А.Н. Русская земля и образование территории древнерусского государства. М., 1951.

НГБ IX, 1993 — Янин В. Л., Зализняк А. А. Новгородские грамоты на бересте: (Из раскопок 1984—1989 гг.). М., 1993.

Погодин 1848 — Погодин М. П. Древние русские княжества с 1054 по 1240 год. СПб., 1848.

Полный месяцеслов Востока I — архиепископ Сергий (Спасский) Полный месяцеслов Востока Том I. Восточная агиология. М., 1901.

Православная Энциклопедия — Православная Энциклопедия. Т. 1 — М., 2000.

ПСРЛ Т.3, 1841 — Полное собрание русских летописей: Новгородская вторая и третья летопись. М., 1841.

ПСРЛ Т. 9 — Полное собрание русских летописей: Том 9, Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью. М., 2000.

Раппапорт 1982 — Раппопорт П.А. Русская архитектура X-XIII вв. Л., 1982.

Рыдзевская 1922 — Рыдзевская Е. А. Холм в Новгороде и древнесеверный Holmgarðr // Известия Российской Академии истории материальной культуры. Пг., 1922. Т. II. С. 105—112.

Святский 2007 — Святский Д.О. Астрономия Древней Руси. М., 2007.

СлРЯ XI-XVII Вып. 1–30 — Словарь русского языка XI-XVII вв. Вып. 1–30.

Смирнов 1913 — Смирнов С. И. Материалы для истории древнерусской покаянной дисплины. М., 1913.

Соловьев 1988 — Соловьев С. М. Сочинения Кн. 1: История России с древнейших времен Т. 1-2. М., 1988.

Срезневский Материалы — Срезневский И. И. Материалы для словаря древне-русского языка по письменным памятникам. Т. I-III. дополнения. СПб., 1893–1903. Репринт: Graz, 1971.

Степанов 1909 — Степанов Н. В. Единицы счета времени (до XIII века) по Лаврентьевской и I-ой Новгородской летописи. // Чтения в Обществе истории и древностей Российских. Т.4. М., 1909.

Тихомиров 1946 — М. Н. Древнерусские города М., 1946.

Фасмер Т. 1–4 — Фасмер, Макс. Этимологический словарь русского языка. Том 1–4. М., 1987.

Фроянов, Дворниченко 1988 — Фроянов И. Я., Дворниченко А. Ю. Города-государства Древней Руси. Л., 1988.

Фроянов 1992 — Фроянов И. Я. Мятежный Новгород. Очерки истории государственности, социальной и политической борьбы конца IX - начала XIII столетия. СПб., 1992.

Шахматов 2002 (1908) — Шахматов А. А. История русского летописания. Т. I: Повесть временных лет и древнейшие русские летописные своды. Кн. 1: Разыскания о древнейших русских летописных сводах. СПб., 2002. (текст “Разысканий о древнейших русских летописных сводах”

публикуется по изданию 1908 г.)
Янин 2003 — Янин В. Л. Новгородские посадники. М., 2003.
Янин 2008 — Янин В. Л. Очерки истории средневекового Новгорода М., 2008.
Янин, Гайдуков 2000 — Янин В. Л., Гайдуков П. Г. Древнерусские вислые печати, зарегистрированные в 1998—1999 гг. // Новгород и новгородская земля. История и археология. 2000. № 14. С. 283-314.
PVL 2003 — The Pověst' vremennykh lět: An Interlinear Collation and Paradosis, Complied and edited by Donald Ostrowski [Harvard Library of Early Ukrainian Literature. Texts: Volume X, part 1–3] (Cambridge, Massachusetts, 2003).

イパーチイ年代記 (2) — 中沢敦夫，藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (2) —『キエフ年代記集成』（1118 ～ 1146 年）」（富山大学人文学部『人文学部紀要』62 号，2015 年 2 月）287-353 頁。
草加 2007 — 草加千鶴「中世ロシア法文献における慣習の反映 — ルースカヤ・プラウダを中心に」『創価大学大学院紀要』(28) 2007，209-225 頁。
中沢 2018 —「解説『キエフ年代記』の編集史について」（中沢敦夫『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (9) —『キエフ年代記集成』（1196 ～ 1199 年）所収），『富山大学人文学部紀要』（69 号，2018 年 8 月）241-265 頁
日月食等データベース — 日月食等データベース— 国立天文台暦計算室 https://eco.mtk.nao.ac.jp/cgi-bin/koyomi/eclipsedb.cgi
ノヴゴロド第一年代記 (1) — 中沢敦夫「『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈 (1)」『富山大学人文学部紀要』（76 号，2022 年 2 月）113-219 頁。
ノヴゴロド第一年代記 (2) — 中沢敦夫『ノヴゴロド第一年代記 (新編集版)』翻訳と注釈 (2)，『富山大学人文学研究』(第 77 号，2022 年 8 月）167-271 頁。
ノヴゴロド第一年代記 (3) — 中沢敦夫『ノヴゴロド第一年代記 (新編集版)』翻訳と注釈 (3)，『富山大学人文学研究』(第 78 号，2023 年 3 月）237-310 頁。
ノヴゴロド第一年代記 (4) — 中沢敦夫『ノヴゴロド第一年代記 (新編集版)』翻訳と注釈 (4)，『富山大学人文学研究』(第 79 号，2023 年 8 月）127-177 頁。
ゴルスキー 2020 — A・A・ゴルスキー著，宮野裕訳『中世ロシアの政治と心性』（刀水書房，2020 年）
こよみの計算長期版 — こよみの計算長期版 - 国立天文台暦計算室 https://eco.mtk.nao.ac.jp/cgi-bin/koyomi/koyomiy.cgi
宮野裕 2022 — 「中世ロシアの教会問答集「キリクの質問」(1) 改訂版をめぐる論争についての一考察及び試訳 (1-80 問)」『岐阜聖徳学園大学紀要』61 号，2022 年，87-108 頁。
ヤーニン 2001 — V・L・ヤーニン著，松木栄三，三浦清美訳『白樺の手紙を送りました — ロシア中世都市の歴史と日常生活』（山川出版社，2001 年）

※ 年代記とその写本の略号については，［ノヴゴロド第一年代記 (1)：212-213 頁］を参照。

〔後記〕

本稿は共同研究「『ノヴゴロド第一年代記』講読会」の研究活動の成果である。講読会の参加者は次の通り。宮野裕（岐阜聖徳学園大学教育学部教授），岡本崇男（神戸市外国語大学名誉教授），今村栄一（公益財団法人河川財団名古屋事務所研究員），草加千鶴（創価大学非常勤講師），伊丹聡一朗（明治大学大学院博士後期課程），岸慎一郎（塾講師）。